用したものとがある。ロクロを使用しないもの（5）はピット2底面上から出土したもので、口縁部約⅓の残存片のみである。残存部位が少ないため全器形が把えられないが、口径より器高が小さくなり、体部に最大径の位置があるものと見られる。しかし、その差は比較的小さくなるのではないかと考えられる。体部はやや丸味をもつ。口縁部は単純に丸味をもちながら短く外反し、口唇部で丸くおさまる。器面調整は口縁部が内外とも横ナデ、体部外面が軽いヘラケズリである。内外面口縁部に煤状の附着がある。

6・7・8・9・10はロクロ使用によって製作されたもので、5個体出土している。やや小型のもの（6・7・8）と大型のもの（9・10）がある。8以外は体部下半、底部を欠き器形全体について不明の点もあるが、口径より器高が大きく、口縁部に最大径をもつものと考えられる。（10は体部に最大径があると思われる）ただ、その差は余り大きくない。6は口縁部が短く外反し、口唇部で内弯気味に上方へつまみ出している。7は体部上半が丸味が強く、口縁部とほぼ同じ最大径をもつ。口縁部は短く外反し、口唇部は上方につまみ出している。器面調整は、口縁部は内外面ともロクロナデ、体部外面上半は下方向へのヘラケズリ、体部内面は上半部がロクロナデ、下半に刷毛目痕が若干観察される。8は口縁部径20cm、底部径10cm、器高21cmで、口縁部径と器高がほぼ同じ大きさである。体部は直線的につくり出されている。器面調整は外面において口縁部がロクロナデ、体部上半が下方向へのヘラケズリ、内面においては体部上半から口縁部にかけてロクロナデ、体部上半から下半にかけては横方向の刷毛目が施されている。9は口縁部と体部上半の一部だけが残存しているものである。推定口径は20.5cmであり、口縁部は短く外反する。器面調整はロクロナデによって仕上げられているが、外面体部に一部ヘラケズリが観察される。10はロクロによって製作されたものであるが、口縁部に製作時のゆがみが見られる。底部を欠くが、口縁、体部が約⅓の残存があり、推定口径は21.5cmである。最大径は体部にあると見られる。体部はやや開くが、直線的である。口縁部はやや長く外反し、口唇部は上方につまみ出している。器面調整は、内外面ともロクロナデであり、外面体部上半から下方向にヘラケズリを施している。

土器器面の色調は7・8が明赤褐色（2.5YR 5/8）、10が橙色（7.5YR 7/6）である。

須恵器

甕（第36図、図版26－8）

カマド燃焼部および煙出し部から出土した。カマド燃焼部出土のものは土師器甕片と共に出土したものであるが火熱を受けた痕跡はない。煙出し部からは2片出土したが、いずれも燃焼部出土の角礫と同じ淡緑色砂質凝灰岩2個と共に出土したものである。36図－3は大型甕の体部下半部である。器厚は約6㎜～10㎜の薄手であり、灰色（5Y 5/1）を呈する。器外面は平行叩き目、内面は指頭での圧痕が付されている。

第36図　ＢＥ06住居跡出土須恵器断面拓影図

石製品

砥石（第35図、図版26－３）　ピット３のやや北寄り、床面直上から出土した。粘板岩で、一端は折損しているため全長は不明であるが、現存値では長さ55㎜、幅30㎜、厚さ15～25㎜の小形の仕上げ砥石である。表裏と両側面の４面を砥面とし、特に両側面は使い込まれカーブし中細になっている。

ＣＣ.53住居跡（第37図、図版19）

〔遺構の確認面〕　ＢＥ06住居跡の南約18ｍ、調査地域東寄りの果樹園ＣＣ53グリッド周辺で確認された。確認面はＢＥ06住居跡と同じ黒褐色土層（Ｉａ層）を約30cm掘下げた火山灰質土Ⅱ層）である。

〔保存状況〕　検出面から床面までは約10cmのみで、特に住居跡東壁は５cm弱の残存だけであり、また埋土１と地山層（Ⅱ層）の火山灰質土が混在していたため、範囲の確認に多少の時間を要した。ＢＥ06住居跡に比べ、保存状況は悪い。

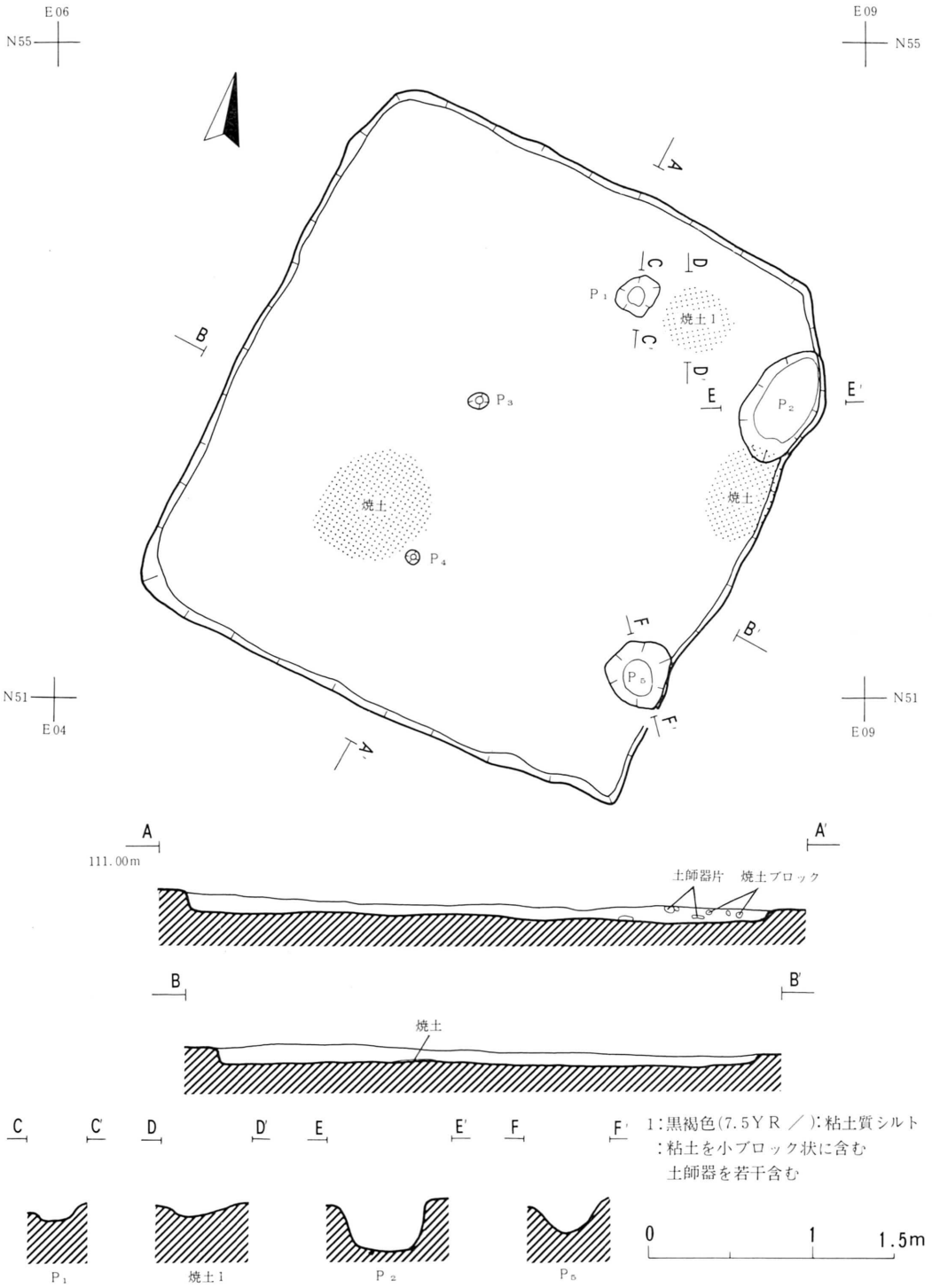
〔平面形・長軸方向〕　南北にやや長いが、ほぼ正方形である。長軸方向はＮ－15°－Ｅである。（Ｎ…座標北）

〔規模〕　大きさは、長（南北）軸3.5ｍ、短（東西）軸3.3ｍで、床面積は約10.9㎡である。

〔堆積土〕　遺構内の堆積土は基本的には１層のみである。

第１層（黒褐色土層）：粘土質シルト層である。基本土層Ⅱの粘土を小ブロック状に含み、やや黄褐色の色調を呈する。土師器片を若干含む。

〔壁〕　地山を壁とし、残存壁高は５～10cmである。東壁は削平著しく、約５cm程の残存高である。西壁で10cm、南壁６cm、北壁10cmである。いずれも東・南壁の残存高が少なく、このこ



第37図　ＣＣ53住居跡平・断面図

とは、住居跡上の現地表面が西側地点（住居跡埋土断面Ｂ上）で標高約111.15mに対し、東側地点（住居跡埋土断面Ｂ′上）ではそれより約30cmも低い。これは果樹園として利用される以前に屋敷跡として使われ、その際の削平などによったものと推定される。

〔**床面**〕　床面は住居跡中央部で若干高くなるが、ほぼ平坦な面をなしている。焼土は北東コーナー、ピット２の南寄り、中央部よりやや南西寄りの３カ所に認められた。それぞれの範囲は40cm×45cm、35cm×60cm、70cm×70cmの楕円状である。焼土の厚さは２～３cmである。掘り方の有無確認のため、床面を一部掘り下げたがその形跡は認められなかった。

〔**柱穴**〕　住居跡内の床面から５個のピットが確認された。各ピットの規模は次のとおりである。

第17表　ＣＣ53住居跡ピット計測表

規模＼ピット	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５
検　出　面(cm)	30×20	73×45	13×10	9 ×10	44×40
深　　さ(cm)	10	33	5	6	15

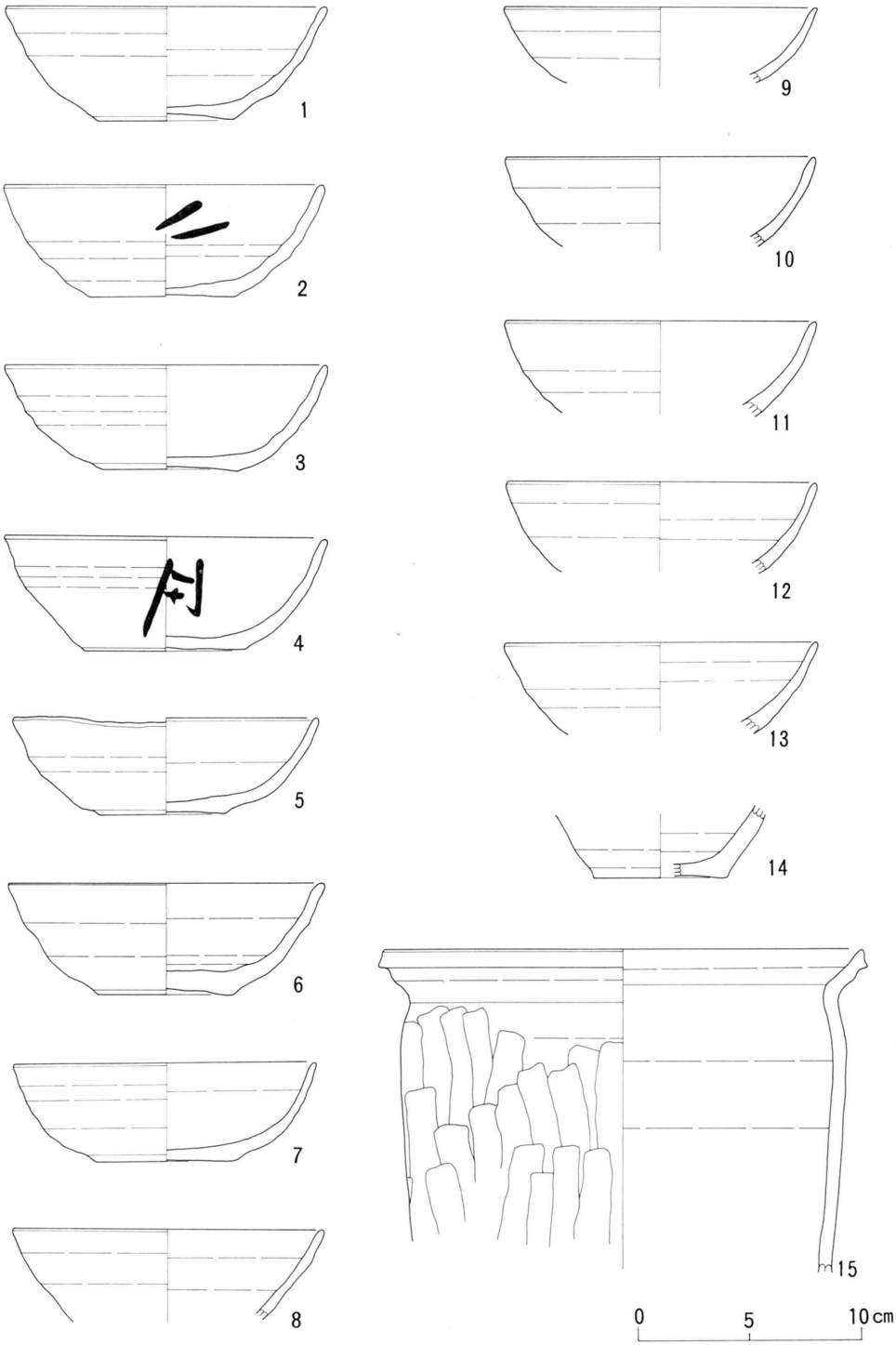
Ｐ１は住居跡北寄りに検出された。焼土、炭化片等もなく、不整形の浅いピットである。Ｐ２は東壁中央よりやや北寄りの地点に検出されたもので、楕円状のピットである。埋土は焼土灰、炭化片など混じった黒褐色土で若干、粘性のある柔らかい土である。ピット中から土器の出土も多く、完形の土師器坏など復元可能のものを含めて６個体、また土師器甕片なども多数出土した。Ｐ３、Ｐ４は大きさ、深さともその数値が小さい。Ｐ５は東壁中央よりやや南寄りの壁に接している。深さは15cmで埋土中に焼土片を若干混入する。

これら５個のピットの規模、配列からそれぞれの性格を考えてみると、Ｐ３・Ｐ４は住居に伴うものとは考えられない。Ｐ１、Ｐ５は柱穴痕とも考えられるが、深さにおいて若干の疑問がある。Ｐ２は土器の出土状況からみて貯蔵穴状のものと思われる。

〔**カマド**〕　焼土の分布が認められた以外はカマド部、煙出し部、煙道部とも検出されなかった。ただ、東壁の削平状態からみて、ピット２の周辺に認められた焼土がカマドに伴うものとの可能性も考えられる。

〔**貯蔵穴**〕　貯蔵穴と思われるピットとしてＰ２がある。Ｐ２の位置、埋土状況、遺物出土状況については前述したが、住居埋土とピット埋土とは同質のものであることから、住居の廃絶直前まで使用されていたことを示している。

〔**出土遺物**〕（第38・39図、図版20・27）　遺物は住居のほぼ全域から出土しているが、特にピット２から多量の出土をみた。層位的には住居内埋土第１層に該当する。



第38図　ＣＣ53住居跡出土遺物

白沢遺跡

器種では土師器坏・甕、須恵器坏、砥石がある。

土師器

坏（第38図１－13、図版27－１～６、８）　22個体分出土したが、うち完形、復元可能のものは５個体である。いずれも製作に際してロクロを使用したもので、器面にロクロナデ痕が観察される。

以下、図化したものを中心に記述する。

器形はほぼ同じ様相を示しているが、個々の部分については若干の相違はある。

口径、底径、器高はそれぞれ下表のようである。

第18表　CC53住居跡出土土器計測表（cm）

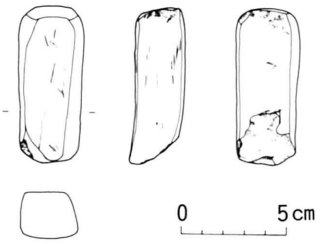
項目＼No	1	2	3	4	5	6	7
口径	14.4	14.5	14.4	14.5	13.7	14.2	13.5
底径	6.0	6.5	6.2	7.1	5.5	6.0	6.2
器高	5.0	5.0	4.7	5.1	4.3	5.0	4.4
色調	浅黄橙 7.5YR8/3	淡橙 7.5YR8/3	にぶい橙 5YR7/3	淡橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	にぶい橙 7.5YR7/4	－

１～６はいずれもピット２出土のものである。１、２、３、４、６は口径がほぼ同じ数値を示し、底径、器高においても数値的に同じ傾向を示している。体部は丸味をもって外傾し、底部は平底で、下面にロクロ回転（右回り）糸切り痕を残している。器面調整は内外面とも全面的にロクロ調整痕がみられる。また器面の色調は浅黄橙～にぶい橙色を呈する。５は胎土に砂粒が多く含まれ、器形全体にゆがみがあり、また、かなりもろい焼成である。６は比較的厚い底部を有し、外面にスス状のものが付着している。２と４の体部には墨書痕が認められる。２は「二」、４は「月」とも判読できるが不明である。８～13は口縁～体部片である。８は体部から口縁部まで直線的に外傾する。口唇部はやや内弯しながら丸くおさまる。９～13は体部から口縁部までゆるやかな丸味をもって外傾し口縁部から口唇部にかけてしだいにうすくなる。器面の調整はロクロによるものである。色調は浅黄橙～にぶい橙色を呈する。底部は不明である。９、13はピット２内からの出土であり、他は焼土附近からの出土である。なお、内黒、内外黒のいわゆる黒色処理をした坏片も床面上から出土した。

甕（第38図14・15、図版27－７）　図示できたものは２個体であるが、小破片も含めると10数片になる。いずれもロクロ使用によるものである。14は小型甕の体部下端～底部片である。静止糸切りによって底部を切離し、体部はやや丸味をもちながら外傾する。器面の色調はにぶい橙色（7.5 YR 7/3）を呈し、硬質の焼成である。底部の推定径は 5.9cmである。15は比較的大型の甕である。口縁～体部の1/3の残存だけであり、底部については不明であるが、推定口縁

部径は22.0cmで最大径は口縁部に位置する。口縁部は短く外傾し、口唇部は平面をなしてそのままおさまる。

体部は上部外面に下方向への軽いヘラケズリが施され、直線的な立ち上がりを示している。胎土は砂粒が多く、ややザラつく。器面は橙色（５ＹＲ⁷⁄₆）を呈する。出土位置は住居跡中央部の床面上である。



第39図
砥石実測図（ＣＣ53住居跡）

須恵器

小片２のみ出土した。共に坏片である。

砥石（第39図、図版27－４）

住居跡中央部のやや西寄り床面上より１点出土した。棒状の長方体で、小型である。両先端を除く４面に砥磨面がみられ、特に表面はかなり使用されたらしく、だいぶくぼんでいる。細い溝が数条走る。石材は斜長石流紋岩である。仕上げ用のものであろう。

第７図（Ｐ269）土層注記

層	土色	土性	その他
1	黒褐色(7.5YR1/3)	シルト質土	クロボク質土で構成される
2	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質土	火山灰質土と黒褐色土との混土
3	黒色(7.5YR2/1)	シルト質土	ブロック状に火山灰質土が入るが黒味が強い
4	黒褐色土(7.5YR3/2)	シルト質粘土	細粒状の黄褐色火山灰質土を含み、粘性がある
5	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	シルト質粘土	粘土質ブロックを多く含むものとシルト質土の混土、一部に遺物を含む
6	褐色(7.5YR4/3)	シルト質粘土	５にほぼ同じであるが、火山灰質土が若干多く入る
7	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	粘性ある火山灰質土と白色の粘性ブロックが入り込んでいる
8	黒褐色(7.5Y2/1)	シルト質土	クロボクで構成され、柔らかい

第11図（Ｐ272）土層注記

層	土色	土性	その他
1	黒褐色(7.5YR1/3)	シルト質土	クロボクで構成され、柔らかい土質
2.2′	にぶい黄橙(10YR7/3)	粘土	黄白色～にぶい黄橙色を示し、ブロック状になっている、撹乱土
3	黒褐(10YR3/2)	シルト質土	クロボク質土が多く、若干の細粒状の火山灰質土が入る
4	暗褐(7.5YR3/3)	シルト質土	黒味がやや強く、火山灰質土が全体に混じる
5	褐灰(10YR4/1)	シルト質土	黒色土と火山灰質土がほぼ均等に混じった土層、しまりがある
6	にぶい褐(7.5YR5/4)	シルト質土	火山灰質土に黒色土が密に入る、部分的に黒色が強い、ボサボサする
7	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト質土	黒色土の中に火山灰質土が小ブロック状に入る
8	黒褐色(10YR2/2)	シルト質土	黒色が強く、火山灰質土がちらつく程度、柔らかい土質
9	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト質土	火山灰質土と黒色土が混じった層、若干白色粘土ブロックを含む
10	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	火山灰質土に黒色土が多く混入する、べとつきが強い
11	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘土質シルト	火山灰質土に黒色土が若干混じる
12	淡黄色(2.5Y8/3)	シルト質粘土	粒子がこまかく、粘性が強いブロック(大)を多く含む

Ⅳ．考　　察

本遺跡で発見された遺構と遺物は以上のとおりであるが、以下、遺構と遺物について考察を加え、まとめてみたい。

〔1〕土壙と出土遺物

土壙は円形土壙6基、溝状土壙6基が検出された。

最近、土壙についての報告例が相次いで出され、その性格づけについて地理的環境、遺跡における土壙のあり方、土壙の形態と覆土の堆積状態、伴出遺物などから究明されている。各地における分布は中部・関東以北、特に東北・北海道地方において数多くの報告例があり、本県においても昭和47年以降の東北自動車道、東北新幹線関連遺跡、その他多くの公共事業関連遺跡の発掘調査によって発見例が増し、その類例について種々検討がなされている。

この中で、円形土壙、溝状土壙についての名称については平面の形状から付したものがより一般的であると思われ、本遺跡でもそれに準じて記述したい。以下、地理的環境、土壙の分布と方向性、土壙の平面形、埋土の状況、出土遺物、時期等について述べてみたい。

a．地理的環境

本遺跡の中で土壙が発見された位置は標高約111.00mの比較的広く開けた低位段丘面の東端にあたり、更に北 180m地点も段丘の縁辺部になる。また、西からの小河川による低湿地も見られる。したがって他の多くの遺跡で見られるような山地、丘陵に立地するものというよりは、むしろ低位の舌状台地的なところであり、小河川ないしは水流のある流域にそった位置ということができる。また、周囲は若干比高差はあるものの広い平坦面をみわたすことができるところでもある。こうした地理的な面で考えると、本県では、東北自動車道関連遺跡である岩手郡滝沢村高柳遺跡、紫波郡都南村湯沢Ａ・Ｂ遺跡など比較的標高の低い、丘陵性台地や段丘周縁部の平坦面から発見されることが多く、しかもこれら遺跡の近接地には小河川が見られることが指摘できる。こうしたことから、これら土壙の発見される地形は、一つには水の存在(流水、湧水など）する場所であることが一般的にいえると考えられる。

b．土壙の分布と方向性

本遺跡における土壙のうち、溝状土壙は6基のみであるが、いずれも微高地の北側にまとまり、しかも長軸の方向はほぼ同一の方向をとっている。すなわち、長軸は南北方向であり、東段丘縁辺部に対してほぼ平行する方向にある。

なお、円形土壙と溝状土壙との分布上の違いは特に見られない。

c．土壙の平面形、埋土の状況

円形土壙：6基検出されたが、ＨＤ50土壙とＨＧ50土壙の2基は開壙部、壙底部、断面の各形状、および平面、深さなどの規模においても類似しており、また埋土状況にも自然堆積と考えられる土層状況になっている。特にＨＤ50土壙においては土壙周縁部の崩落土の堆積状況が明瞭に観察でき、開壙部、特に中位のふくらみ部が早く崩れることを物語っている。また、埋土の中に白色粘土の小ブロックが混入していたことは、土壙を作った際の底部の掘込み部分の粘土を土壙周辺に置いたものが、崩壊過程の中で再び土壙の中に入ったものと考えられる。いずれ、これら円形土壙のうちでも、フラスコ状のものは短かい日時のうちにほとんど原形をとどめないようになることが今までの調査後の観察でも経験していることである。特に冬期間においてはその崩落が早く、秋の調査時点で完掘していたフラスコ状土壙は、翌年の春には既にかなりの崩壊が見られた。地形、地質にも影響されることは十分考えられるが、土壙等の崩壊埋没は割合短かい日時のうちに進むもののようである。

ＨＤ50土壙、ＨＧ50土壙以外の土壙については、平面形、深さに差異があり、同一性のものとは考えられない。ただ、ＨＧ03土壙は平面形がやや円形であり、規模も前述の2土壙より若干小さい程度であることから、円形土壙構築の過程のものであったことも予想される。

溝状土壙：いずれも南北両端が丸くふくらみ、底部は溝状を呈し、平坦なものである。両端の壁は内側に抉り込まれるものもあるが、概して底部から垂直に立ち上がる。それに対して、長軸の壁は溝状の狭い底部から傾斜をなして立ち上がり、壁中位で大きくふくらみをもって開壙部に向けて開く。いわゆるＶ字状の断面を示す。しかし、ＧＪ53土壙、ＧＪ50土壙は、底部からの壁立ち上がりはむしろ垂直であり、開壙部近くで大きく開く形状を示す。深さはＧＪ50土壙を除き検出面より90cm以上であり、特にＧＨ53土壙は 130cmを測る。埋土は火山灰質や粘土ブロックを含むものがレンズ状の堆積を示し、各層間に黒色土も入り込んでいる、しかし、各土壙間の埋土の状況に若干の差異があることも指摘できる。即ち、堆積土の層厚、層序など

である。これは短期間であれ、時期を異なって構築した可能性もあり、また、自然条件による差ということもいえるのかもしれない。ただ、相互に切り合った状態で存在しているものがないため、即断することはできないが、自然的な埋土状況であることは確かであろう。なお、これらの土壙は各地で検出されている溝状土壙と形状、埋土の状況に差異は認められないが、特徴的なこととして、小範囲の中に6基もの土壙が構築されていることであろう。

d．出土遺物　（図版21－4）

遺物はいずれも縄文土器片である。出土土壙はＨＧ03、ＨＧ50、ＨＧ53、ＨＨ50の各円形土壙、ＧＧ56溝状土壙であるが、ＨＧ53土壙出土以外のものは埋土中からのものである。ＨＧ50土壙出土のものは埋土下層からのものであり、土壙使用時ないしは、あまり隔らない時期のものとして把えることができると考える。また、ＨＨ50土壙出土の遺物も埋土下層からのものであることから、ほぼ土壙に伴う土器として考えることができる。以上の2土壙出土の土器は縄文・早期末～前期初頭にかけてのものと考えられることから、上記円形土壙もその近い時期に相当すると考えたい。

次に、溝状土壙出土遺物はＧＧ56土壙からのみ出土した。出土層は埋土中・上層である。縄文土器片4片で、いずれも深鉢型土器の胴部片である。縄文前期初頭のものであろう。ただ、土器の時期をそのまま土壙使用の時期に当てはめることはできない。最近、円形土壙内から人骨の出土例（昭54・岩手県二戸市、上里遺跡）などもあり、今後の調査例の増加と共にその性格、時期についてより明らかにされるであろう。

e．土壙の時期

以上の遺物出土状況によって土壙の使用時期を推定すると、ほぼ縄文前期に近い時期のものとみることができる。

ただ、円形土壙と溝状土壙は切り合った状態で検出されていないことなどから、その前後関係までは不明である。

以上、土壙の立地、形態、埋土、遺物などから考えると、現在、各地の報告例で考察されているように、その用途は「貯蔵」、「墓壙」、「陥し穴」説などがあるが、本遺跡の場合は「陥し穴」として機能されたものと考えたい。それは本遺跡の円形土壙のうちＨＧ50土壙のように底部に小円形ピットの掘り込みがあることは他の報告例にもあり、それが獲物捕かく用の棒状

の杭を突き刺した痕跡とも考えられている。こうした事例からみても、本遺跡の円形土壙のうちＨＤ50、ＨＧ50土壙は陥し穴としてのものであり、また、６基の溝状土壙も陥し穴として考えることができよう。

〔２〕円形周湟と出土遺物

（１）円形周湟について

本遺跡南微高地上に４基の円形周湟が検出されたが、以下、若干の点について考察し、問題点を記してみたい。

（周湟の形状）

検出された円形周湟はＧＪ03、ＨＣ03、ＨＨ03、ＨＩ50の各周湟である。これらの周湟に共通することは、いずれも完全な円形を廻らさず、南側が開く、いわばＵ字形的（馬蹄形との表現もされている）な周湟を構築している点である。周湟の南側が切れ、馬蹄形状を呈するものとして金ケ崎町・道場古墳の第２号、第３号、第４号の各古墳に伴う周湟、更に、江釣子村・五条丸古墳の周湟においても認められるところである。

古墳に伴う周湟としては、第21表にまとめているように各地の古墳で確認されている。岩手県内においては、和賀郡江釣子村五条丸古墳、盛岡市上太田・蝦夷森古墳、金ケ崎町西根道場古墳、和賀町長沼古墳などがあり、いずれもＵ字形的（馬蹄形）な周湟が検出されている。

また、古墳とは確認されないものの円形周湟が検出された例として、東北縦貫自動車道関連遺跡として調査された紫波郡矢巾町湯沢Ｂ遺跡がある。この湯沢Ｂ遺跡の円形周湟も東南が開く馬蹄形状のものであるが、若干隅丸方形的な形状も呈している。

県外の知見する例として埼玉県寺山遺跡[(注１)]がある。本遺跡の周湟同様、南側が開くＵ字形的な円形周湟である。

次に、これら周湟の規模を比較してみると、全周の検出例が少ないきらいはあるが、直径８～12ｍで、ほぼ10ｍ前後の規模である。白沢遺跡の各周湟の規模と各遺跡の周湟とを比較した結果は第19表のようである。

第19表　周湟規模比較表（馬蹄形状周湟の一部）

遺跡	白沢遺跡				長沼遺跡		道場遺跡			五条丸遺跡			狄森遺跡（矢巾町）	寺山遺跡（埼玉）	
	ＧＪ03	ＨＣ03	ＨＨ03	ＨＩ50	第9号墳	第10号墳	第2号墳	第3号墳	第4号墳	第19号墳	第21号墳	第24号墳	第3号墳	第3号墳	第4号墳
外径(m)	8.0	12.0	12.0	12.0	11.5	9.2	11.0	9.7	9.8	9.3	11.4	8.4	13	33	28
深さ(cm)	5～10	50	40	30	45	20	35	30	28	?	130	?	95	30~50	30~80

（墳形）

検出された円形周湟は墳丘を伴なったものか否かについては、調査時点において既に地表が削平されていたことから不明である。しかし、以下の状況から墳丘は構築されていたものと推定できる。

第１に周湟埋土中から出土した縄文土器片、石器片等の多くは埋土第４・５層から出土することである。しかも、この埋土４・５層は周湟内でも特に内径側に厚く堆積し、傾斜をもった堆積となっていることである。これは、周湟内側に周湟を掘り下げた土を盛り上げ、それが次第に流れ落ちて堆積した状況を示すものであり、縄文土器、石器等も掘り上げられた土に入り込んでいたため、盛土と共に流れ落ち、周湟内に堆積したものと推定されるのである。

第２に本遺跡の出土遺物と同様のガラス玉、土師器壺を出土した浮島古墳、近接地に位置する、狄森古墳、および岩手県内の円形周湟を伴う古墳などは全て墳丘を有することがあげられる。ただ、墳丘の高さについては、それぞれ規模に差があることから、本遺跡の周湟に伴う墳丘の規模を一様に示すことはできない。しかし、元治元年（1864）の古絵図等にも塚状のものが画かれていないことから、特に目立つような規模の墳丘があったとは思われず、むしろ、地元の古老が話すように雑木林の中に小規模な円墳の墳丘があっただけなのかもしれない。

（主体部）

― 主体部の性格 ―

主体部はＧＪ03円形周湟に伴うものとして１基確認されただけである。主体部埋土中からは前述のようなガラス小玉、鉄片などが出土したほか、床面直上の土壌中から周辺土壌中より高いリン酸の検出があった。このことから主体部は墓壙としての性格がより明らかとなった。

― 埋葬方法 ―

主体部の中央よりやや南寄りの地点からガラス小玉が 240個出土したが、埋葬に当って頭部をどの位置にしたかを知る一つの手がかりとなり得る。本出土品の出土位置からみて、頭部は南方にした可能性がある。このことは、例えば岩手郡西根村の谷助平古墳[注2]第１号墳をあげることができる。同古墳でも頭部を南方にし、その先に土師器壺を埋葬したことが報告されている。また、ガラス小玉を出土した岩手町浮島古墳[注3]では主体部床面のほぼ中央部から出土している例もあり、特に一定した出土位置はない。床面直上からは木炭片などの出土は認められなかったが、主体部の形状から土葬の可能性がある。

― 主体部の長軸 ―

主体部の長軸方向は座標北より西へ35°振れている。一例のみであり、即断できないが、長軸

方向に一致して岩手山（2041m）が望まれることは偶然のことであろうか。ちなみに浮島古墳の各主体部の長軸方向（「浮島古墳」 報告書では主軸と表現）を検討してみると、各々の方向は一定してはいないが、全て磁北より西方向に偏っている。角度からみるとN－36°－W(４号墳)、N－51°－W（９号墳)、N－41°－W（11号墳)、N－58°－W（15号墳）であり、全て磁北より西に振れ、その角度は平均45°である。この長軸方向には北西 9.5kmに飼沢山（509m)、近くは東南２kmに送仙山(472m）が位置する。古代の信仰として山の存在を考える時、白沢遺跡、浮島遺跡の埋葬のあり方に共通性を見出すことはできないだろうか。他の類例と比較検討の機会を待ちたい。

― 主体部の形状 ―

主体部の形状は底部で長軸 1.9m、短軸 0.6m、検出面からの深さ約25cmで、底部に深さ20～30cmの周溝がまわる。底部はほぼ平坦な面をなしている。これらのことから、主体部は地山面を掘り込み、さらに周溝を巡らしただけのものであろう。

一般的に県内の古墳においては川原石等を用い、石室を構築した内部構造を有するものが多く見られる。この場合、石室の残存部が検出されたり、また、川原石等の散乱が認められるのであるが、本遺跡の場合、これらの川原石等は見当らず、また、石室を構築したと思われる痕跡も認めることはできなかった。したがって、本主体部の場合は、石室や葺石を有したものではなく、いわば、長方形状の墓壙を造り、その上に土盛りしただけのものと考えたい。これは岩手町浮島古墳にもみられる例である。

なお、主体部の周溝は、土溜めのための側板を設けたものと推定される。

― 主体部の位置 ―

主体部はＧＪ03円形周湟の内側中央部に検出されたが、他のＨＣ03、ＨＨ03、ＨＩ50周湟では精査したが、主体部は検出されなかった。主体部が旧地表面上に直接おかれた例として、本県では昭和34年調査された金ケ崎町西根縦街道古墳・第２号墳(注4)がある。本主体部の場合、確証はないが、既に削平された墳丘内に埋葬されたものであろうか。他の類例の報告を待ちたい。

（土師器壺）

（２）出土遺物について

円形周湟および主体部に伴う遺物として、ＨＨ03周湟から土師器長頸壺、ＨＩ50周湟から土師器壺、管玉、ＧＪ03主体部からガラス小玉類、鉄片等が出土した。

計測値については既に述べたとおりであるが、肩部に段があり、球胴形を呈する。外面は頸部横ナデ、胴部は割合密なヘラミガキが施され、光沢を有する器面になっている。この胴部に脹らみのある土師器壺は、前述の浮島古墳出土のものをはじめ、最近の出土例としては、東北

白沢遺跡

縦貫自動車道関連遺跡として調査された和賀郡江釣子村の猫谷地遺跡、水沢市今泉遺跡がある。猫谷地遺跡ではＪＧ06住居跡出土の壺、今泉遺跡ではＢＧ62住居跡出土の壺がある。それぞれの計測値、調整を実測図の上からまとめると次のようである。

第20表　壺比較表（cm）

遺跡＼部位	口　径	底　径	器　高	頸部径	体部径	調整	
						口縁部	体　部
猫谷地	21	9	30.5	16	30.5	内 外ヘラミガキ	 ヘラミガキ
今　泉	32	16	50	28	48	内ヘラミガキ 外ナデ	ハケメ、ヘラミガキ ハケメのちヘラミガキ
白　沢	22.7	推定10	30	19	30.6	内ナデ 外ナデ	 ヘラミガキ

この表からも明らかなように、白沢遺跡出土の壺は、極めて猫谷地出土のものに類似していることである。猫谷地遺跡出土のものについては、仮称Ⅰ～Ⅲ期までの分類が行なわれ種々検討が積み重ねられているが、上記ＪＧ06出土の壺は「猫谷地Ⅱａ期」に該当し、およそ、８世紀半ばが推定されている。また、今泉遺跡出土の壺についても、同じ８世紀半ばと考えられている。本遺跡周湟から出土した壺も、これら２遺跡出土のものと同じ時期のものととらえたい。

（土師器長頸壺）

黒色処理を施した長頸壺は少なくとも岩手県内では出土した例を知らない。しかし、類似の器形としては須恵器として各地の遺跡からは出土している。土師器の壺としては器形に差異があるものの類似のものとして二戸市・上田面遺跡出土のものがある。（注５）ＫＴ78・Ｂ42住出土のもので、実測図面での計測値は口径11cm、底径 6.5cm、器高26.5cm、頸部径 6.5cm、胴部15cmを計る。外面はヘラミガキがあり、口縁部内外面はヘラミガキ、横ナデが施される。丸胴から頸部がやや広がりをもって立ち上がり、口縁部で大きく外反する。同遺跡からは円形周湟が検出され、また、勾玉、土玉・ガラス玉出土もある。今後、類例の報告と合わせて、本遺跡出土の長頸壺が資料化されていくものと考える。

（管玉）

本県においての管玉の出土例は、第24表に記入しているように盛岡市太田蝦夷森古墳、花巻市熊ノ堂古墳が報告されている。しかし、本遺跡出土のものとは形状に違いもあり、また、出土状況においても異なっている。石質はメノウであるが、窄孔技術はすぐれており、直孔の性状を呈する。窄孔の工具については不明である。（注６）

（ガラス玉）

ガラス玉の出土例は多いが、各種の分析についてはほとんどなされていない。したがって、県内各遺跡出土のガラス玉について、その材質、含有元素、形状、窄孔技術等についての比較

検討を行なうことはできない。今後、分析例が増え、ガラス玉の共通性を求める中で当時の人々の交流を解明する資料となると考える。

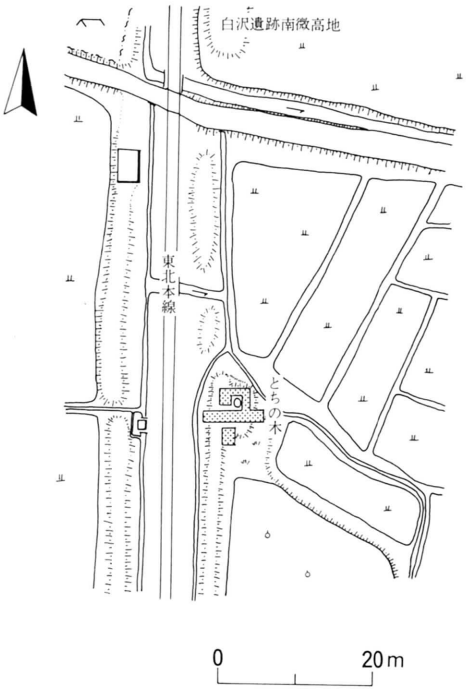
（３）円形周湟の性格と時期について

本遺跡で検出された円形周湟４基についてその性格を考えてみたい。本県でも円形周湟を古墳に伴う周湟と、古墳とは確認できないものの円形周湟のみの検出例がある。前者については円墳状の墳丘と装飾品などの遺物も確認されていることから明らかに古墳に伴う周湟であるが、後者の場合は墳丘、遺物等も確認されていないものである。しかし、本遺跡での場合は、主体部および装飾品等も出土していることから古墳に伴う周湟と認めることができる。特にＧＪ03周湟は主体部と共に、装飾品であるガラス玉多数の出土があったことで十分に説明することができる。ただ、ＨＣ03、ＨＨ03、ＨＩ50周湟には主体部が認められないことから、古墳に伴うものかが問題になるが、ＨＨ03周湟から長頸壺、ＨＩ50周湟から壺、管玉の出土があったことなどから、これらの周湟も古墳に伴なったものであるといえる。

また、それぞれの円形周湟が南に開く形状を有していることは、他の例でも見られるところであり、周湟が一つの聖域を囲むものとしてとらえることもできよう。

次に、円形周湟が構築された時期、即ち、古墳構築の時期は、ＨＨ03周湟から出土した土師器壺の特徴から奈良時代中頃（８世紀半ば）と推定される。

なお、本遺跡南微高地の南方約50m（第40図）の小高い地（約25㎡）に「トチの老木」が生育しており、古くからこのあたりは「エゾ森」と呼ばれていた。昭和37年、東北本線複線化工事による拡幅地内に予定されたため、発掘調査が実施されたが、特に遺構、遺物等は発見されなかった。しかし、調査報告(注7)に「トチの木のあった小丘のほかに、その北方の小高い麦畑……の地域をも（エゾ森に）含んでいるのであるから、東北本線複線工事の際にはそういった場所であるいは古墳が発見されることがあるかもしれないのである。」と記されている。正に本遺跡がこの地に該当していたことになる。



第40図　矢巾村エゾ森発掘調査位置図

白沢遺跡周辺には本古墳とはほぼ時期を同じく

すると見られる狄森古墳がある。狄森古墳は、本遺跡の東約2.1㎞の国道4号線沿いの低位段丘（都南段丘）上に立地している。かつては群在していた（「狄森古墳周辺地域発掘調査」昭45による）が、現在は墳丘1基を残すのみである。昭和45年の同調査報告によるとこの墳丘は東西約9ｍ、南北約8ｍの円形であり、高さ約1ｍ40㎝の墳丘を有している。また、2、3号の墳丘は削平され、周辺に川原石が散乱していたという。周湟は3号墳においてのみ検出され、東南方向で開口している馬蹄形状と判明した。周湟の外径は東西で13ｍ、上巾 154㎝、深さ94㎝で、本古墳の周湟とほぼ同規模である。（深さに差があるのは、本遺跡の場合、削平によるものであろう）このように、白沢遺跡周辺には同時期の古墳が多く存在していたと推定される。

〔3〕竪穴住居跡と出土遺物

調査区Ｂ、Ｃブロックから2棟の竪穴住居跡が検出されたが、いずれも壁の削平があり、また、柱穴等の配置にも不明な点があるなど、完形での検出ではなかった。2住居跡のみであるが、以下、両住居跡を比較しながら特徴的な点を記してみたい。

ＢＥ06住居跡は、やや隅丸方形的なものであり、カマド跡が南東方向に構築されていることから、ＣＣ53住居跡も同一方向に構築されていた可能性もあるが、遺物から検討すると必ずしも同一に考えられない一面もある。即ち、ＢＥ06住居跡出土遺物は主として土師器甕、須恵器甕がセットされた出土状況であるのに対し、ＣＣ53住居跡では土師器坏が主体をなし、須恵器の出土は小片が数点のみである。また、土器製作上からみると、両住居跡出土遺物はＢＥ06住居跡出土の土師器甕片の一例を除き、全てロクロ使用による製作をしており、坏においては回転糸切りのみの切離しをしており、その後の再調整は見られない。また、ＣＣ53住居跡からは2個体の土師器坏の墨書土器も出土している。一方、土師器甕はＢＥ06住居跡では最大径を口縁部に有するものが多く、外面胴部上半よりヘラケズリを施したものである。器高と口径はほぼ同じものが多く、胴のふくらみが比較的見られるものである。

以上の出土遺物の特徴から時期的には平安時代（10世紀）のものと考えたい。ただ、両住居跡出土遺物の中に黒色処理を施した土師器坏が少ないこと、更にＣＣ53住居跡出土遺物の土師器坏は淡橙色系のものが大半であることなどから、黒色処理の土器が主体を占めた時期よりは若干新しくなることも考えられる。

〔4〕周湟埋土内の出土遺物

〈出土状況〉

ＨＣ03、ＨＩ50、ＨＨ03の各周湟埋土内から出土したものであるが、いずれも埋土第３・４・５層から出土したもので、特に第５層（黒褐色土）からのものが多い。検出面から30～40cmの深さである。土器、石器片とも、その出土層位、出土地点については周湟内埋土中という第二次的な遺物の移動が考えられるため、正確にはそれぞれの関係を把握することはできない。特に、分類別の土器、石器についての層位的関係は認めることはできない。しかし、少なくとも出土位置については、若干の関係を把握することは可能のようである。

即ち、第15図・遺物出土状況図、および第８表　周湟内出土遺物表に示したように土器では第Ⅰ・Ⅲ群土器がＨＣ03周湟附近、第Ⅳ群土器がＨＣ03、ＨＩ50周湟附近から集中して出土していることは指摘できる。したがって時期的な土器の分布状況をある程度把握することはできそうである。

石器についても土器片同様、第３・４・５層から出土しているもので、このうち第４・５層からのものが多い。しかし、分類ごとの石器が層位的に関係づけられるとは認められない。ただ、石器においても位置的にその分布状況に集中性があり、いわばそれらの地点に遺構が存在しただろうことは一応考えられるところである。

〈編年上の位置〉

出土した土器、石器片の編年上の位置について以下考えてみたい。

(1)　土器について

第Ⅰ群土器：本群土器は繊維を含まず、貝殻文による文様を施しているものであるが、胎土に多量の雲母を含み、また、橙～明褐色の色調を呈することなど、本遺跡と近い距離に位置する遺跡出土のものと類似するようである。即ち、本遺跡の北西約10kmに位置するオミ坂遺跡および北西約5.5kmの大渡野遺跡出土のものに貝殻腹縁刺突文、表裏条痕文、表面に刺突文・沈線文、沈線文の施された土器がみられることである。また、県内においては日戸(注8)遺跡、蛇王洞洞穴遺跡があり、県外においては青森県ムシリ遺跡、早稲田(注9)遺跡、秋田県岩井(注10)洞岩陰遺跡などがあげられる。本遺跡出土のものについては、沈線によるものは群を改めて分類しているが、前述の各遺跡出土のものと比較してみる限り、本遺跡出土のＩ群土器は「ムシリＩ式」に類似したものといえよう。したがって、縄文早期中葉のものと考えられる。

第Ⅱ群土器：平行沈線と刺突文によって幾何学的文様を作るものは早稲田貝塚出土の第三類

土器に類似する。即ち、同貝塚の報告によれば、第三類（３）のNo11に極めて類似するもので異方向に走る比較的間隔ある平行沈線とその間に竹管状の刺突痕が施される。県内においては前記の日戸遺跡などからも発見されている。土器文様の特徴から第Ⅰ群と同じムシリⅠ式に最も近いものと思われる。

第Ⅲ群土器：本群は縄文を施文し、繊維を含むものである。特にⅢ１ａ、Ⅲ２、Ⅲ５は多量の繊維を含む。器面の施文は、羽状縄文、および撚糸状のほどこされた焼成不良のもの（Ⅲ１ｂ、Ⅲ２）などがある。また、器内面にも縄文の施文がある（Ⅲ３）ことなど編年的には東北南半の梨木畑、船入島下層式に類似する。しかし、器内面に縄文施文が見られないもの、および羽状縄文が施文されていることなどから、むしろ船入島下層式相当のものとみることができよう。また、金雲母片が多量に混入し、繊維を若干混入している。色調は黒褐色を呈し、早稲田四類に類似している。時期的には早期末葉を主にし、前期初頭にかかるものと思われる。

第Ⅳ群土器：粗製土器と精製土器を本群とした。粗製土器（Ⅳ１、２・３）は主体的なモチーフをもたないものであり、器形は鉢形になると考えられる。口縁部が小波状を呈し、内外面を磨いている。Ⅳ３類は３本の平行沈線をめぐらしたモチーフを中心としたものと考えられ、大洞A′式に相当するものと考えられる。前述の粗製土器は伴出する土器がなく、時期決定資料に欠くが、他遺跡[注11]での伴出例からみると、大洞C_1式に相当するものと考えられる。いずれも縄文晩期中葉～末葉にかけてのものと考えられる。

第Ⅴ群土器：Ⅴ１類は器形は小片のため不明であるが、残存片からみる限り小形鉢と思われる。沈線の下方に横走ないし、斜走する撚糸文が施されている。Ⅴ２類は壺形土器の口頸、胴部片と思われる。撚糸文だけの施文であり、口頸部は撚糸部分を磨消する手法が認められる。天王山系土器と考えられ、弥生時期のものであろう。

(2) 石器について

・石器群と土器群との時期的関連について

本遺跡出土の石器、土器は周湟埋土中からのもので、いわば第二次的な堆積層の中からの出土であることから層位的なものとして把握することはできない。しかし、土器群の組成でみたように、時期的にはムシリⅠ式から船入島下層までの縄文早・前期のものと、大洞C_1～A′までの縄文晩期のもの、更に天王山系の弥生後期のものである。したがって、石器群の組成を一

応これらの時期のいずれかに比定されるものとして考えることは可能であろう。

まず、石器の組成をみると、石鏃、石匙、石篦状のもの、切削器、掻器、石皿、磨石などがある。沈線、貝殻系土器群に伴出する石器については、既に林謙作氏による論考(注12)がある。それによると、東北地方の早期縄文式文化を二分する地域例として、「下北地方の貝殻・沈線文土器群に伴出する石器の基本的な組み合わせは、石斧、石槍、石鏃、石錘であり、中葉以降になって石匙が出現する。これに対して、東北地方南半ではいまのところ、石槍、石錘の存在は顕著なものとはいえない……。」と述べている。更に出現する時期は南北とも同時期で、物見台式と吹切沢式の間にあるとしている。本遺跡の出土石器の中に石匙状のものが存在すること、石鏃、石槍と伴出することなどから、一応早期中葉～末葉にかけてのものととらえたい。

ただ、石斧、石錘などの石器が本遺跡には存在しないことは、ある面では地域的な差として把えることができようし、また、これが地域の環境のあり方によることは当然であろう。即ち、地域に河川、海岸などがある環境と山間地での環境には、生活の仕方に相違があり、当然、立地条件に合った石器使用ということも考えられる。

以上の点から出土石器の時期的な面について考えてみたが、細部については検討不足の点が多々あり、特に、周辺遺跡の出土遺物との関係についても今後、考察を加えていかなければならない点である。

・石材について

南微高地出土の剝片石器についてその石材の割合は硬質頁岩（25％）、珪質凝灰岩（20％）、その他である。産地については硬質頁岩、石質凝灰岩が岩手郡雫石西部の新第三紀中新世、珪質頁岩は同郡雫石の脊梁新第三紀中新世にあたる。なお、黒燿石が1片出土しているが、産地については確定できない。（佐藤二郎氏によれば雫石から豊沢川の間の新第三紀中新世の可能性があるとのことである。）県内においての黒燿石出土地についての報告が最近の調査例の増加に伴なって散見されるようになった。

石皿の石材として熔岩塊を利用している例は本県においては大渡野、西田遺跡等、多くの報告例がありぐ縄文期の特徴ともいえる。

(3) 埋土中の火山灰について

周湟の埋土の特徴として、灰白色の降下火山灰の堆積が認められることである。降下火山灰が認められた遺跡としては、本遺跡のほか、蝦夷森古墳（盛岡市上太田）、長沼古墳（和賀町）などがある。これら火山灰は埋土中に3～5㎝の厚さのレンズ状に堆積しているもので、いずれの火山灰もその堆積状態から考えて、周湟が掘り込まれた直後の堆積ではなく、ある程度埋

まりかけた時点での堆積と考えられる。このような火山灰の堆積は岩手県においては早くから知られていた。即ち、土師器の竪穴住居跡の埋土に堆積していた報告としては、昭和28年、調査が実施された「堀野遺跡」(注13)がある。報告によれば竪穴住居跡はその上を灰白色の火山灰が10～20cmの厚さでおおわれていた、とのことである。しかし、古墳の周湟では盛岡市蝦夷森古墳（別表）で知られていた程度で、全県的には余り注意されていなかった。しかし、最近の調査事例の増加と共に、古墳の周湟に堆積する火山灰の確認がなされ、その一例として東北自動車道関連遺跡に位置した和賀郡江釣子村の「猫谷地古墳」周辺の泥炭層から２層にわたる同様の火山灰層の堆積が確認されている。(注14)

今後、各遺跡での火山灰が化学分析され、その組成、噴出地などが相互に研究対象になり、遺構の年代決定の資料となることが望まれる。

なお、本遺跡の火山灰について岩手県工業試験場に依頼し、蛍光Ｘ線分析を行なった。

その結果、石英、長石を含む火山灰であることが確認された。

また、岩手大学農学部助教授(土壌学教室) 井上先生の御教示によれば、白沢遺跡の火山灰は、その分布、鉱物組成からみて、秋田・焼山火山起源の火山灰であり、^{14}Ｃ年代および遺構などから約1200～1500年前の火山噴出物であると推定されている。

岩手県工業試験場での分析結果は第41図、第23表のとおりである。（第Ⅱ分冊・西野遺跡、第Ⅲ分冊・杉ノ上Ⅲ遺跡においても同試験場により火山灰の分析を実施した。）

Ⅴ．ま　と　め

以上の調査結果、考察から白沢遺跡について次のようなまとめと課題を得ることができた。

1、白沢遺跡は奥羽山系から流出する支流が形成した段丘上（低位段丘の上面・花巻段丘）の東縁部に位置している。

2、調査の結果、次の遺構、遺物を発見した。(4)以外は南微高地上から検出された。

(1) 縄文時代早、前、晩期の土器片、石器が発見され、また、前期に近い時期の遺構と思われる円形、溝状の土壙が検出された。これらは狩猟を目的としたものと推定される。

(2) 弥生時代後期の土器片が数片出土した。天王山系の土器と考える。

(3) 奈良時代（8世紀中頃）の古墳が4基検出された。いずれも墳丘は削平されており、円形の周湟（馬蹄形状）のみが検出され、うち1基の古墳からは地上面を掘り込んだ長方形状の主体部が検出され、主体部床面直上の土壌からリン酸が高い数値で検出された。なお、いずれの古墳からも川原石など認められず、石室を構築したものとは考えられない。

古墳に伴う遺物として、主体部から 240個のガラス小玉、刀子状の鉄片、周湟内底部からヘラミガキ・黒色処理を施した長頸壺1、丸胴の壺、管玉などが出土した。長頸壺は須恵器を模したものと考えられ、今後、関連遺跡の調査を進める中での資料となるだろう。

(4) 調査地北側の果樹園跡から平安時代（10世紀）の住居跡が2棟検出された。壁など削平が著しく、また、柱穴、カマド、煙道などの一部に確認できないものもあった。

3、以上の各時期に亘る遺構、遺物が発見されたことから、この地は、原始、古代からの生活の場であり、また、葬祭の地としても存在していたことが認められた。

4、南微高地上に検出された古墳は8世紀中頃に構築されたものと考えられたが、当然、この時期に相当する住居跡も附近に存在しているとみられることから、今後、注意していく必要がある。

5、今回の調査は新幹線建設予定地内という限られた面積であり、しかも、幅18m～20mの極めて狭い範囲内だけの調査である。したがって遺構検出においても十分な広がりをもったものにはなり得なかった。

円形周湟、特にＨＩ50周湟は当然、調査対象地の東・畑地まで続いて存在しているはずであり、また、他の周湟の存在も十分予想されるところである。今後の保存に留意すべき

と考える。

6、岩手県内における古墳は、胆沢町・角塚古墳の前方後円墳をはじめ、江釣子村・猫谷地古墳群、五条丸古墳群などの石室を伴う古墳、更に、浮島古墳のように単に主体部の上に盛土し、円墳状の墳丘を構築した古墳など、その形態、構築方法、遺物などに種々の差異が認められる。

また、本遺跡のように円形状の周湟のみ検出されただけで出土遺物もなく、性格不明のものと報告されているものもある。

被葬者ばかりでなく、当時のこの地の人々の生活のようすについても興味のあるところである。

今後、県内の古墳についての調査が進み、これらの点について更に解明されていくものと思う。本調査の結果がその資料の一助になればと考える。

《注》

注1）　埼玉県教育委員会「寺山」埼玉県遺跡調査報告書第9集　1976
注2）　草間俊一「岩手県西根村谷助平古墳」岩手大学学芸部研究年報第18巻　1961
注3）　草間俊一「浮島古墳」岩手町教育委員会　1959
注4）　伊東信雄「岩手県金ケ崎町・西根古墳と住居址」金ケ崎町教育委員会　1968
注5）　岩手県埋蔵文化財センター「二戸バイパス・上田面遺跡現地説明会資料」　1978
注6）　穿孔の技術、工具については次の報告書に記述されている。福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XIII・高木遺跡の調査」　1977
注7）　板橋　源「エゾ森発掘調査概報」　1962
注8）　草間俊一「玉山村日戸遺跡調査報告」岩手大学学芸学部研究年報第14巻　1959
注9）　二本柳正一他「青森県上北郡早稲田貝塚」考古学雑誌43巻2号　1957
注10）　秋田県教育委員会「岩井洞岩陰遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書16集　1972
注11）　大迫町教育委員会「小田遺跡発掘調査報告書」　1979
注12）　林　謙作「東北地方早期縄文式文化の展望」考古学研究第9巻第2号　1965
注13）　草間俊一「岩手県福岡町堀野遺跡」福岡町教育委員会　1955
注14）　岩手県教育委員会「猫谷地遺跡現地説明会資料」　1974

参 考 文 献

中川久夫他（1963）「北上川上流沿岸の第四系および地形」－北上川流域の第四紀地史（1） 地質学雑誌・第69巻第811号

〃 「北上川上流沿岸の第四系および地形」－北上川流域の第四紀地史（2） 地質学雑誌・第69巻第812号

佐藤二郎（1978）「考古学のための地質学」地形・地質学習会資料

林謙作（1962）「東北地方早期縄文式文化の展望」考古学研究・第9巻－2

宮沢寛・今井康博（1977）「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題」 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団・調査研究集録第1冊

草間俊一（1956）「岩手県日戸遺跡調査報告」岩手大学学芸学部研究年報・第10巻

大迫町教育委員会（1979）「小田遺跡発掘調査報告書」大迫町埋蔵文化財報告第4集

大槌町教育委員会（1974）「崎山弁天遺跡」

㈶岩手県埋蔵文化財センター（1978） 「都南村・湯沢遺跡」岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集

二本柳正一他（1957）「青森県上北郡早稲田貝塚」考古学雑誌・第43巻－2

江坂輝弥（1950）「青森県下北郡東通村、尻屋、物見台遺跡調査報告」東北日本田戸住吉町系文化遺跡調査報告第一編

佐藤達夫（1958）「青森県上北郡出土の早期縄文土器」考古学雑誌・第43巻－3

八戸市教育委員会（1976）「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書」

角塚扇三他（1957）「早稲田貝塚」上北考古学会報告1

秋田県教育委員会（1972）「岩井洞岩陰遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書

林謙作（1972）「縄文文化の発展と地域性・東北」河出書房・日本の考古学II・縄文時代

北奥古代文化研究会（1978）「北奥古代文化・第10号」東北・北海道地方の続縄文文化・弥生文化

北奥古代文化研究会（1972）「北奥古代文化・第4号」特集・奥羽土師文化論

東北歴史資料館（1977）「東北の古墳」

和田吉之助・富樫泰時（1971）「神沢海岸遺跡」

草間俊一（1961）「西根村・谷助平古墳」岩手大学学芸学部研究年報・第18巻

桜井清彦他（1951）「猫谷地古墳発掘調査報告」岩手史学研究No 9

江釣子村教育委員会（1978）「猫谷地・五条丸古墳群」

胆沢町教育委員会（1976）「角塚古墳調査報告」

板橋源・川村仁左衛門（1962）「矢巾町・エゾ森発掘調査概報」

矢巾町教育委員会（1970）「狄森古墳周辺地域発掘調査」

小笠原謙吉（1924）「和同銭を出した陸中国熊堂の古墳群」考古学雑誌・第14巻・7

岩手県教育委員会（1970）「盛岡市上太田蝦夷森古墳二報」

金ケ崎町教育委員会（1968）「西根古墳と住居址」

岩手町教育委員会（1961）「浮島古墳・澤口遺跡」

和賀町教育委員会（1974）「長沼古墳」

二戸市教育委員会（1978）「中曽根II遺跡発掘調査」 現地説明会資料

白沢遺跡

二戸市教育委員会（1979）　「東北自動車道・有矢野遺跡」　現地説明会資料
二戸市教育委員会（1978）　「二戸バイパス・上田面遺跡」　現地説明会資料
㈶岩手県埋蔵文化財センター（1979）　「二戸バイパス・上里遺跡」
音喜多　富　寿（1960）　「八戸市根城・鹿島沢古墳群調査略報」
福岡県教育委員会（1977）　「福岡県高木遺跡の調査」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XIII
白石市教育委員会（1972）　「鷹巣古墳群発掘調査概報」白石市文化財報告書第12号
埼玉県教育委員会（1976）　「寺　山」埼玉県遺跡発掘調査報告書・第９集
音喜多　富　寿
江　坂　輝　弥（1958）　「鹿島沢古墳群踏査予報」　史想第９号
福井県教育委員会（1975）　「岩内山遺跡」北陸自動車道関係遺跡調査報告書・第９集
沼　山　源喜治（1976）　「陸奥北半における末期群集墳の性格」北奥古代文化・第８号
岡　田　　譲（1969）　「ガラス」日本の美術　37（至文堂）
小　林　行　雄（1976）　「続・古代の技術」
氏　家　和　典（1957）　「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯
桑　原　滋　郎（1976）　「ロクロ土師器坏について」歴史第38輯
宮城県教育委員会（1978）　「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ」宮城県文化財調査報告書・第52集
〃　（1974）　「東北新幹線関係遺跡調査報告書（１）」　宮城県文化財調査報告書　第35集
小笠原　好　彦（1976）　「東北における平安時代の土器についての二・三の問題」東北考古学の諸問題
沼　山　源喜治（1978）　「東北北部の歴史時代の土器」　シンポジュウム資料
水　沢　市（1974）　「水沢市史・１」
江　釣　子　村（1971）　「江釣子村史」
和　賀　町（1977）　「和賀町史」
盛　岡　市（1970）　「盛岡市通史」

矢巾町白沢遺跡・土壌のリン分析

昭和54年8月24日
岩手大学農学部土壌学教室
井上　克弘

1．概　　要

白沢遺跡は北上川の西岸に接する金ケ崎段丘末端上にあり、東北新幹線建設工事に関連して発見された。この遺跡の奈良～平安前期の古墳跡と推定される遺構について、遺構と墳墓とのかかわりを判定する資料を得るために表題の分析を行なった。

試料はいずれも岩手県教育委員会の遺跡発掘調査担当者によって昭和48年9月に採集されたものである。

2．分析方法

各土壌を風乾し、2㎜篩を通して風乾細土を分析に供した。全リン酸は2ｇの土壌を硝酸一過塩素酸で分解したのち、ケイ酸を分離濾別し、バナドモリブデン比色法により求めた。また可溶性リン酸はBray and Kurtz（1945）の第1法により0.03N－NH_4F可溶性リン酸を測定した。なお、土壌とNH_4F－HC1抽出液との比率を1：7、抽出時間を1分間とした。リン酸の定量はモリブデン青比色法によった。

3．結果および所見

分析結果を第1表に示した。ここで全リン酸、可溶性リン酸は100g乾土当りのmgP_2O_5で表示した。

白沢遺跡の土壌母材はいずれも金ケ崎段丘上に堆積した火山灰である。本遺跡の周湟部分には黒色の腐植質火山灰が堆積しているが、この火山灰中に薄く灰白色の火山灰層をレンズ状にはさんでいる。また、担当者より頂いた灰白色火山灰は鉱物組成からみて岩手県岩手町の仙波

堤・今松遺跡や玉山村釜崎遺跡の竪穴式住居跡にふりこんでいる灰白色火山灰と同質のものである。（草間、1970）。

本火山灰はその分布、鉱物組成から秋田焼山火山起源の火山灰であり、^{14}C年代および遺構などから約1200～1500年前の火山噴出物であると推定されている（井上、投稿中）。

0.03N－NH_4F可溶性リン酸は約0.3～1.0mgP_2O_5／100g乾土の範囲にある（第1表）。実際の埋葬地の土壌のリン酸含量について資料やデータを持ちあわせていないが、ナウマン象包含層の土壌の0.03N－NH_4F可溶性リン酸は近堂・近藤（1978）によれば化石より50cm以上離れた土壌では〈0.4mg／100g乾土であるのに対し、50cm以内の土壌は〉0.5mg／100g乾土である。また、化石周辺で骨片の分解したと思われる地点は可溶性リン酸が2～15mg／100g乾土であり、小骨片の混入した土壌試料では417mg／100g乾土という異常に高い可溶性リン酸含量が得られている。

上記データを参考にすれば、本遺跡の土壌の0.03N－NH_4F可溶性リン酸は特に高くはないが、No18のHA50土壙床面の土壌では1.03mgP_2O_5／100g乾土でありやや高かった。

一方、遺跡中の土壌の全リン酸含量は約170～240mgP_2O_5／100g乾土であった。一般に火山灰土壌は非火山灰土壌よりも全リン酸含量が高いが、白沢遺跡中の土壌の全リン酸含量も通常の火山灰土壌の全リン酸含量の範囲内にある。第1表からも明らかなように、土壌の全リン酸含量は腐植含量と関連しており、黒色の土壌ほど全リン酸が高い傾向にあり、植物由来のリン酸の影響を強く受けている。

文　献

（1）Bray, R.H. and Kurtz, L.T. (1945)
Determination of total, organic, and avairable forms of phosphorous in soils.
Soil Sci. 59、39～45

（2）井上克弘、秋田焼山火山灰の^{14}C年代、地球科学（投稿中）

（3）近堂祐弘・近藤錬三(1978)、ナウマン象包含層の古土壌学的考察、十勝平野、地団研専報　22、396～398

（4）草間俊一（1970)、岩手県岩手町仙波堤・今松遺跡、pp 1～37、岩手町教育委員会

（5）草間俊一（未発表)。

第21表　白沢遺跡の土壌の全リン酸含量と可溶性リン酸含量表

No.		遺跡採集地点	地層	全リン酸 (MgP$_2$O$_5$/100g)	0.03N-NH$_4$下可溶性リン酸 (MgP$_2$O$_5$/100g)	土色*	採集年月日
10		GJ53土壙（5号土壙）	埋土 I	232	0.54	10YR 2/2（黒褐色）	1973.9.19
12		GJ53土壙（5号土壙）	II d	180	0.28	10YR 3.5/2（黄褐灰色）	1973.9.19
18		HA50土壙	主体部床面	137	1.03	10YR 5/3（灰黄褐色）	1973.9.12
19		HA50土壙	主体部床面	236	0.54	10YR 3.5/2（黄褐灰色）	1973.9.19
20		HA03周湟（4号）	埋土 II a	170	0.53	10YR 4/2（黄褐灰色）	1973.9.19
36		HC03周湟（1号）	II a	216	0.28	10YR 3/2（黒褐色）	1973.9.11
37		I A 53	土師器壺中	169	0.43	10YR 4/2（黄褐灰色）	1973.9.12
対照	1	白沢	作土下	187	0.74	10YR 3.5/2（黄褐灰色）	—
	2	白沢	心土	36	0.38	10YR 6/5（明黄褐色）	—

＊Munsell Soil Color Chartによる：色相、明度／彩度

白沢遺跡出土品分析結果

昭和54年9月7日
岩手県工業試験場

1．玉

X線回折においては、No 240の橙縞の玉は明瞭なα石英の回折ピークがあり、材質はめのうである。

他の5種類の玉は、いずれも非晶質で明らかなピークが認められず、その素材はガラスと思われる。

このガラス玉について蛍光X線分析を行なった結果、検出された元素は表のとおりであるが、これらの成分のうち、いずれにも共通して含有している元素は、Sn、As、Ca、Fe、K、Siであり、No235、157、40のガラス玉にはSr、Cu、Co、Mn、Cr 等が含有し、これらは濃青色系の着色剤とみられ、No 222の淡青色の玉はCu が着色剤と思われる。

PbはNo 223の黄色のものだけに検出されたが、これは比重からみて鉛ガラスとしての成分であるかどうかは疑わしい。

なお、この蛍光X線分析は使用分光結晶の関係で、この外のガラスの成分として考えられるNa、Mg 等は測定していないが、成分および比重等の測定結果からソーダ、石灰、ケイ酸塩ガラスと考えられる。

第22表　出土遺物分析表

No.	試料			組成 (X線回析による)	検出元素 (蛍光X線分析による)	見掛比重	備考
	色	形状	大きさ (mm)				
1	橙縞	球	径1.0 穴径2.0	めのう		2.6	
2	藍	円板状	径8.0 厚さ5.0 穴径1.5	ガラス	Sr. Sn. As. Cu. Ca. Fe. K. Co. Mn. Si. Cl	2.5	
3	青(大)	ビーズ状	径4.0 厚さ3.5 穴径1.0	ガラス	Sn. As. Cu. Fe. Ca. Sr. K. Si. Co. Mn. Cr	2.5	
4	青(小)	ビーズ状	径4.0 厚さ2.8 穴径0.6	ガラス	Sn. As. Cu. Fe. Ca. Sr. K. Si. Co. Mn. Cr	2.5	
5	淡青	ビーズ状	径3.6 長さ4.0 穴径1.0	ガラス	Sn. Cu. Fe. K. As. Si. Co	2.2	気泡を含む
6	黄	ビーズ状	径3.8 厚さ2.5 穴径0.9	ガラス	Sn. As. Fe. Fe. Pb. Ca. K Si	2.3	気泡を含む

（備考）

(1) 比重参考例

め の う	2.6
板ガラス	2.46
ビンガラス	2.49
鉛ガラス	2.85～4.28

No 222淡青色ガラスおよびNo 223黄色ガラスの比重が若干小さいのは気泡を含むためであろう。

(2) 成分の含有量について

蛍光X線分析による成分量は、各試料対比によっては試料を非破壊的に原形のまま使用したため、それぞれの形状、大きさ等の相違により、測定条件が異なり、又、各元素対比においては、それぞれの検出感度が異るため量的な比較は難しい。

火山灰分析結果

本遺跡の南微高地に検出された古墳周湟内の火山灰について、次表のように岩手県工業試験場に依頼し、その成分分析を行なったが、これを本課で既に実施した他の遺跡の火山灰と比較し、その百分率の差をみたのが下の表である。二遺跡とも新幹線関連遺跡として調査されたものである。杉ノ上Ⅲ遺跡は紫波町日詰にあり、昭和48年調査が行なわれ、平安時代の住居跡4棟を発見している。火山灰はこの住居跡のうちの3棟に入っていたもので、約10cmの厚い堆積を示す住居跡もある。また、西野遺跡は北上市相去町にあり、昭和50年に調査されたもので、平安時代の住居跡3棟を発見し、このうち2棟の住居跡床面近くに2～3cmの火山灰の堆積を認めているものである。

なお、杉ノ上Ⅲ、西野遺跡の火山灰についても岩手県工業試験場において定量分析及びX線回折をした結果のものである。

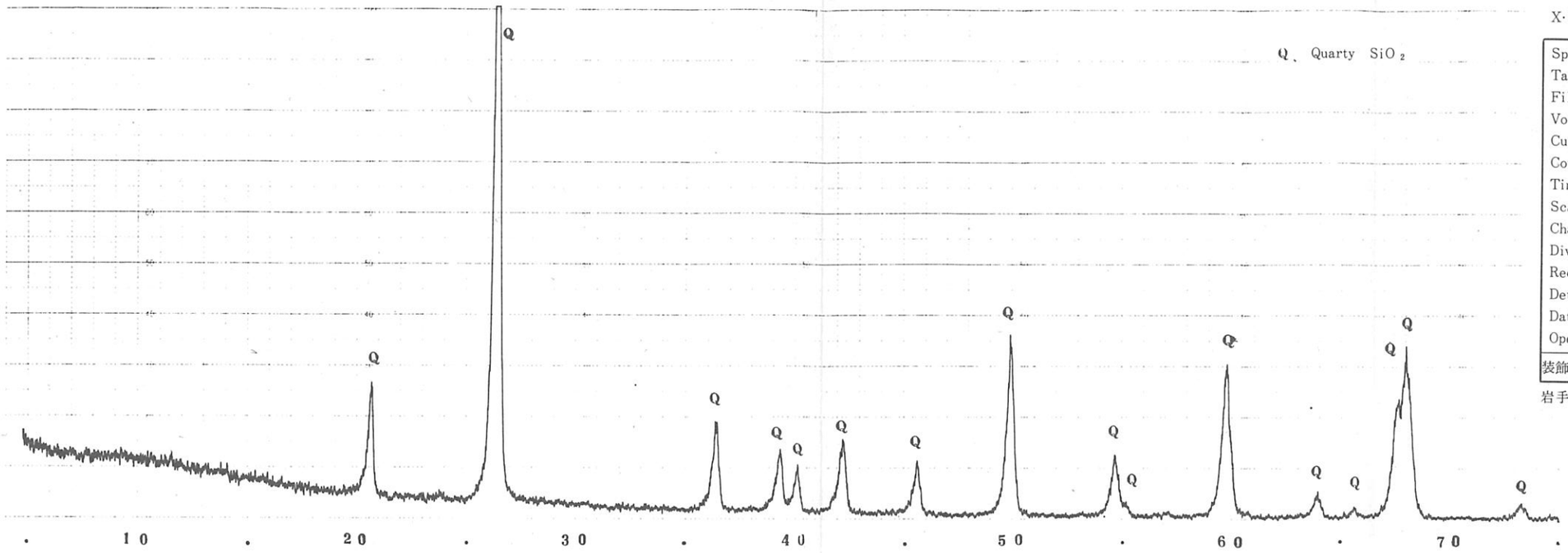
表によると化学成分上からは西野遺跡白沢遺跡は粘土分が少なく、石灰分が多いことがいえる。一方、結晶水、有機物は杉ノ上Ⅲ遺跡、白沢遺跡に多く、共通する面もある。これは両遺跡が 3.5kmと距離的にも近いことからともいえるが、むしろ地形上からくる要因とも指摘できよう。すなわち、両遺跡とも畑地であり若干の混入物がある結果とも考えることができよう。また、粘土分については西野、白沢の両遺跡に少ないことも特徴としてあげることができる。

墳出火山の確定のため、今後多くの試料が分析され、検討されることが必要と考える。

第23表　火山灰分析表

成分＼Sample	白沢遺跡	西野遺跡	杉ノ上Ⅲ遺跡
H_2O^-（水　分）	2.86%	1.46%	2.60%
H_2O^+（灼熱減量）	7.10	4.03	7.28
SiO_2（無水珪酸）	60.21	64.86	61.05
FeO_3（酸化鉄）	4.87	4.69	6.20
TiO_2（酸化チタン）	0.62	0.387	0.612
P_2O_5（無水リン酸）	0.14	0.200	0.114
Al_2O_3（アルミナ）	15.89	14.81	15.59
CaO（石　灰）	3.10	3.09	1.97
MgO（酸化マグネシウム）	1.30	1.21	0.80
MnO（酸化マンガン）	0.14	0.122	0.171
Na_2O（酸化ナトリウム）	3.24	4.49	3.18
K_2O（酸化カリウム）	1.01	1.16	0.99
S（硫　黄）	Trace	Trace	Trace

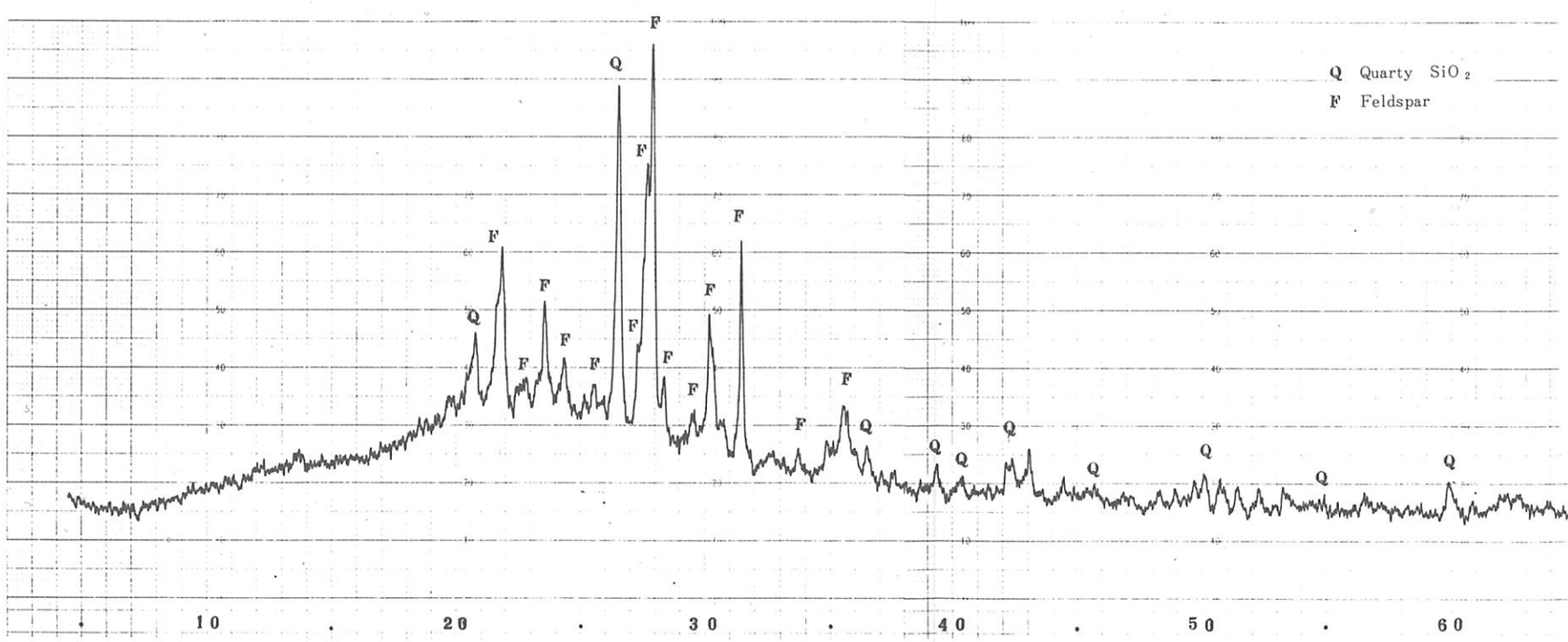
岩手県工業試験場で分析（昭和54年11月）



X·Ray Diffractometer No.

Specimen	No. 10
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	40kv
Current	16mA
Count Full Scale	1,000c/s
Time Consant	2 sec
Scanning Speed	1 °/min
Chart Speed	1 cm/min
Divergency	1 °
Receiving Slit	0.3mm
Detector	P.C
Date	54.7.5
Operator	T.K
装飾品、縞橙色玉	

岩手県工業試験場



X·Ray Diffractometer

Specimen	No. 11
Target	Cu
Filter	Ni
Voltage	30kv
Current	24mA
Count Full Scale	1,000c/s
Time Consant	2 sec
Scanning Speed	1 °/min
Chart Speed	1 cm/min
Divergency	1 °
Receiving Slit	0.3mm
Detector	P.C
Date	54.7.14
Operator	M.Y
白沢火山灰	

第41図　白沢遺跡出土遺物・土壌サンプル・組成分析　　上図(No.10) ガラス玉組成(X線回折、蛍光X線分析)　下図(No.11) 火山灰鉱物組成(X線回折)

岩手県・古墳調査内容一覧（No１）

（記述方法については№５に記した）

項目（1.古墳名 2.所在地 3.調査年月 4.調査主体 5.立地形 6.調査報告書）	古墳No	古墳：墳丘の規模					主体部の構造										周湟の構造						古墳築造の推定年代	古墳以外の発見遺構				備考
		墳丘の有無	平面形	大きさm	高さm	出土遺物	主体部の位置	長軸方向	平面形	大きさm	深さm	掘込み面	床面	石組室	出土遺物	葬法	周湟の有無	平面形	大きさm	深さm	埋土中の火山灰の有無	出土遺物		古墳と同時期の遺構	出土遺物	古墳と異る時期の遺構	出土遺物	（報告書記載の文面）
1.浮島古墳 2.岩手町大字土川 3.昭和32年6月 4.岩手町教育委員会 他 5.丘陵先端の傾斜面 6.4基 7.「浮島古墳・沢口遺跡」（昭和34年6月）	第4号墳	有	円形	封土の径13	0.6	土師器大型壺（1個体分）ロクロ不使用平底、ヘラミガキ有	封土の中心よりやや西方	北西-南東 N-37°-W	両端は丸味を帯び四周の線は弯曲	3.7×1.2	0.44	旧地表面下黄色粘土層	ほぼ水平な舟底形	無し	床面に木炭 直刀1（45cm）鉄鏃1鉄鏃片2縄文土器片1								奈良時代かそれに近い時代					
	第9号墳	有	楕円形	11.2×9	0.5		第4号墳に同じ	北西－南東（N－48°－W）	第4号墳に同じ	3.4×1.0	0.28	黄色粘土層	たたいたように堅い	無し	床面に木炭 ガラス小玉(100数個)													
	第11号墳 1部掘り返しの跡	有	円形	径11.5	0.75	鉄輪 刀子片1	封土の中心よりやや西寄り	北西－南東（N－42°－W）	細長い	4.5×1.4	0.23	黄色粘土層	たたいたように堅い。舟底型で2段	無し	床面に木炭 大腿骨？歯12本ガラス小玉(100数個) 黒色の練り丸玉5小銅環1鉄鋷1鉄鏃2	うずくまって埋葬（後に置き換えられた？）土葬の可能性 男女の重葬墳												
	第15号墳	有	円形	径9	0.35		第11号墳に同じ	北西西-南東々（N-30°-W）		3.5×0.85	0.30	黄色粘土層	たたいたように堅い。舟底形	無し	床面に木炭 人骨の細粒片													
1.長沼古墳 2.和賀町藤根字長沼 3.昭和47年6月・10月 4.和賀町教育委員会 5.和賀川北岸の河岸段丘上の台地 6.8基 7.「長沼古墳」（昭49）	第1号墳 一部盗掘の跡	有	円形	直径 7.5	0.7			N-8°-E	奥壁の両角で丸味をもつ長方形	2.7×0.5	0.8		一面に礫仕切石が4カ所にある	河原石積石室	盗掘のため不明		有 部分調査	半円状	7.9 内法 1.0 上幅	0.4 地山掘下げ	灰白色の粉状パミス		第3号墳 7世紀後半から末葉にかけての時期 第10号墳 7世紀の末葉を中心とした時期 3·10号以外の古墳 3号墳と前後する時期から8世紀にかけての時期 ○一時期に築造されたものではなく7世紀後半ごろから順次築造されほぼ8世紀後半に至って大群集墳となった。	第3号墳		溝状遺構	鉄鎌1 須恵器小片	1.第9号墳は石室の構築順序を知る得る資料となる。 2.第10号墳出土の土師器大型壺は金ケ崎町西根、岩手町仙波堤、今松や二戸市堀野遺跡の住居跡群から出土する壺類より若干古いと考えられる。 3.第13号墳は第8号墳より新しい。 4.墳形 内部主体は玄室、羨道の区別は明確ではないが前庭部を有する長方形プランの変形横穴式石室ということができるがその実質的機能は竪穴式石室に近いものである。 5.遺物 「金張りの丸玉」の出土はガラス工芸史上に重要な位置を占める。 釧や玉類の出土状況から埋葬頭位を推定できる。 石室外出土の土師須恵器が古墳築造年代を考定する資料的価値を有する。 6.被葬者 和賀川流域に支配力を有した和賀地方の「蝦夷」の族長、およびその一族と推定できる。
	第2号墳 一部盗掘の跡	有	円形	7.2×7.0	0.45			N-16°-E	奥壁の両角で丸味をもつ長方形	2.2×0.6	0.5		礫敷き仕切石はない	河原石積石室	刀子1		有 部分調査	全形未調査	9.8 内法 0.6 上幅	地山掘下げ	認められない							
	第3号墳 一部盗掘の跡	有	円形	10.5×9	0.7	須恵器片（周湟埋土中のものと同一個体片）		N-20°-E	両側壁でわずかに膨む長方形	2.25×0.45	0.78		礫敷き仕切石はない	河原石積石室	ガラス小玉178、縄文土器数片、勾玉22、水晶製丸玉1、切子玉15、ガラス製金張丸玉1、刀子2、管玉1、	頭部を石室入口側に置いた埋葬	有	円形（一部途切れたり直線状の部分がある）	8.0 内法 0.4～0.7 上幅 0.2～0.5 下幅	0.7 地山掘下げ	灰白色の粉状パミス（3～4cmのレンズ状）	須恵器(2個体) 縄文土器数片						
	第9号墳	削平のため墳丘なし	（円形）					N-18°-E	破壊著しい	2.15×0.64	0.5		礫敷き木炭が散乱（仕切石が認められる）	河原石積石室	鉄鏃（20数本）鉄鎌1鉄刀2刀子の柄1鉄器残片3		有 部分調査	東北がやや長い楕円状（石室南方で切れると予想）馬蹄形	10.6東西 11.5南北 内法 1.2 上幅	0.45（検出面より）東・西…0.1、北…地山面まで掘込みなし	灰白色の粉状パミス							
	第10号墳	削平のため墳丘なし						N-2°-E	胴部で膨らむ長方形	2.9×0.5	破壊著しいため原形計測不能		小礫が厚さ5cmに一面に敷かれる（仕切石は認められず）	河原石積石室	検出なし		有 部分調査	馬蹄形（石室南方で途切れる）	8.0 内法 1.2 上幅	0.2 地山の黄色砂質土掘り込み	灰白色火山灰 厚さ5cmのレンズ状	粉状パミスの下部よりの土師器片のまとまり。（1個体）土師器大型甕の可能性						
	第11号墳	削平のため墳丘なし						N-1°-E	北側両隅で丸味を有する長方形	2.5×0.5（推定）	計測不能		礫敷（7cmの厚さ）仕切石は検出されず	河原石積石室	検出なし		有 部分調査	確認せず	7.0 推定	0.4（検出面より掘り込み）地山まではなし	粉状パミス（火山灰）が巾85cmに分布							
	第12号墳	削平のため墳丘なし						N-21°-E	南側に広がる長方形	2.82×0.6（推定）	計測不能		礫敷7～8cm仕切石は検出されず	河原石積石室	蕨手刀1刀子3鞘尾金具残片1不明棒状鉄器1錫製耳環片2(同一個体)	単独の伸展葬、入口側に頭位	有 部分調査	円形推定	9.0 推定		灰白色の粉状パミス巾50cm、長2m60cm							
	第13号墳	削平のため墳丘なし								礫敷のみ 東西45cm 南北85cm			礫敷6cm	河原石は検出されず	土製の練玉1 環状の鉄製品1 刀子の残片1			円形（推定）南で途切れるか否かは未確認	8.0 推定	0.25 地山の黄色砂質土を切り込む	灰白色の粉状パミス巾70cm弧状に続く							
1.西根縦街道古墳 2.胆沢郡金ケ崎町西根字縦街道 3.昭和34年7月 4.金ケ崎町教育委員会 5.胆沢川北岸の河岸段丘東縁端上 6.2基 7.「西根古墳と住居址」（昭43）	第1号墳 一部盗掘の跡	有	方形 墳丘表面に葺石	10×8	0.6×1.0	封土中に縄文土器片 須恵器甕片1 土師器片 6	盗掘のため破壊					旧地表面の黒色土（推定）			小鉄片1 陶器片2（盗掘後に入ったもの）		有 部分調査	長方形状一周すると推定 西南一葺石外縁にそって直線的にのびる。北一弧状	0.8 幅	0.2～0.3 基盤の黄褐色土中に掘り込まれている			和同元年(708)から天平宝字4年(760)の間に営造					1.銙帯金具、和同開珎の出土から古墳築造の年代を考証することができる。 2.蝦夷と朝廷との結びつき、特に朝貢関係について考古学的な資料「和同開珎」と「銙帯金具」から知ることができる。 3.方墳の外形、内部構造について今後類例の調査が必要である
	第2号墳 一部盗掘の跡	有	方形 葺石あり	10×10（推測）	0.6	須恵器片1	盗掘のため破壊					旧地表面	小砂利敷（推定）			赭土（酸化鉄と推測）を使用）	未調査											
1.道場古墳 2.胆沢郡金ケ崎町西根字道場 3.昭和42年4月 4.金ケ崎町教育委員会 5.黒沢川沿いの河岸段丘南端の半円状に張り出した地点 6'6基（可能性のものも含め調査） 7.「西根古墳と住居址」（昭43）	第1号墳 破壊著しい	破壊						N-33°-W		3.2×2.7				川原石の一重並べ（推定）	（付近から発見）鉄刀、鉄斧、辔金具		周湟は存在しなかったと推定						奈良時代で平安時代の蝦夷地開拓前					
	第2号墳 砂壊著しい	破壊												石組のみ存在	発見できず		有	南の傾斜面の下の方には湟の痕跡がない（馬蹄形状）	11.0外周 8.8 内周 1.1 幅	0.35 ロームの地盤を掘込み								
	第3号墳 若干の石の移動がある							N-3°-W		2.5×0.9 内側 2.2×0.5			砂敷き	川原石を1つ並べ一重並べ	鉄鏃 刀子		有 部分調査	円形 南方は切れる	8.7 径 1.1 幅	0.1～0.3 ロームの地盤を掘込み								
	第4号墳							N-38°-W		2.8×0.9 内側 2.1×0.6			3カ所に仕切りの張り石 砂敷き	川原石 一重並べ	土師器壺 刀子片 耳環2 ガラス小玉128ケ		有	円形 南側は巾が狭くなって切れる？	9.8 外径 7.3 内径 1.3 幅	0.28 ローム面を掘込み								
	第5号墳 破壊著しい									3.5×〇（推定）					鉄鏃片10		周湟は存在しなかったと推定											
	第6号墳 破壊著しい														（付近から発見）鉄斧 須恵器の提瓶 鉄刀 辔金具		有？ 部分調査	円形	1.6 幅	0.4 ローム面を掘込み								

岩手県・古墳調査内容一覧（No２）

1.古墳名 2.所在地 3.調査年月 4.調査主体 5.立地形 6.調査古墳数 7.調査報告書 ＼ 項目	古墳No	古墳 墳丘の規模					主体部の構造										周湟の構造						古墳築造の推定年代	古墳以外の発見遺構				備考
		墳丘の有無	平面形	大きさm	高さm	出土遺物	主体部の位置	長軸方向	平面形	大きさm	深さm	掘込み面	床面	石組室	出土遺物	葬法	周湟の有無	平面形	大きさm	深さm	埋土中の火山灰の有無	出土遺物		古墳と同時期の遺構	出土遺物	古墳と異る時期の遺構	出土遺物	（報告書記載の文面）
1.道場古墳 2.金ケ崎町大字西根字道場15	第７号墳	有（推定）											小砂利	川原石を一段積石石室（推定）	ガラス小玉18 刀子		有 一部確認	円形 南方は切れていたと推定される	12.0内径 1.0 幅									
狄森古墳（周辺地域） 2.紫波郡矢巾町大字藤沢第７地割 3.昭和44年３月 4.矢巾町教育委員会 5.国道４号付近の微高台地、周辺は平坦な水田地帯 6.３基 7.「狄森古墳周辺地域発掘調査」（昭45）	第１号墳 発掘調査はしない	有	円形	9×8	1.4 至近道路面からの高さ																		狄森古墳の南方１kmに、平安初期の「徳丹城跡」があり、出土品からみても両者は時代的にあまりへだたっていない近似時期のもの					1.周湟をともなう積石石室古墳群の所在する近傍に城柵跡かあるいはそのような性格をもつ開拓期における重要な拠点となったものがあることが、両者の関連を考える上で重要な手がかりになりうるかもしれない。
	第２号墳													川原石 積石石室？	刀子		不明											
	第３号墳 濫掘？													川原石 積石石室？	皆無		有 部分調査	馬蹄形・東南方向で開口	1.3 外径 1.54上幅	0.94 断面Ｕ字状								
1.蝦夷森古墳 2.盛岡市上太田第15地割字森合同狄森 3.昭和45年10月 4.岩手県教育委員会 5.水田平坦地 太田方八丁遺跡と同一地域に立地 6.２基 7.「盛岡市上太田蝦夷森古墳二報」（昭45）	第２号墳 大部分破壊									1.9（長）			円礫敷	川原石 奥壁と側壁のみ遺存	「和同開珎」1 帯金具残欠２鉄製品、土製品、植物種子若干、切子玉１丸玉４勾玉20管玉51ガラス小玉407		有 部分調査	馬蹄形・東南方向で開口		断面Ｕ字状	白色の火山灰 0.95長さ	土師器片 須恵器片	太田の方八丁遺跡と蝦夷森古墳とは時代的にあまり離れていない近似時期ではないか					
	第３号墳 大部分破壊									3.3（長）			円礫敷	川原石 側壁のみ遺存	なし		有		1.3 上幅	0.5 断面Ｕ字状								
1.猫谷地古墳 2.和賀郡江釣子村字猫谷地 3.昭和26年５月 4.江釣子村 5.和賀川北岸段丘上 6.５基 7.「岩手史学研究（№９）・猫谷地古墳群調査報告」（昭26）	第１号墳	有	不整形円	直径12 多くの川原石が露出	0.91			N-10°-W		3.55×0.75	1.0		礫敷 南側に羨門	川原石	小形壺１壺形須恵器片、骨片小壺、歯牙、木炭								本古墳群の築造年代は比較的新しいと思われる蕨手刀の出土等からみても、また附近遺跡との対称の上からも古墳期最末端に置かなければならないであろう					・石室は、すべて川原積の長軸中央に施設されている。・規模は、いずれも小さいもので、一体を収容するのみである。殊に高さの低いことは、埋葬方法が竪穴式に行われ、上方より遺骸を収め、やや大形の川原石をもって天井としたことを示している。・各石室の奥壁には必ず一個の大形川原石を立石として使っている。・本墳の築造は、[illegible]
	第２号墳	有	不整形円	9.5×8	0.71			N-0°-E	長辺で若干膨らむ	3.1×0.75	0.6		礫敷 0.1の厚さ	川原石 横穴式石室の形態	縄文土器片 土師器片													
	第３号墳	有	北西部はゆがみやや東西に長い	直径10	0.9			N-20°-E		3.25×0.75	0.65		大形の石が点在・木炭末が散在・羨門を形成	川原石	縄文土器片１黒燿石片４（上面からの混入）蕨手刀１鞘尻金具													
	第４号墳	有	円形	直径13	1.15			N-20°-E	長楕円形	3.5×0.7	0.9		羨門を形成 礫、粘土、木炭敷	川原石（石積）														
	第５号墳	有	円形	直径7.5 川原石が露出	0.83			N-20°-W		2.1×0.65	1.3		張り石は認められない（崩壊）間仕切石 礫敷	川原石	土師器（完形２）耳環２勾玉１切子玉１小玉12鉄鏃３刀子１金銅製円形金具２	個人墓												
1.五条丸古墳群 2.和賀郡江釣子村字上江釣子第20地割ほか 3.昭和37年10月 4.岩手県教育委員会・江釣子村教育委員会 5.和賀川北岸の河岸段丘上 6.11基（他に川原石等の分布地点などの50基） 7.「猫谷地、五条丸古墳群」（増補再刊、昭53）	第14号墳 大部分破壊	有	楕円形	3×2.5 墳丘積石	1			N-30°-W		石列 長さ2.1				西壁積石最下段のみ遺存	勾玉17 ガラス小玉41（暗青色、緑色）切子玉１ 直刀片		不明											・石室構築上の手法を窺うことができる最初に石積をする範囲の地表面を皿状に若干掘り下げその中央に小口を揃えて河原石を並べて石室のプランを作り内部には小砂利を敷きつめ外側には側壁を形成する河原石の後石をつめその外側には順次河原石を積んだものと考えられる。
	第19号墳	有	不整三角形	4.5×2	0.7			N-10°-W		4.1×0.6	0.8		礫敷	石室南端を割する底部の平石を挟んで長手の石を直立させている	勾玉１ 鉄鏃片１ 須恵器片 ガラス小玉１		有	南方は認められなかった	8.3 内径 1.0 幅									
	第20号墳	有 削平大	長方形	2.5×5.5	0.9			N-13°-E		3.4×0.7	0.6		礫敷 木炭敷の痕跡	川原石 小口積（盗掘）天井石2ケ	直刀１蕨手刀１刀子２鞘尾金具残片、棒状鉄器片１ガラス小玉３													
	第21号墳 濫掘		梯形状	4.4×3.2 積石が露出	0.85			N-13°-W	中央部で若干膨らむ	2.0×0.6			礫敷 木炭敷 仕切石２	川原石	刀子２ 土玉55 不明鉄片１		有	円形 南方は約３mにわたって絶ち切れている。	8.0 内径 11.4外径 1.8最大幅 1.0最小幅	1.3 最大深								
	第22号墳	有	不整の下方上円形	3.77×3.65 河原石の葺石				N-13°30′-W		2.7×0.46	0.58		礫敷・木炭敷 南の張出部は不明 羨門部の南壁に大きな石	川原石 東西の側壁は川原石を小口積	鉄刀１ 刀子２ 鉄鏃１		有		10.15 内径 1.3 東幅 1.5 西幅									

岩手県・古墳調査内容一覧（No3）

1.古墳名
2.所在地
3.調査年月
4.調査主体
5.立地形
6.調査古墳数
7.調査報告書

1. 五条丸古墳群
2. 和賀郡江釣子村字上江釣子第20地割ほか
3. 昭和37年10月
4. 岩手県教育委員会
江釣子村教育委員会
5. 和賀川北岸の河岸段丘上
6. 11基（他に川原石等の分布地点などの50基）
7. 「猫谷地、五条丸古墳群」（増補再刊、昭53）

古墳No	墳丘の規模					主体部の構造															古墳築造の推定年代	古墳と同時期の遺構	出土遺物	古墳と異る時期の遺構	出土遺物	備考（報告書記載の文面）
	墳丘の有無	平面形	大きさm	高さm	出土遺物	主体部の位置	長軸方向	平面形	大きさm	深さm	掘込み面	床面	石組室	出土遺物	葬法	周溝の有無	平面形	大きさm	深さm	埋土中の炭山炭の有無	出土遺物					
第23号墳	石積	正三角形状	3.5(一辺)	0.6					1.6×0.5 (2.4)	0.5	石室構築前に若干の掘下げ	石敷 (10㎝)	側壁に立石 河原石	蕨手刀1 ガラス小玉54 土玉71		有	南方には認められない	7.0 内径 1.4 (幅)								
第24号墳	有	不整の菱形	3.05×2.9 (葺石が露出)	0.55			N-36°30'-W		1.5×0.5	0.4		木片細片 礫敷 (15㎝)	河原石を小口積 (大部分崩壊)	勾玉3 切子玉1 ガラス小玉25		不明										
第25号 第26号	古墳とは認められない																									
第27号墳													河原石群が乱雑に出土した。石室と判断することは無理	全く認められない												
第28号	古墳とは認められない																									
第29号墳 (乱掘の痕跡著しい)													乱積した河原石	人骨片 陶土器片		有	不整円形	5.0 (径) 1.0 (幅)	0.2—0.3 V字状の落ち込み							
第30号墳		不整三角形	4×4×2.5	0.4			N-24°-E		3.0×0.6			礫敷 仕切石1	西壁に立石3 石室底面は完全に遺存	土玉97 蕨手刀1 直刀2		有		9.0(内径) 1.0 (幅)								
第31号墳			若干の積石が露出	0.3								礫散在	河原石 攪乱著しい	ガラス小玉7		有		7.5(内径) 1.0 (幅)								
第32号墳			若干の積石が露出									礫敷	石室の一部が遺存	全く認められない		認められない										
第33号墳	有		3	0.3								石敷は認められない	河原石 (乱雑な積上げ)													第35号墳 長目の河原石の小口を揃えて石室側壁を築き、その外側では同様の河原石をそれらと直角に配し、間隙にはあとづめの礫を入れていくのが石室構築の第一段階であったことがわかる
第34号墳												礫若干	河原石若干													
第35号墳							N-2°-E		3.0×0.5			礫敷 仕切石	河原石の積石列 (石室の一部)	直刀1 刀子2 ガラス小玉 305		有	石室南方には周溝の存在は認められない	12.0内径 1.5 幅								
第36号墳							N-4°-E		3.3×0.4			礫敷	河原石 小口積の側壁一部遺存	刀子1 ガラス小玉36		有		7.0 推定の内径 1.5 幅								
第37号墳							N-0°-E		3.4×0.5			木炭細片 礫 仕切石	基底部のみ残存、河原石の側壁			不明										
第38号	古墳とは認められない															不明										
第39号墳							N-8°-E					木炭細片 礫 仕切石	側壁基底部	刀子3 鉄状金具1 目釘1 鉄片1 須恵砕片4 土玉237		有 一部調査										
第40号墳							N-7°-W		0.55(巾)			木炭細片 礫	河原石			有		1.2 幅								
第41号墳							N-6°-W		2.9×0.55			木炭細片	河原石			有		8.0 内径 1.2 幅								
第42号墳							N-6°-W					木炭細片	河原石			有		7.2 内径 0.9 幅								
第43号墳							中央石室 N-18°30'-E		西石室2.2×0.6 中央石室2.5×0.6 東石室2.5×0.6 北石室2.25×0.6			木炭細片 礫	4石室が複合	須恵砕片		有		11.0内径 1.6 幅								
第44号墳							N-20°30'-W		1.5 (巾)			木炭細片 礫	河原石 規模、状態は崩潰のため不明	須恵砕片		有		6.0 内径 2.6 幅								
第45号墳							N-1°30'-E		3.9×0.7			木炭細片 礫	河原石 崩潰のため不明	切子玉1 ガラス小玉69		有	南トレンチからは発見なし	12.5内径 2.1 幅								
第46号墳							N-9°30'-E		0.5 (巾)			木炭細片 礫	側壁基底部の河原石崩潰著しい			有	南トレンチからのみ発見	0.9 幅								
第47号墳							N-28°-E		4.2×0.7			木炭細片 礫	河原石 (崩潰)	直刀残片3 刀子残片1 鉄鏃残片4 馬具1		有	円形 南側(石室前面)は無し切れている部分は約2m	10.5内径 1.5 幅	黄褐色粘土層まで掘り込まれた痕							
第48号墳							N-5°-W		4.2×0.6			木炭細片 礫	側壁基底部の河原石 (崩潰)	切子玉4 ガラス小玉230(うち大型10) 土玉8 土師破片		有	南は未調査	11.0内径 1.6 幅								

岩手県・古墳調査内容一覧（No4）

項目：1.古墳名 2.所在地 3.調査年月 4.調査主体 5.立地形 6.調査古墳数 7.調査報告書

1. 五条丸古墳群
2. 和賀郡江釣子村字上江釣子第20地割他
3. 昭和37年10月
4. 岩手県教育委員会 江釣子村教育委員会
5. 和賀川北岸の河岸段丘上
6. 11基（他に川原石等の分布地点などの50基）
7. 「猫谷地、五条丸古墳群」（増補再刊、昭53）

古墳No	墳丘の規模：墳丘の有無	平面形	大きさm	高さm	出土遺物	主体部の構造：主体部の位置	長軸方向	平面形	大きさm	深さm	掘込み面	床面	石組室	出土遺物	葬法	周湟の構造：周湟の有無	平面形	大きさm	深さm	堆土中の火山灰の有無	出土遺物	古墳築造の推定年代	古墳以外の発見遺構：古墳と同時期の遺構	出土遺物	古墳と異る時期の遺構	出土遺物
第49号墳							N-11°-E		0.6（幅）			木炭細片礫	側壁基底部の河原石（崩潰）	鉄鏃1		有	南側は未調査	7.9(内径) 1.12(幅)								
第50号墳							N-29°-W		4.8×0.6			木炭細片礫	側壁基底部の河原石（崩潰）	勾玉 1 ガラス小玉 100		有	南側は未調査	1.6（幅）								
第51号墳							N-35°-W		4.0×0.64			木炭細片礫	側壁基底部の河原石（崩潰）	鉄鏃57馬具2鉄鍬先1鉄斧1二叉鉄金具1棒状鉄金具2		有	西側以外は未調査	1.2（幅）								
第52号墳							N-10°30′○（方位不明）		4.95×○（幅記入なし）			木炭細片礫（河原石で仕切り）	河原石を小口積にした側壁の基底部	太刀2鉄鏃1刃子2鉄輪金具1銙1鉄鎌1勾玉4ガラス小玉238		有	東、南は未調査	1.15(幅)								
第53号墳							N-14°30′-W		4.0×0.7			木炭細片礫	側壁基底部を仕切石にした川原石	発見されず		未調査										
第54号墳							N-27°-W		2.9×0.6	0.18（残存部）		礫多数	川原石	発見されず		有	南不明	13.0（内径） 1.55(幅)								
第55号墳							N-12°30′-E		0.4（幅）				散乱状態著しい	発見されず		有(一部)	南未調査	0.45(幅)								
第56号墳													河原石の散在のみ石室と判断できず													
第57号墳							N-1°30′-W		1.5×0.4（一部）			仕切石礫（少量）	石室遺残のみ	発見されず		確認できず										
第58号墳							N-14°-E		2.1×0.5（一部）			石群	河原石（崩潰）	発見されず		有	南不明	6.27（内径） 1.35(幅)								
第59号積石													石室遺残と考えられず	認められず												
第60号墳							N-20°30′-E		2.7×0.4				河原石小口積の配列が良好に遺存	発見されず		有	東は未調査	4.0(内径) 1.15(幅)（西側のみ）								
第61号	古墳とは認められず												河原石													
第62号墳							N-6°30′-W		2.8×0.57				基底部若干残存	発見されず		認められず										
第63号	古墳とは認められず												河原石													
第64号	古墳とは認められず												河原石													
第65号墳									0.4（推定）			礫敷	石列攪乱	刀子片		有		3.0～4.0（内径）	黄褐色粘土層に達しない							
第66号墳							N-31°-W	南側1mの張出し（南端内幅1.2m）石室前庭部	3.1×0.7			礫敷、北端より1.6mまでの下部に更に石敷	側壁積石1～2段 石室基底部一段低	直刀1刀子1ガラス小玉86土玉4土師器2土製紡錘車1		有	南は7m程切れる円形	8.0(内径) 1.2（幅）	未調査							
第67号	古墳とは認められず																									
第68号	古墳とは認められず																									
第69号墳						石室の位置は周湟内の東寄り	N-11°30′-E	南部で広くなる	2.3×0.55			礫敷 仕切石	基底部側壁小口積2段	直刀1 鉄鏃12		有	幅は西側が大きく北から東にかけて小さくなる	4.0(内径) 1.0（幅）	黄褐色粘土層に掘り込み							
第70号墳													河原石の発見はない	発見されない		有	北側は確認できず南側は未発掘	6.4(内径) 1.15(幅)								
第71号墳							N-20°-E		2.3×0.4			礫敷 木炭粒	基底積2段を残し東西側壁は河原石を小口積	鉄鏃片6刀子片2切子玉1ガラス小玉80土玉25		確認できない										
第72号墳	全く認められない						N-5°-E		3.5×0.9				積石遺存部 東壁西壁	鉄鏃8 環状鉄器片1 金銅製飾金具片		有	南側の調査は未実施	5.0(内径)								
第73号墳												礫 木炭	河原石（遺存状態がわるい）規模は不明	刀子片1		未調査										
第74号墳							N-3°-W（略）		2.1×0.44				河原石	崩潰状態のため不明		有(一部)		1.25(幅)								
第75号墳							N-1°-E		1.5×0.45			木炭細片礫群		刀子1 ガラス小玉8		有(一部)									磨製石斧1	
第76号墳									1.5×0.45		黄褐色粘土にくい込み	礫少々	河原石積	認められない		未調査										
第77号	古墳とは認められず																									
第78号	不明																									
第79号墳							N-18°-E		1.6×0.55				河原石群が乱雑に残存	発見されず		未調査										

備考（報告書記載の文面）

1. 古墳の外形
・周湟が存在（35基中29基に存在）
・墳丘の大部分は耕作のため削平され石室の一部分しかのこっていない
・墳丘の形状は円形
・墳丘の規模
直径 6.0m（最小）
14.9m（最大）
7～8m（平均）
・周湟の前面（南）は切れる
・葺石、埴輪は存在しない
・古墳相互が接近
○数百基の大群集墳であった可能性
2. 内部構造
・一基以外は破壊されている
・地表面に河原石を小口積にして細長い長方形の石室をつくる。
・石室の規模
長さ 2.7m（最小）
〃 4.95m（最大）
〃 3～4m（平均）
幅 0.45m（最小）
〃 0.65m（最大）
〃 0.5～0.6m（平均）
高さ0.7～1.0m
・南に開口する横穴式石室の形式
南に羨門
奥壁に立石
・石室の床面には10cmの厚さで小砂利敷き（木炭含み）
・石室の床面を仕切っているものが多い
・石室・石積は当時の地表面か地表面を少しほりくぼめて築造
・天井石は石室周囲の石と同じぐらいのもの
・板、もしくは丸太を石室の蓋に使用しその上に河原石をのせたものと想定
・遺体は石室の上から入れたもの
・直角三角形状の封土があり解釈は不明な点がある
○南方の横穴式古墳の様式をとり入れてこの地方で営まれた独自の古墳型式である
3. 出土遺物
・蕨手刀の出土、馬具では鏡板をもったものがないこと鉄鍬などの農具が出土したこと、管玉のないこと、土玉が出土したことが注意されるべきである
4. 築造年代
熊堂古墳と同じ構造を有し同様の副葬品をもつことから上限は奈良朝初期と見るべきであろう。下限は出土土師器からみて胆沢城跡出土土師器より古いもので平安初期以前のものである。この事からほぼ8世紀に求められる。
5. 造営者
和賀地方の蝦夷の族長の一族であろう（「続日本紀」天平9年4月の条に狄和我君計安塁の名がある）

岩手県・古墳調査内容一覧（No 5）

項目 1.古墳名 2.所在地 3.調査年月 4.調査主体 5.立地形 6.調査古墳数 7.調査報告書	古墳No.	古墳／墳丘の規模 墳丘の有無	平面形	大きさm	高さm	出土遺物	主体部の構造 主体部の位置	長軸方向	平面形	大きさm	深さm	掘込み面	床面	石組室	出土遺物	葬法	周湟の構造 周湟の有無	平面形	大きさm	深さm	埋土中の火山灰の有無	出土遺物	古墳築造の推定年代	古墳以外の発見遺構 古墳と同時期の遺構	出土遺物	古墳と異る時期の遺構	出土遺物	備考（報告書記載の文面）
1.角塚古墳 2.胆沢町南都田字塚田 3.昭和49年10月 昭和50年11月 4.胆沢町教育委員会 5.胆沢扇状地の中央部 6.1基 7.角塚古墳調査報告（1976）		有	前方後円 後円部墳頂に葺石の可能性大 前方部がやや外方にふくらみ	前方部 幅10～15 長さ16.1～17.3 後円部 径28.3 主軸長 44.4～45.6	前方部 0.75～1.5 後円部 4.41		古墳の現状範囲確認のための調査であることから内部の調査は実施されていない										有	前方部にむかってすぼまる卵形、もしくは載頭卵円形	前方部 上幅 3～4 後円部 上幅8.45～6.2 下幅 4.2～4.5	0.5～0.3			築造期に比定しうる土器は検出されない 他 大洞A式土器小片 続縄文片 土師器片 内面黒色処理の坏 長甕 回転糸切りの坏片 埴輪 円筒埴輪の完形品1 完形に近いもの2 形象埴輪の破片多数	埴輪群の特徴から判断して5世紀末降っても6世紀初頭				1.墳丘・前方部前面がややふくらみをもち弧状をなす可能性・周湟は幅に比べ浅い 2.埴輪と埴輪製作・基本的な製作技法は宮城 裏町古墳、同窯沢窯址と共通性がある・形象埴輪のほとんどが胎土の混和物を少量におさえ低火度の焼成を示している・工人集団の系統は仙台平野もしくは古川平野周辺にもとめられる。 3.年代、性格・5世紀初め・胆沢平野における経済的、社会的発展の結果であり同時に各階層間での対立関係が深まった
1.谷助平古墳 2.岩手郡西根村大更39地割97番地 3.昭和35年8月 4.岩手大学 5.丘陵際の台地先端部（畑地、採草地） 6.2基 7.岩手大学学芸学部研究年報第18巻（1961）	第1号墳（大部分破壊）	有	円形	径12～13	1	須恵器坩・提瓶	中心に近く若干西寄り		長方形	南北 2.5 東西 1.5	攪乱のため不明	周囲の地表面より10cm下がる。	敷石（掌又は拳大の川原石） 木炭粒		土師器・壺 鉄鎌 鉄輪 琥珀王 直刀・刀子（21cm）	主体は床石を安置する前に床石面に木炭を散布しその上に安置したと考えられる。その際、頭部は南方にし、その先に土師器の壺に飲食物など入れて埋葬したらしい。副葬品は頭部付近か体側に置いたものと考えられる								末期古墳の性質を多分にもつもので奈良時代より余り溯らないもの 浮島古墳より新しく、猫谷地古墳よりは古い しかし余り時期的な差異はない。				1.本古墳は地表面を若干掘りくぼめただけで掌、又は拳大の川原石を置き並べて床石としその上に主体を安置した形式である。また須恵器の出土もある。 2.小円墳が岩手県の古墳の一形式を示す内容をもち、それが青森県八戸市のものと類似することは今後の東北古代文化の解明に重要な資料となりうる。
	第2号墳	有	円形	径6	0.3～0.4				長方形	南北 1.7 東西 0.9			敷石（小石） 木炭粒		土師器・壺 刀子（15cm）													
1.熊堂古墳 2.花巻市大字上根子谷地219 3.明治38年（見聞） 4.個人 5.河岸段丘上の台地 6.1基 7.「和同銭を出した陸中国熊堂の古墳群ー考古学雑誌14ー7（1924）	天保年間に大半の古墳を破壊 明治35年頃残存の古墳も盗掘破壊	有 明治38年以前まで全形の存在していたものは約20基（※左記の明治35年頃の残存状況と合致しない）	円形（饅頭形）	径 5間				石槨は巽に向う（東南）（石槨の存在するもの8基）		槨の内 幅2尺5寸 奥行2間				石柱6本 石梁3枚	玉類（翡翠、碧玉、瑠璃、水晶、ガラス、切子玉、勾玉、小玉） 刀類（頭推、蕨手） 鎧 石帯金具 和同銭 朝鮮土器片 砥石・土器 （左記報告の原文のまま）													1.熊堂より西方20町許の一本杉と称する辺にも同系の古墳は12、3個あるとの事である。 2.当地の古墳には石槨のあるものと無いものとがあって玉類の埋蔵せられているものには必ず河砂利が敷かれている。
1.見分森古墳 2.水沢市 3.昭和33年 4.水沢市教育委員会 5.標高 113mの独立丘陵上の東西の尾根部 6.1基 7.水沢市史・1（昭49）	第1号墳	有	卵形	東西11 南北9.5	1.35	葺石（玉石） 土師器片（4個体） 坏…3個体はロクロ使用、糸切底、内黒処理のもの。1個体は底部をヘラでの整形	内部施設は発見されない																	ロクロ系切底をもつ坏を出していることから平安初期の造営とみられる				1.在地の有力者の墳と見るべきであろう。
1.杉山古墳 2.西磐井郡花泉町杉山 3.昭和30年 4.花泉町教育委員会 5.宮城・岩手県境の丘陵地 6.5基 7.「日本考古学年報」8「和賀町史」参照	第1号墳	有		8	1.4										鉄直刀断片													1.石室破壊 横穴式積石石室底部残存
	第2号墳	有		7.5～8.5	1.3										鉄刀柄部破片													1.石室なし
	第3号墳	有		4	0.8																							1.棺槨の痕跡なし
	第4号墳	有		6	0.8					1.7×0.4				仕切石 羨道部不鮮明、天井石なし														
	第5号墳	有								1.1×0.4				羨道部不鮮明	小形土師器壺2													1.墳形は崩れている

注）1．記載した古墳は報告書（概報・プリント等）によって報告されているものを主にした。
　　2．諸書に古墳と呼称されているものでも割愛したものもある。
　　3．表中の文面は報告書（概報・市町村史等）の記述文面に従がった。空らんは記述のないものである。
　　4．主体部、周湟の計測値のうち、位置によって数値の異なる場合は、最大値を用いた。
　　5．猫谷地古墳・八幡古墳・五条丸古墳については、昭和54年9月10日付で「江釣子古墳群」として国指定となり、更に昭和54年10月19日長沢古墳も同指定に含まれるよう審議会答申を受けている。

写　真　図　版

A．宮地遺跡　B．落合II遺跡　C．落合Ⅰ遺跡　D．力石遺跡　E．鴻ノ巣館遺跡　F．中屋敷遺跡

図版Ⅰ　江刺市愛宕地区空中写真（新幹線にかかわる遺跡）

A.高畑遺跡　B.八幡遺跡

図版II　花巻・石鳥谷空中写真(新幹線にかかわる遺跡)

A.白沢遺跡　B.古館橋遺跡　C.古館駅前遺跡　D.杉ノ上Ⅰ遺跡　E.杉ノ上Ⅱ遺跡

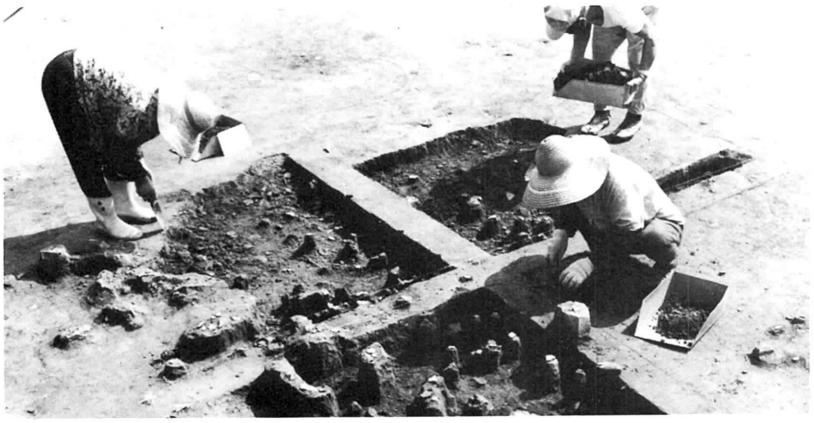
図版Ⅲ　矢巾・紫波空中写真（新幹線にかかわる遺跡）

鴻（こう）ノ巣館（すだて）遺跡

1．調査区中央部より
北方を望む

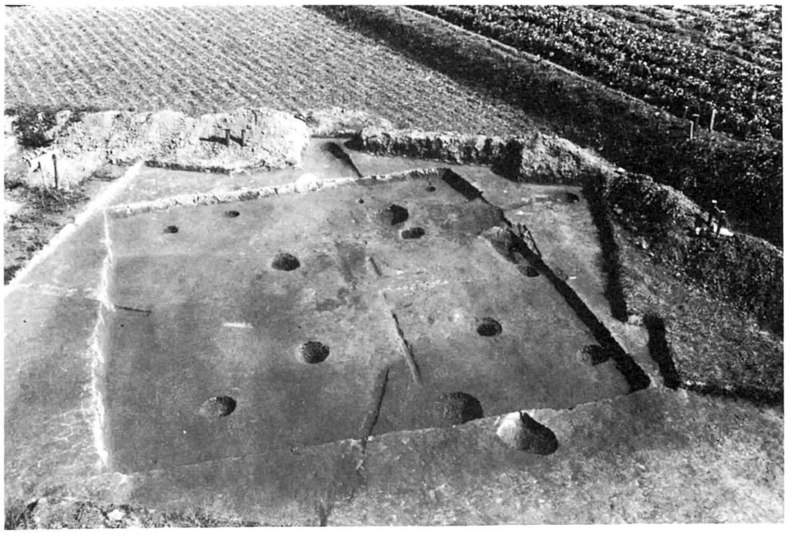
2．同南方部を望む

3．ＦＣ09住居跡発掘
作業（南方より）



4．ＥＪ50ピット発掘
作業（南方より）

図版１　調査区付近の現状および作業風景



1．ＡＦ03住居跡全景
（西より）

2．刀子出土状況
（南より）

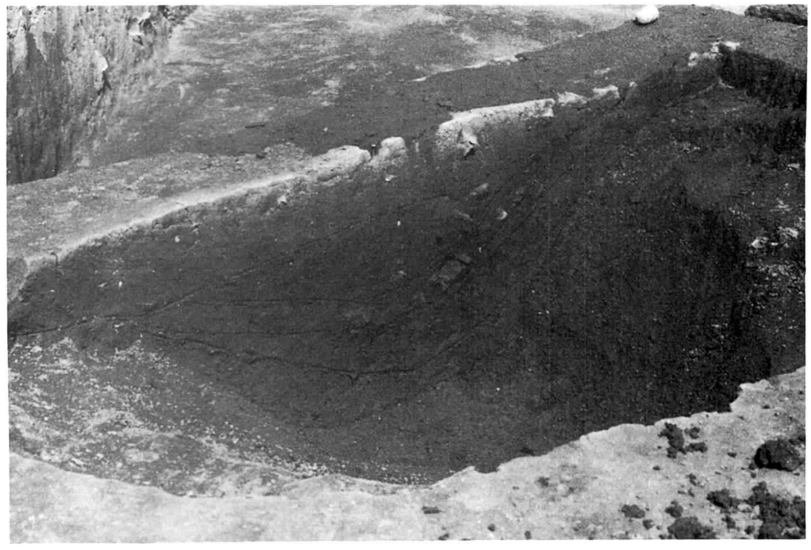
3．長頸瓶出土状況
（南南東より）

図版２　ＡＦ03住居跡

1．ＦＡ06住居跡全景
（南東より）

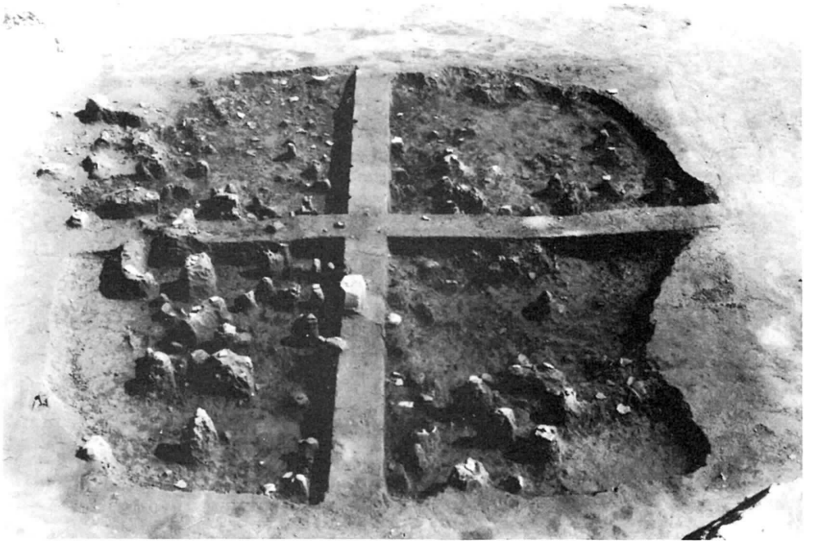
2．鉄製鋤先出土状況
（南西より）

3．P_5土層堆積状況
（南東より）

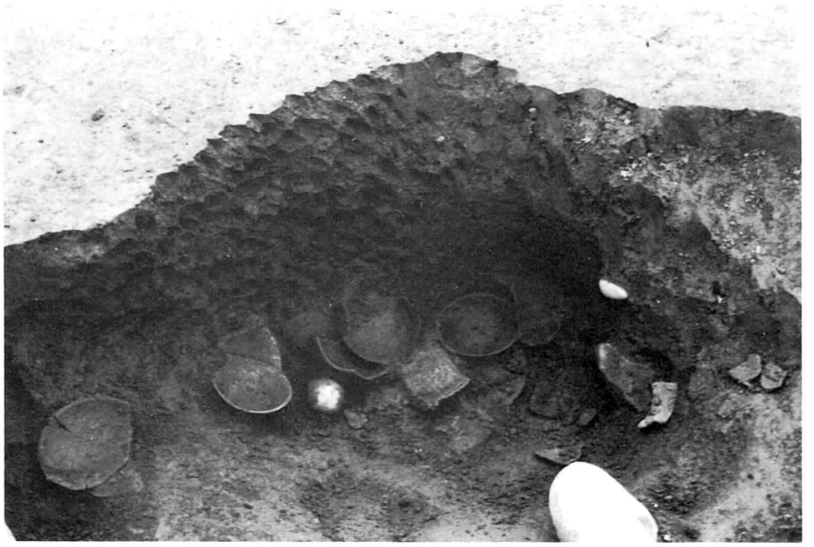


図版３　ＦＡ03住居跡

1．ＦＣ09住居跡および
ＦＣ06ピット
（北北東より）



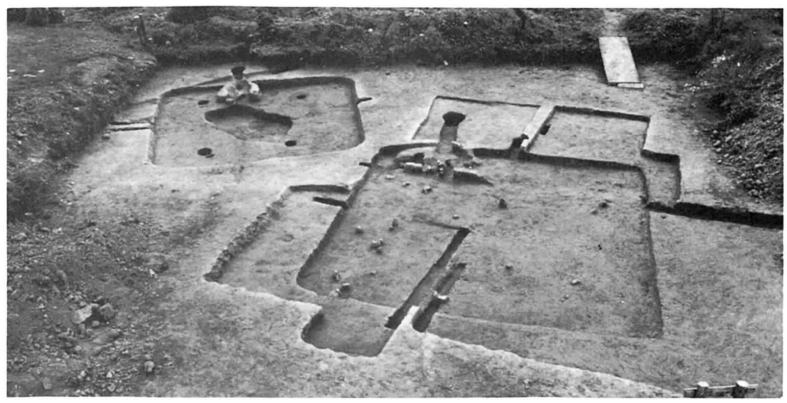
2．住居跡上層の遺物出土
状況（南より）



3．P_4内の遺物出土状況
（北西より）

図版４　ＦＣ09住居跡

1．ＦＧ03住居跡および
　ＦＩ50住居跡全景
（北北西より）

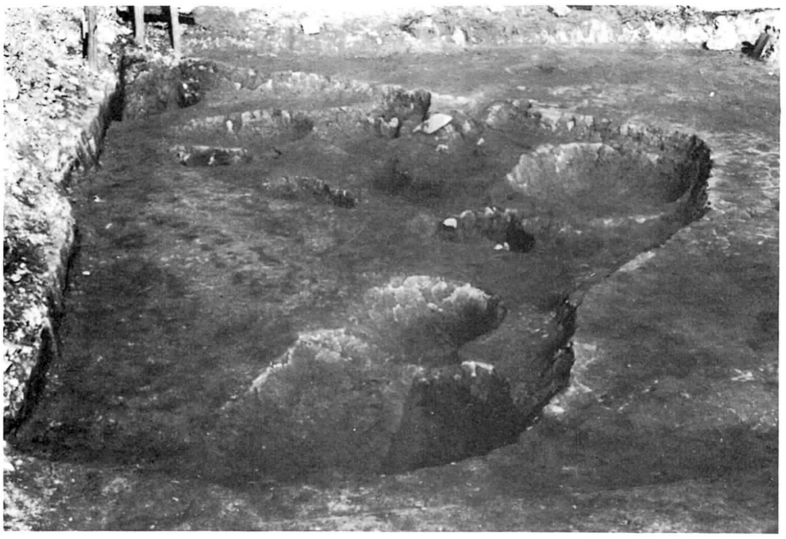


2．ＦＧ03住居跡全景
（北北西より）

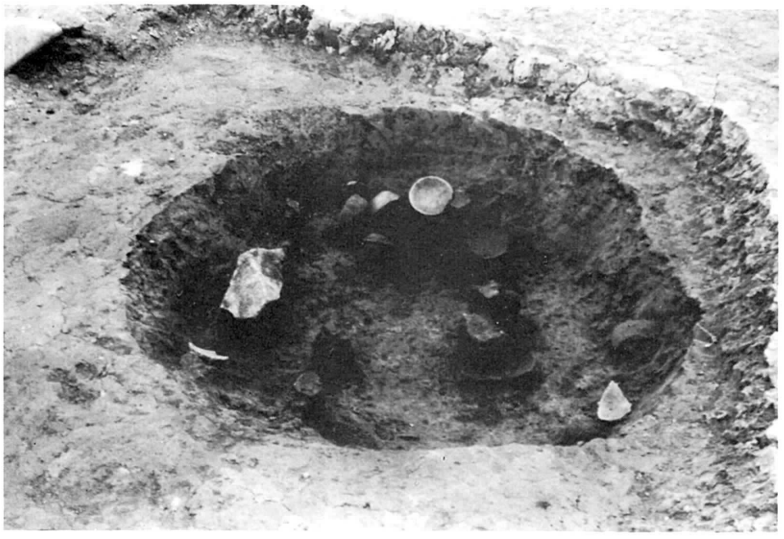
3．ＦＩ50住居跡全景
（北西より）

4．ＦＩ50住居跡土錘出土状況
（東より）

図版５　ＦＧ03住居跡およびＦＩ50住居跡



1．ＩＨ06住居跡全景（南より。
一部にＩＨ06溝が見える。）

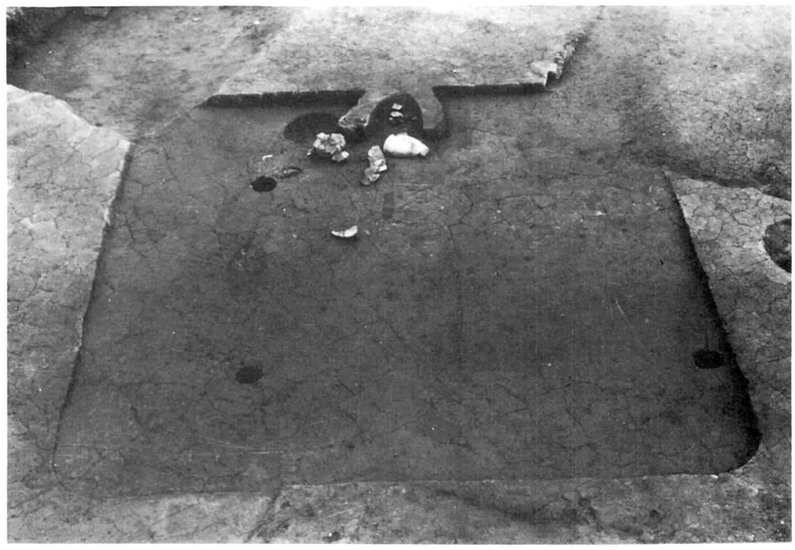


2．P_3の遺物出土状況
（南西より）

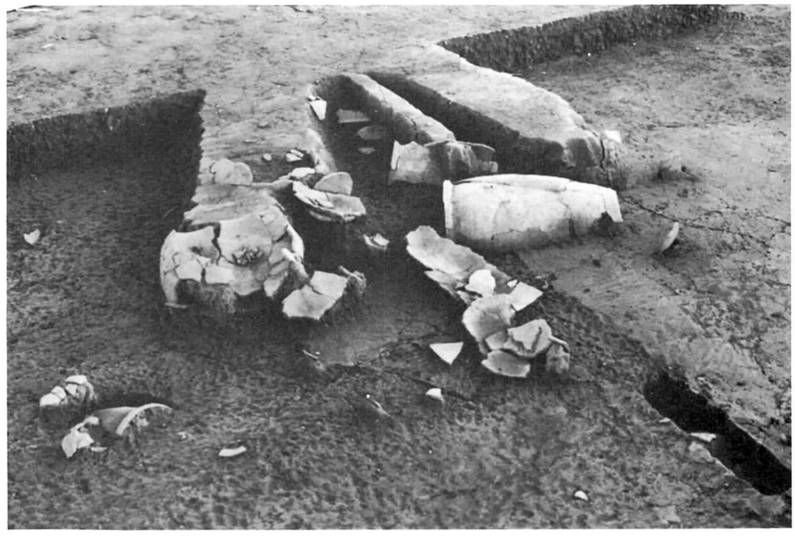
3．P_{13}～P_{15}遺物出土状況
（西より）

図版６　ＩＨ06住居跡

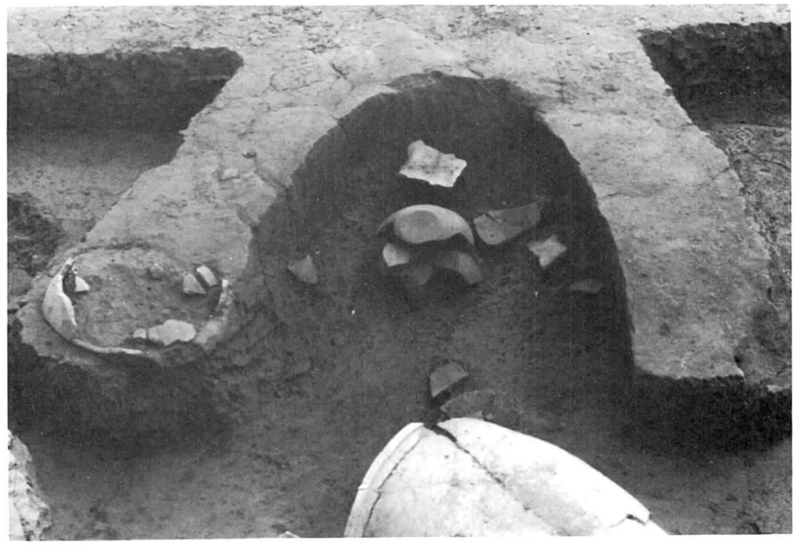
1．ＪＧ03住居跡全景
（北西より）



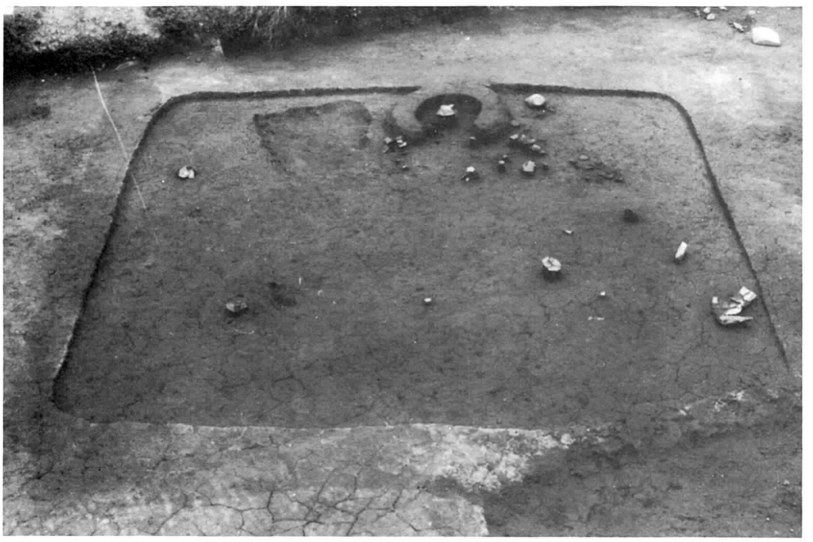
2．かまど付近の遺物出土
状況（北北東より）



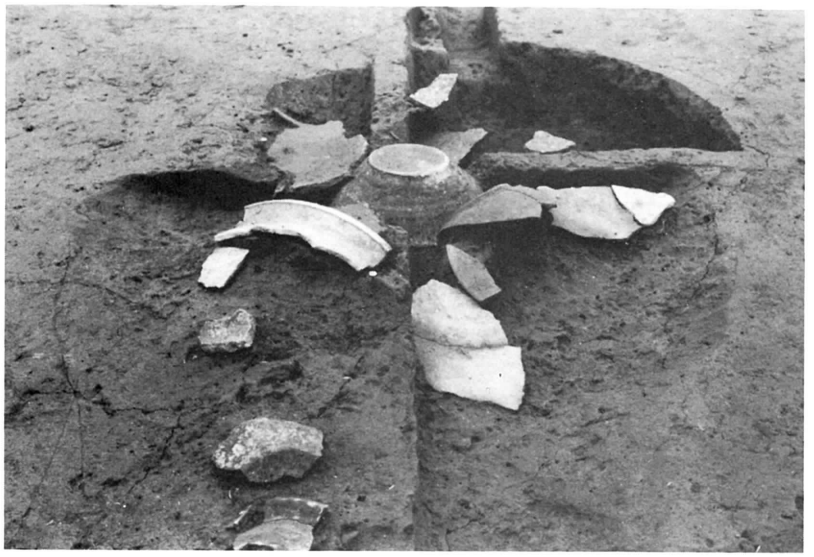
3．かまど部拡大全景
（北西より）



図版７　ＪＧ03住居跡



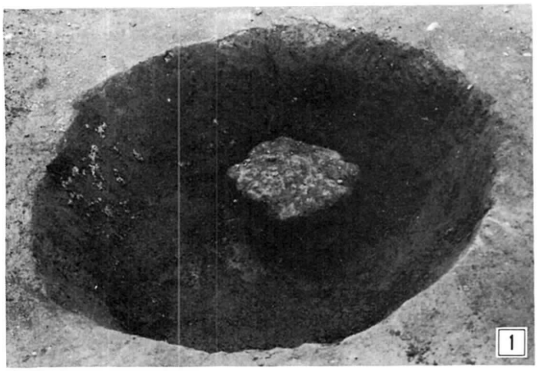
1．ＪＩ50住居跡全景
（西より）

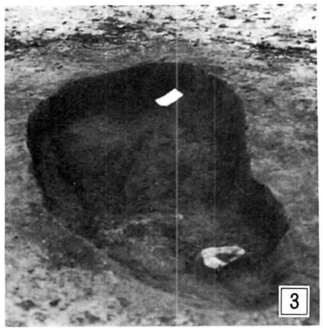


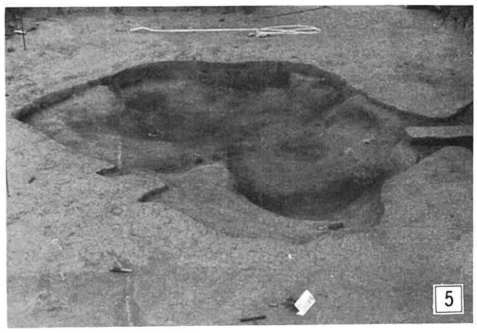
2．かまど部拡大
（西より）

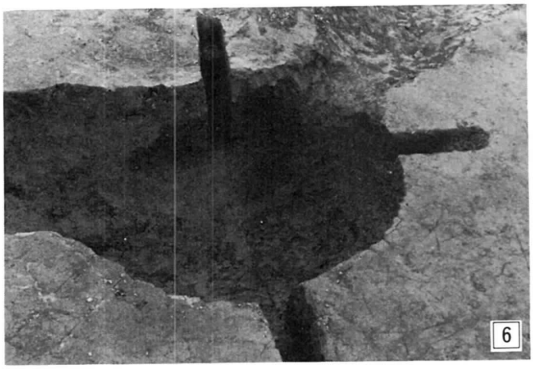
3．ＪＩ53住居跡全景
（南南西より）

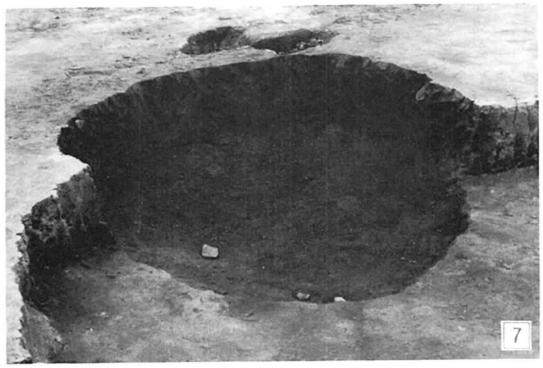
図版８　ＪＩ50住居跡およびＪＩ53住居跡

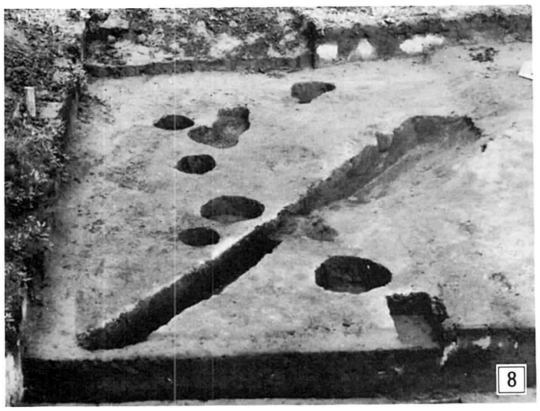


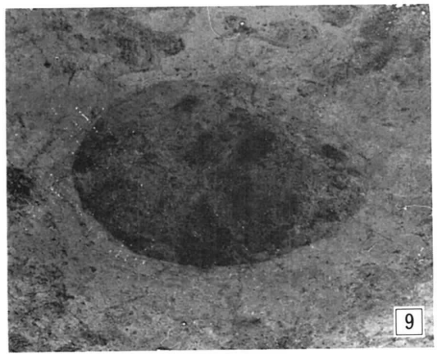












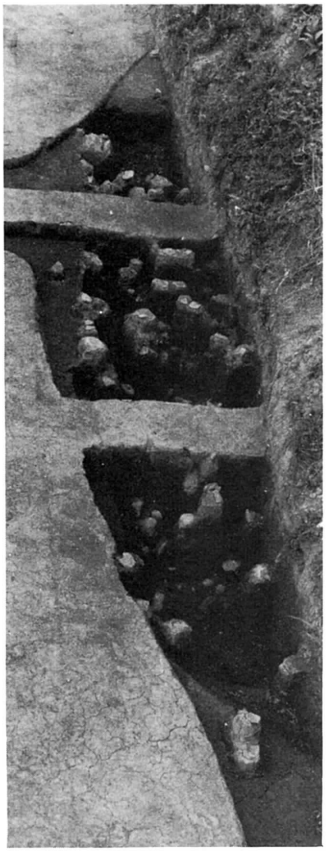
1．ＥＣ53ピット　2．ＢＪ06ピット　3．ＥＢ03ピット　4．ＥＤ50ピット　5．ＥＪ50ピット
6．ＩＪ03ピット　7．ＦＣ06ピット　8．ＭＤ50・ＭＥ50グリッド内のピット群　9．ＪＨ03ピット

図版９　各ピット類

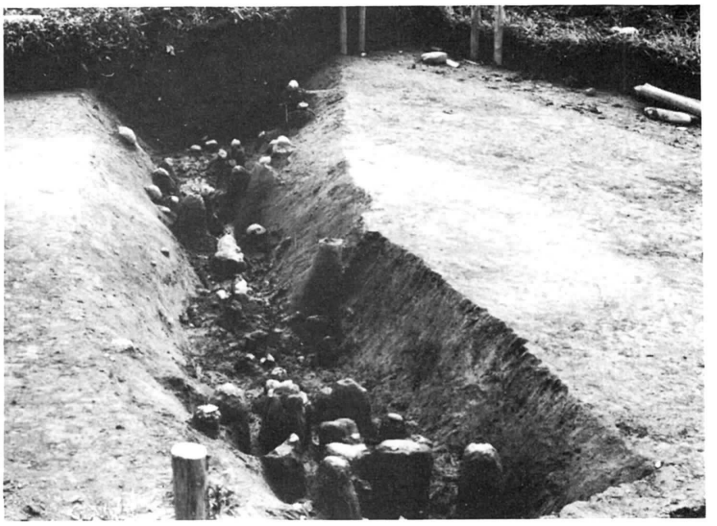
1．ＪＡ03溝、ＪＡ06溝、
ＩＪ03ピット、
ＪＡ03ピット(1)(2)
（南北西より）

2．ＬＡ06溝
（南南西より）

3．ＢＪ06溝西部および
ＢＪ06ピット、
ＣＡ06ピット
（南南東より）

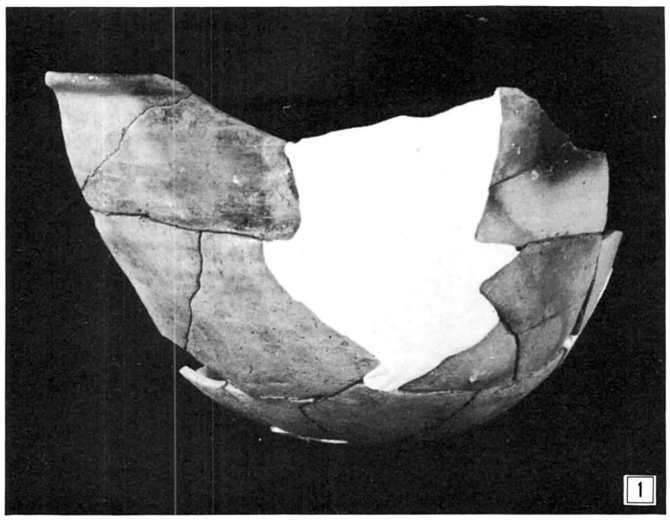


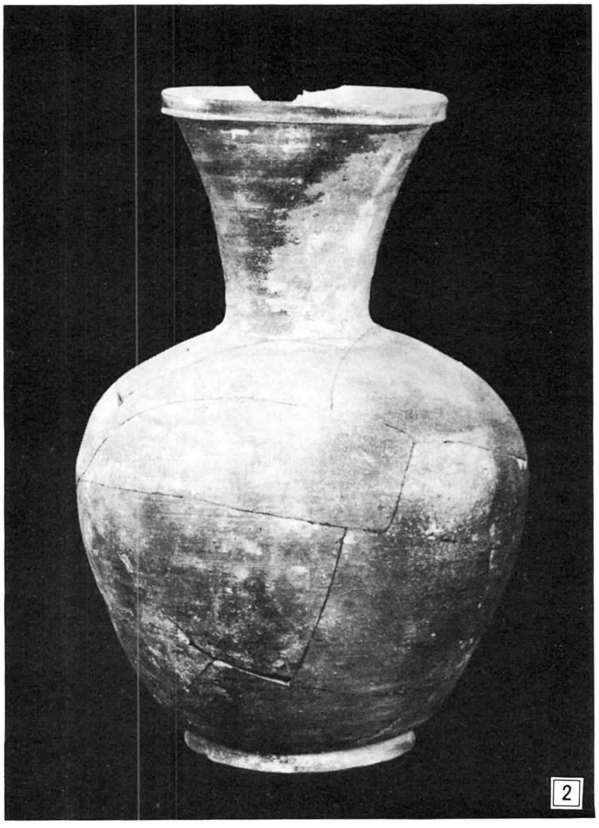
4．ＥＪ53住居跡遺物出土状況
（南南東より）

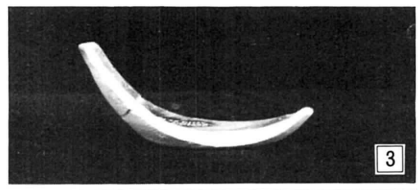


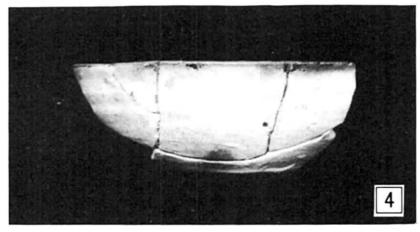
5．ＢＪ06溝東部礫出土状況（西北西より）

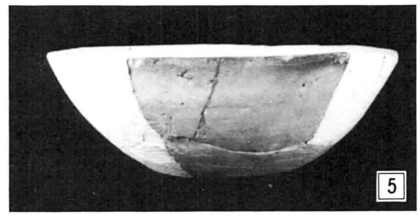
図版10　ＥＪ53住居跡およびその他の溝、ピット類

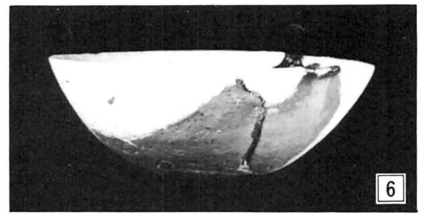


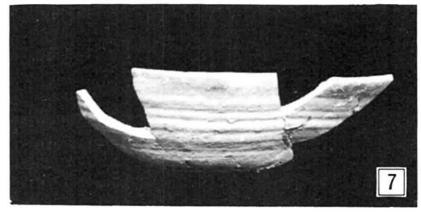






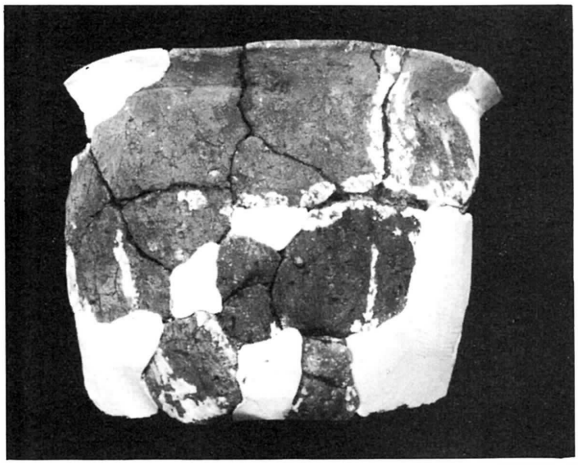




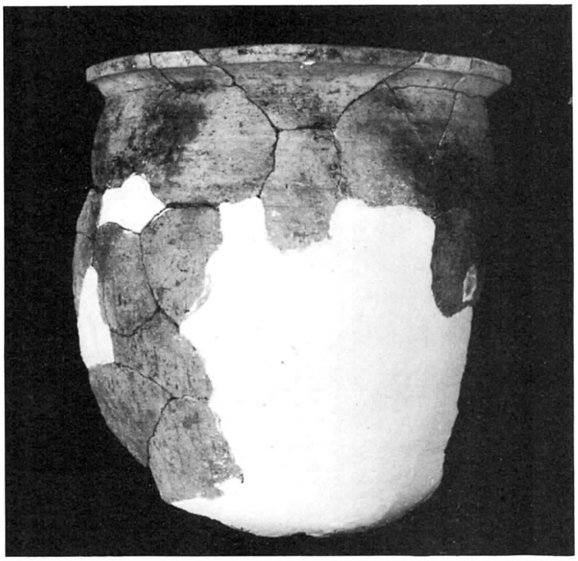


1．内黒鉢
2．長頸瓶
3～8．坏類　うち3～6内黒坏類、7は須恵器坏類、
　　8は非内黒土師質坏類
9．長胴カメ　胴体下部

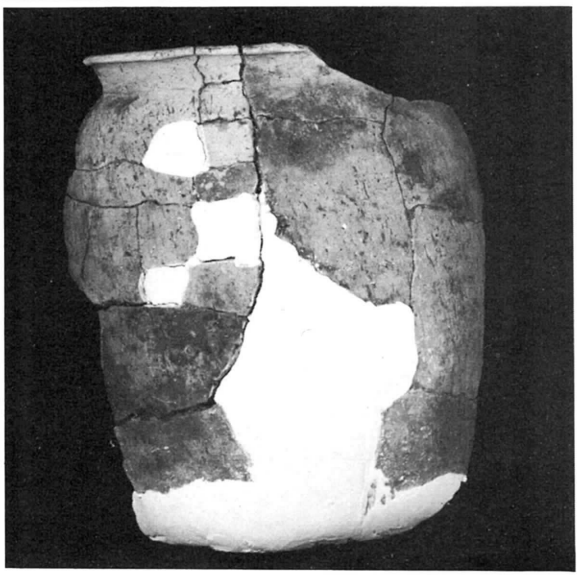
図版11　ＡＦ03住居跡出土焼物類（約$\frac{1}{3}$）



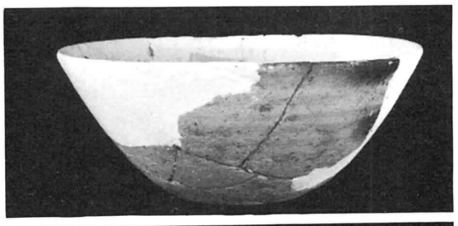
1



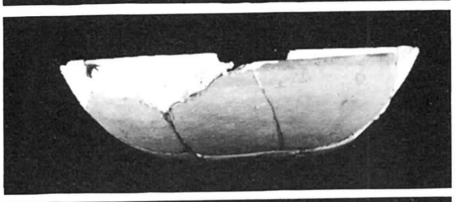
2



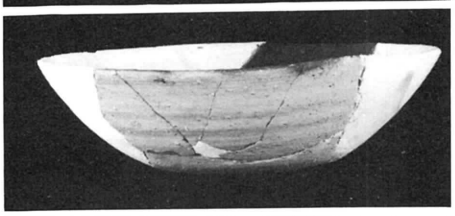
3



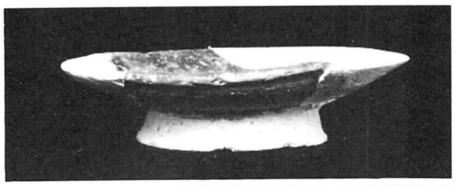
4



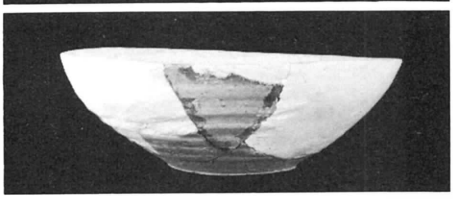
5



6

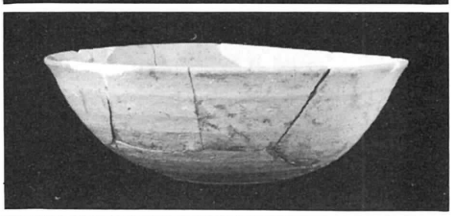


7

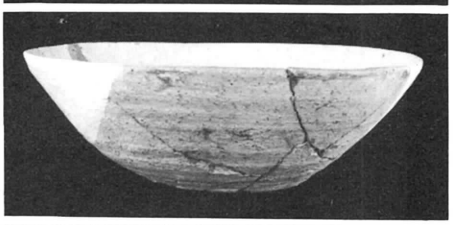


8

9



10

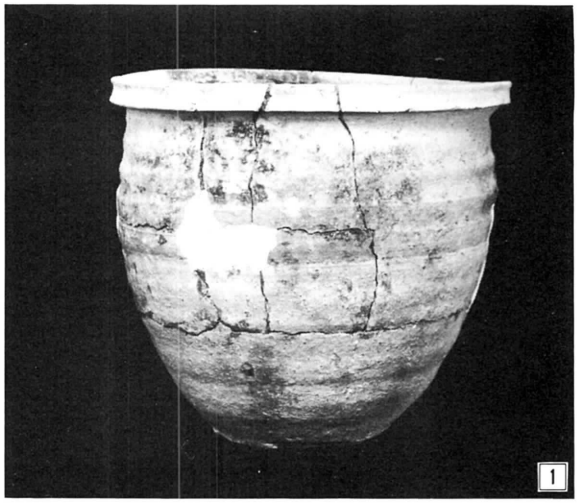


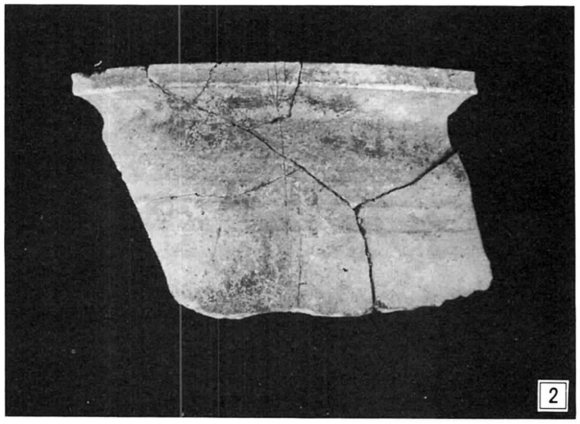
11

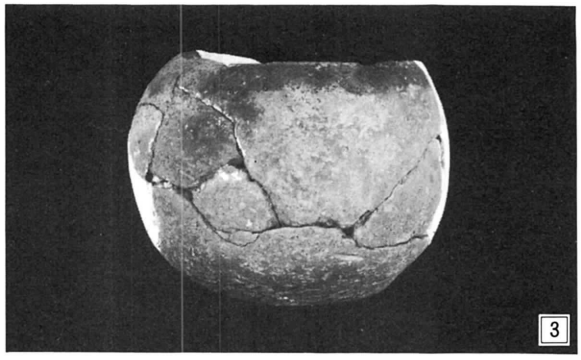
12

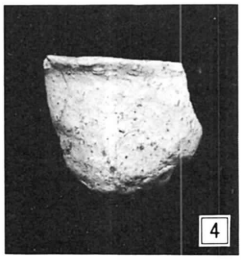
1～3.長胴カメ類　2のみロクロ使用
4～7.内黒坏類　7は高台付
8～12.非内黒土師質坏類

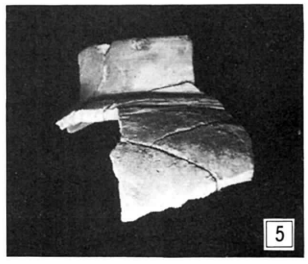
図版12　ＦＡ06住居跡出土焼物類（2・3約$\frac{1}{4}$、14～12約$\frac{1}{3}$）

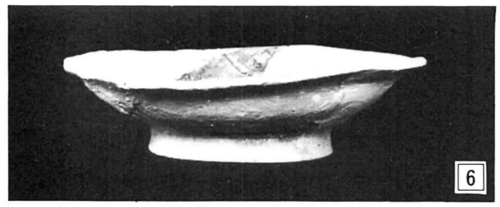


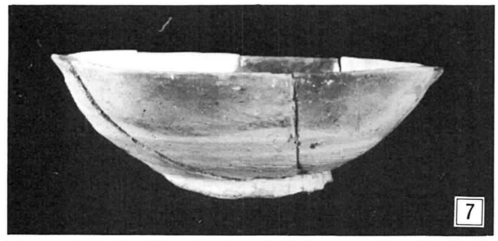


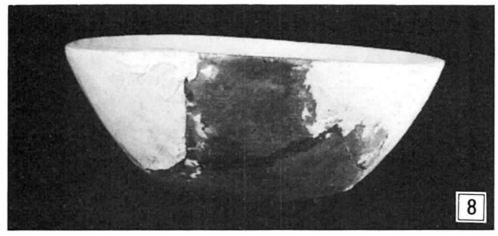


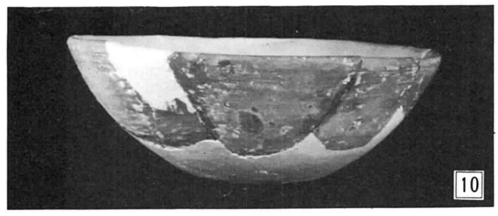


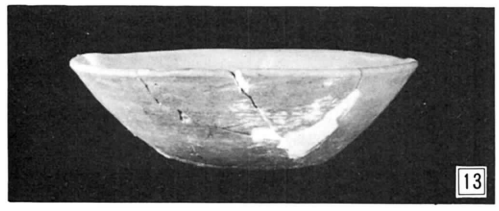






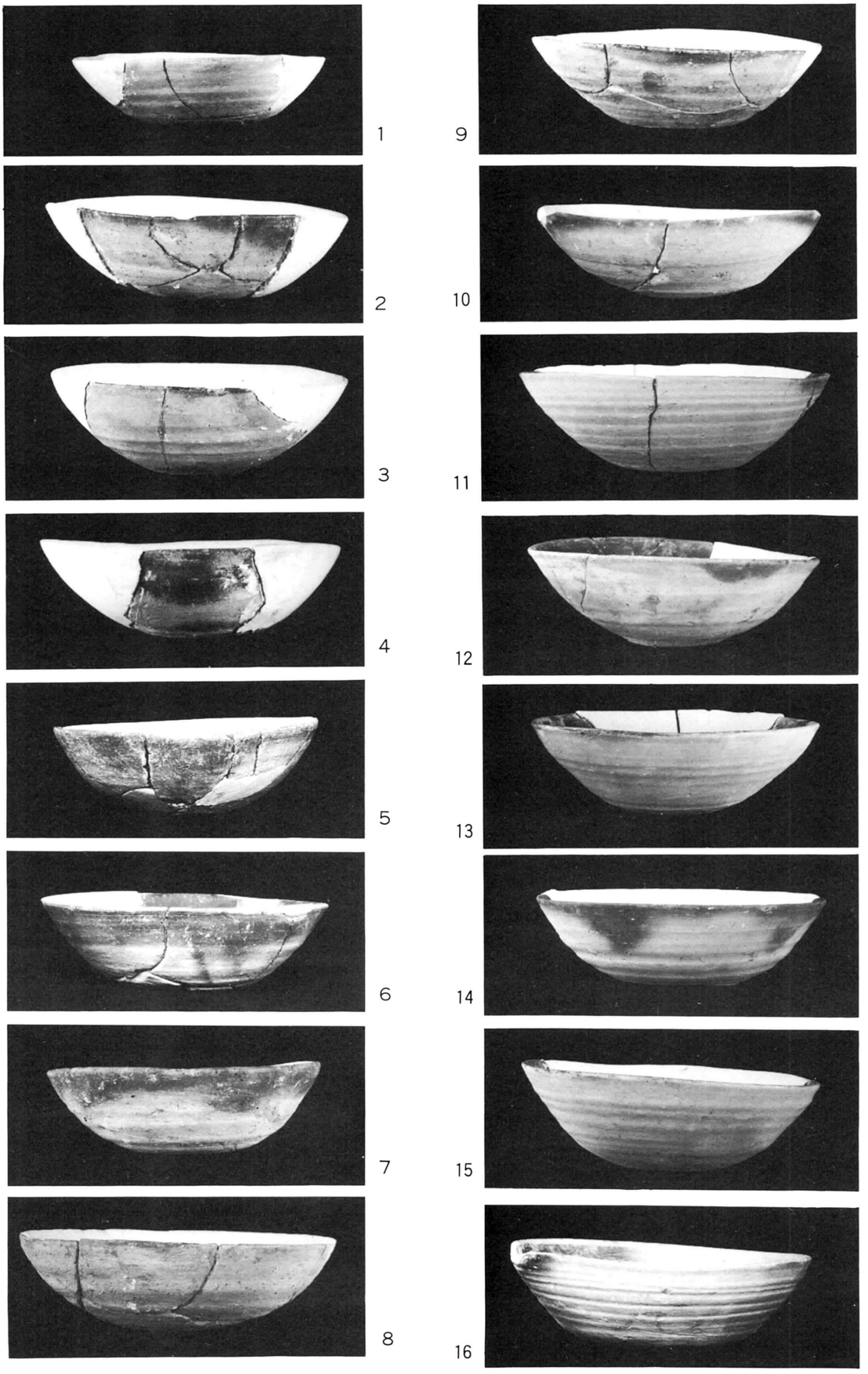






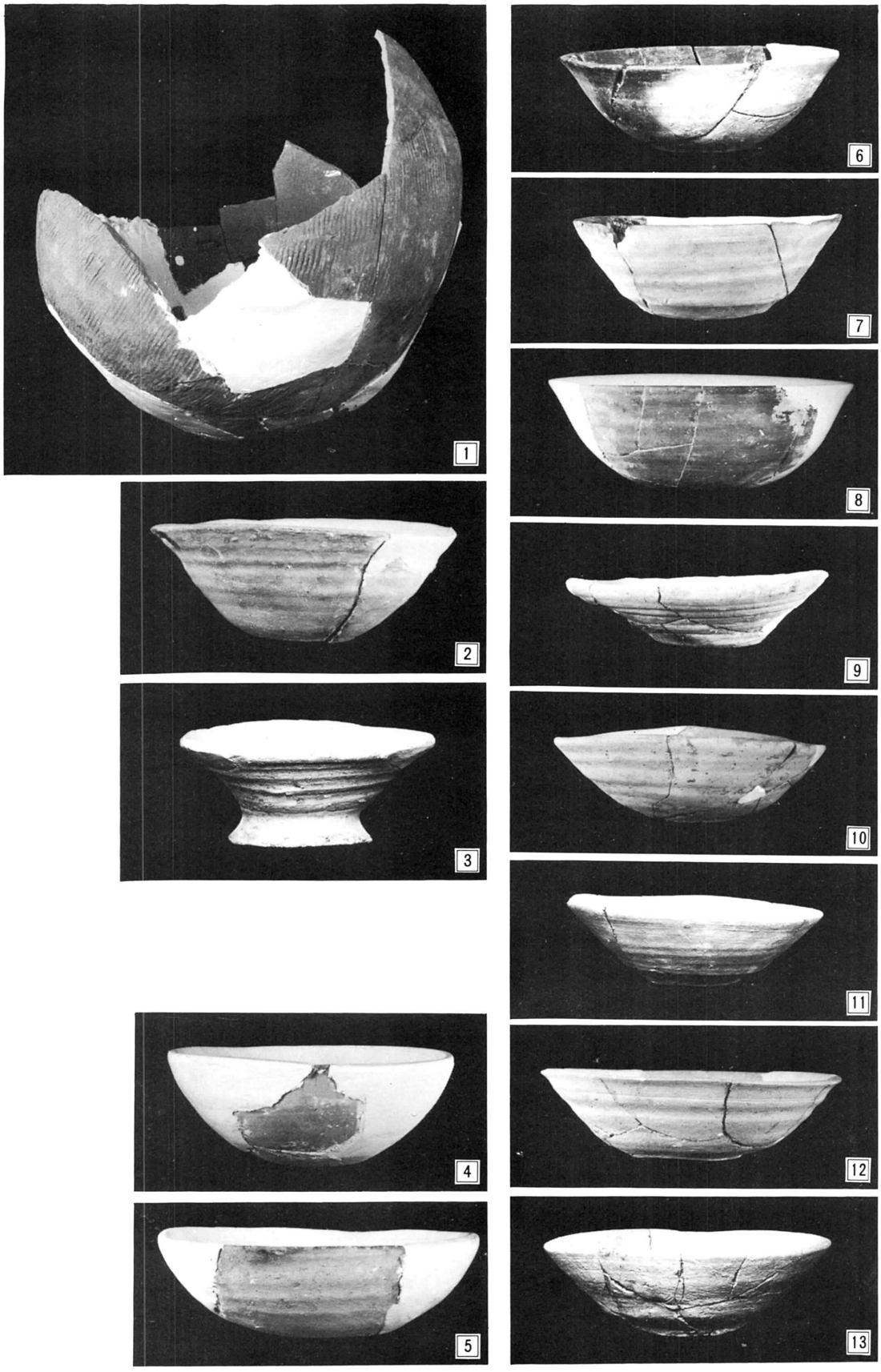
1.小型カメ　ロクロ使用
2.長胴カメ　ロクロ使用、口辺部破片
3.球型土器　4.ミニチュア土器　5.壺
6～13.坏類　6～8、内黒坏類　9～12、非内黒土師質坏類　13、須恵器坏類

図版13　ＦＣ09住居跡出土の焼物類（１～13約$\frac{1}{3}$）



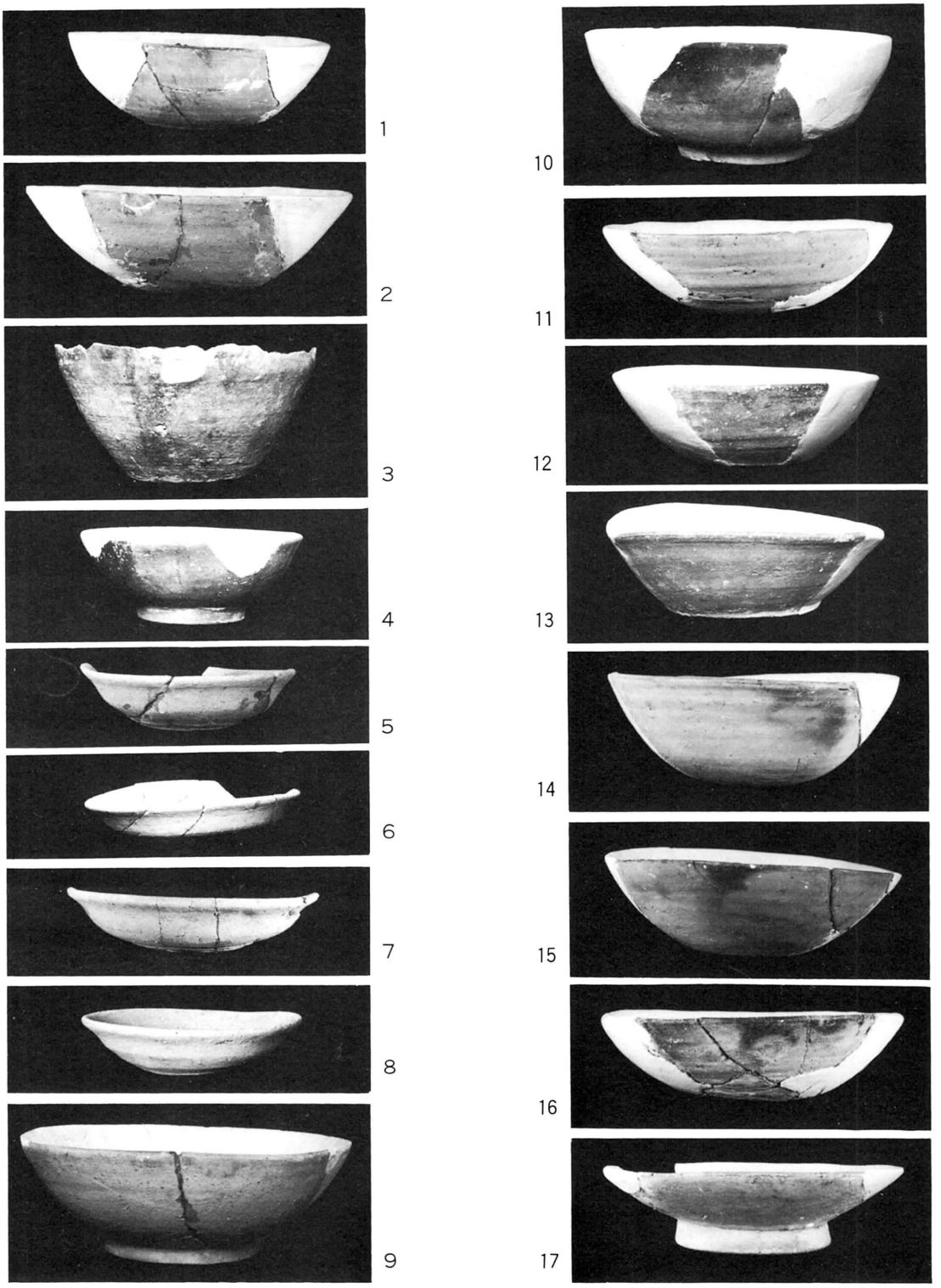
1～16.内黒坏類(16は図版18－12の坏と同じ)

図版14　ＦＣ09住居跡出土の焼物類(約 $\frac{1}{3}$)



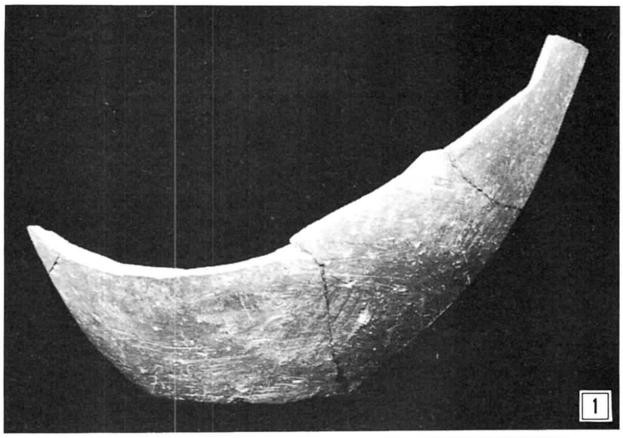
1～3・6～13．F I 50住居跡　4・5．E J 53住居跡　1．須恵器壺　2～13．坏類
うち4～8．内黒坏類　2・3・9～13．非内黒土師質坏類　3は高台付坏

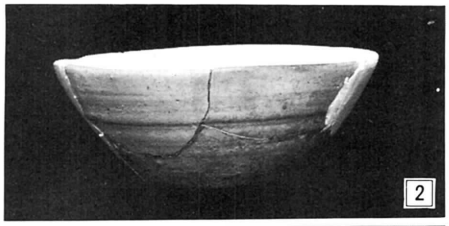
図版15　F I 50住居跡・E J 住居跡出土の焼物類（1 約 $\frac{1}{6}$、2～13約 $\frac{1}{3}$）

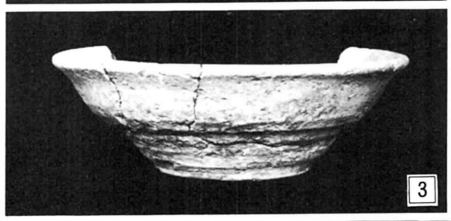


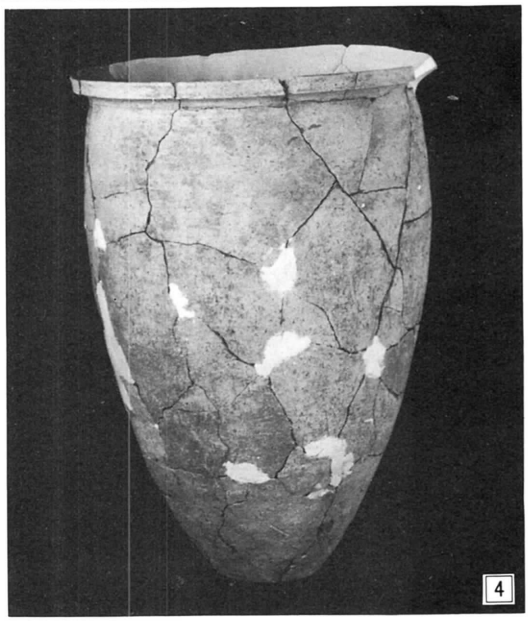
1～2．ＦＧ06住居跡　内黒坏類
3．　〃　小型カメ下半部
4．ＩＨ06住居跡　内外黒高台付坏
5～8．　〃　小型非内黒坏類
9～10．　〃　内黒高台付坏類
11．ＪＩ53住居跡　内黒坏
12．　〃　須恵器坏
13．ＢＪ06ピット　〃
14．　〃　内黒坏
15～16．Ｅ・Ｆ区（16はＦＣ09住居跡検出時）内黒坏類
17．ＪＢ06グリッド　内黒高台付坏

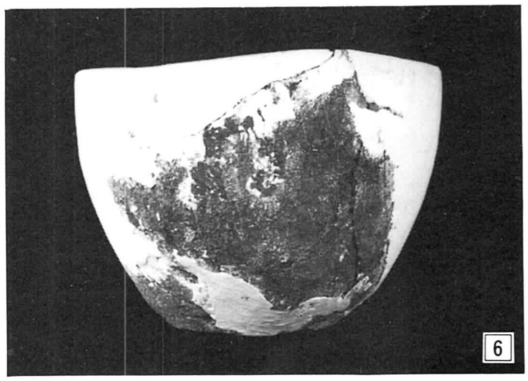
図版16　ＦＧ06住居跡・ＩＨ06住居跡・ＪＩ53住居跡・ＢＪ06ピット・各グリッド内出土の焼物類（約$\frac{1}{3}$）

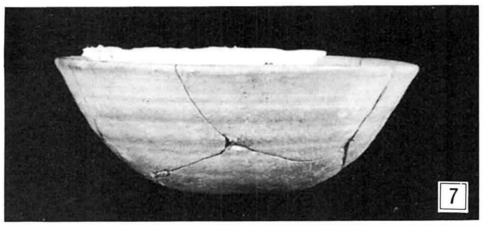


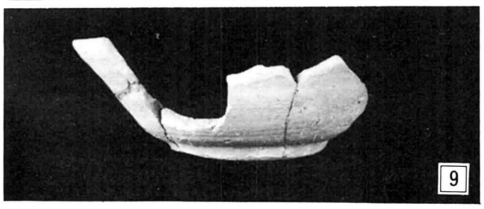






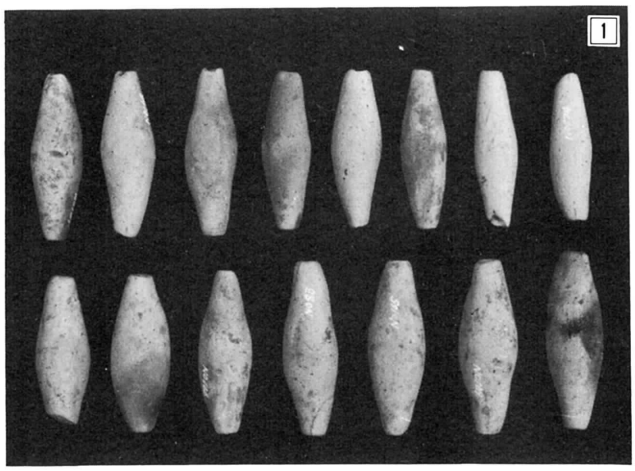


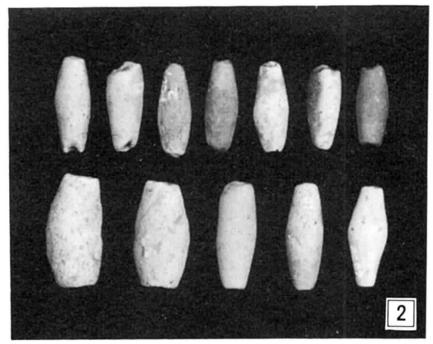




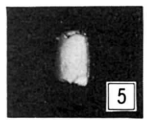
1～5．ＪＧ03住居跡　6～8．ＪＩ50住居跡
1．須恵器壺　4・5．長胴カメ　ロクロ使用
6．小型カメ類　ロクロ使用
2・3・7～9．坏類　うち2・7は内黒坏類3・8・9は須恵器坏類3は図版18－11と同一個体

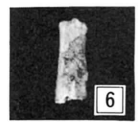
図版17　ＪＧ03住居跡・ＪＩ50住居跡出土の焼物類（1～3・6～9約$\frac{1}{3}$、4約$\frac{1}{5}$、5約$\frac{1}{4}$）

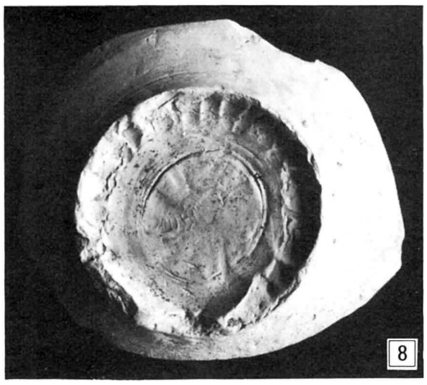


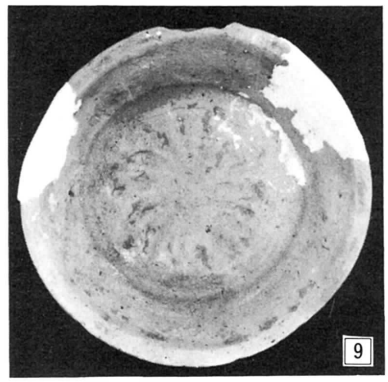


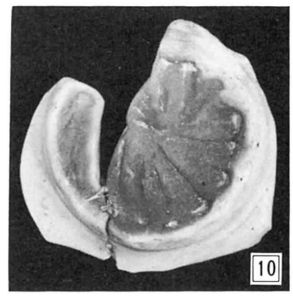
1～5.土錘
1.FI50住居跡
2・5.FC09住居跡
（但し5は検出時出土）
3.FG06住居跡
4.FA06住居跡
6.骨片
IH06住居跡P1
7.粧痕のある小型カメ類底部
JG03住居跡

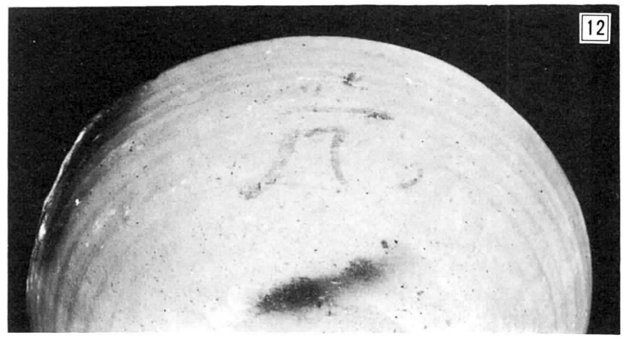






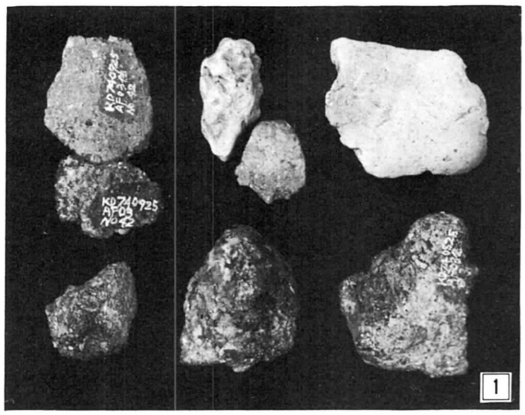


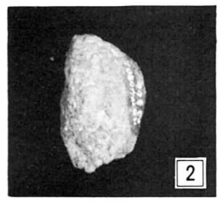


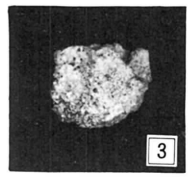


8～10.高台付坏類の高台部付着状況　8・9.FC09住居跡　10.F区
11.底面中央部に渦の中心が見られる坏　JG03住居跡　12.「亢」の墨書のある内黒坏　FC09住居跡

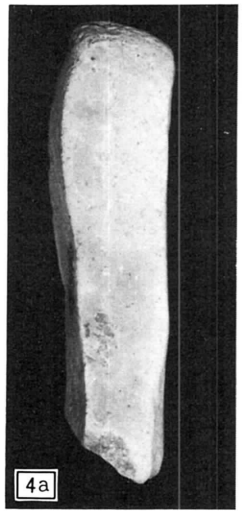
図版18　各遺構出土の土錘、骨片および土器底面、墨書など（1～11約$\frac{1}{2}$、12約$\frac{2}{3}$）

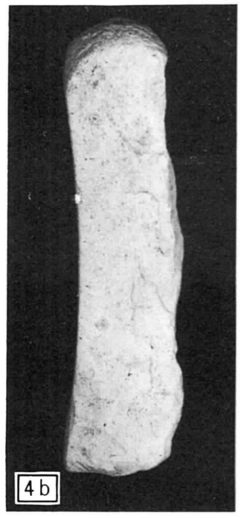


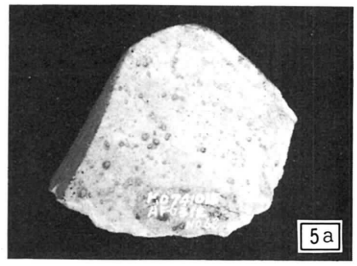


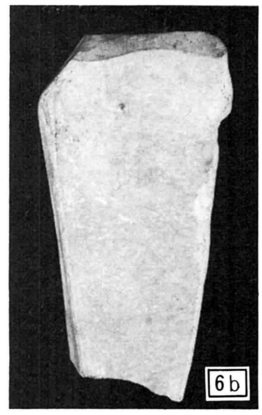


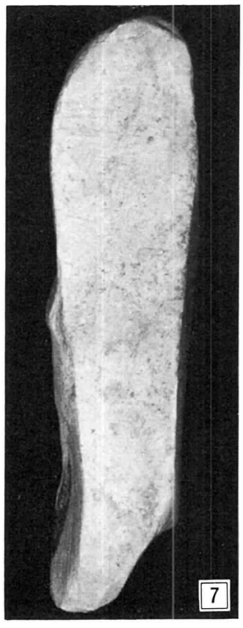
1～3.土製フイゴ羽口破片
1.ＡＦ03住居跡
2.Ｆ区
3.ＪＧ03住居跡

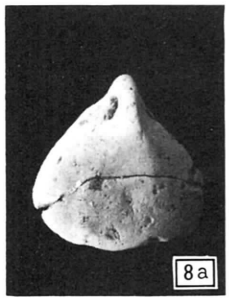


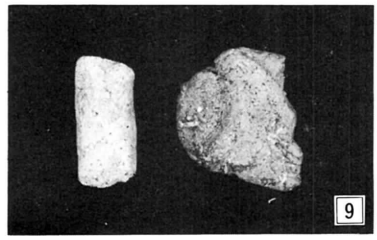






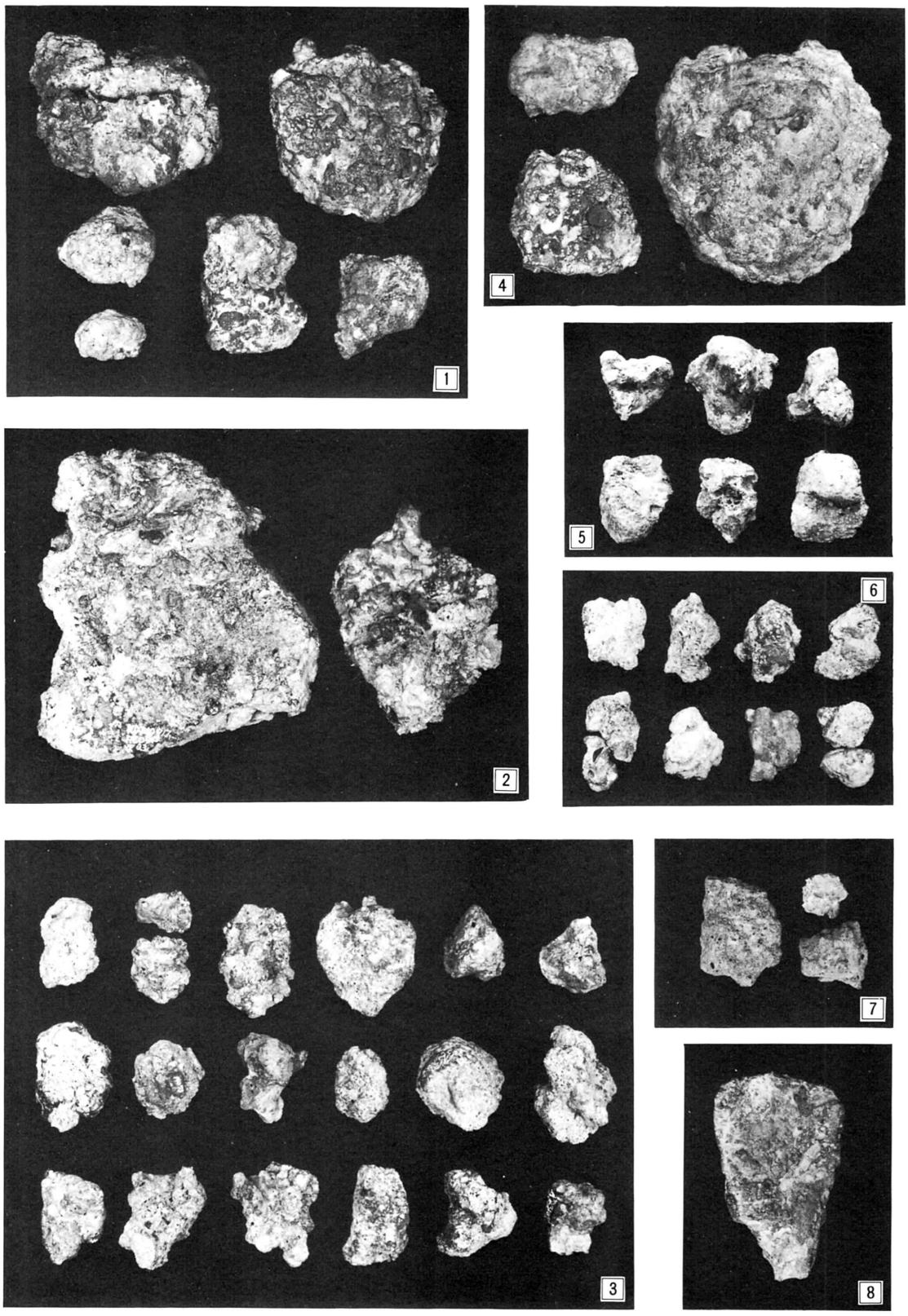




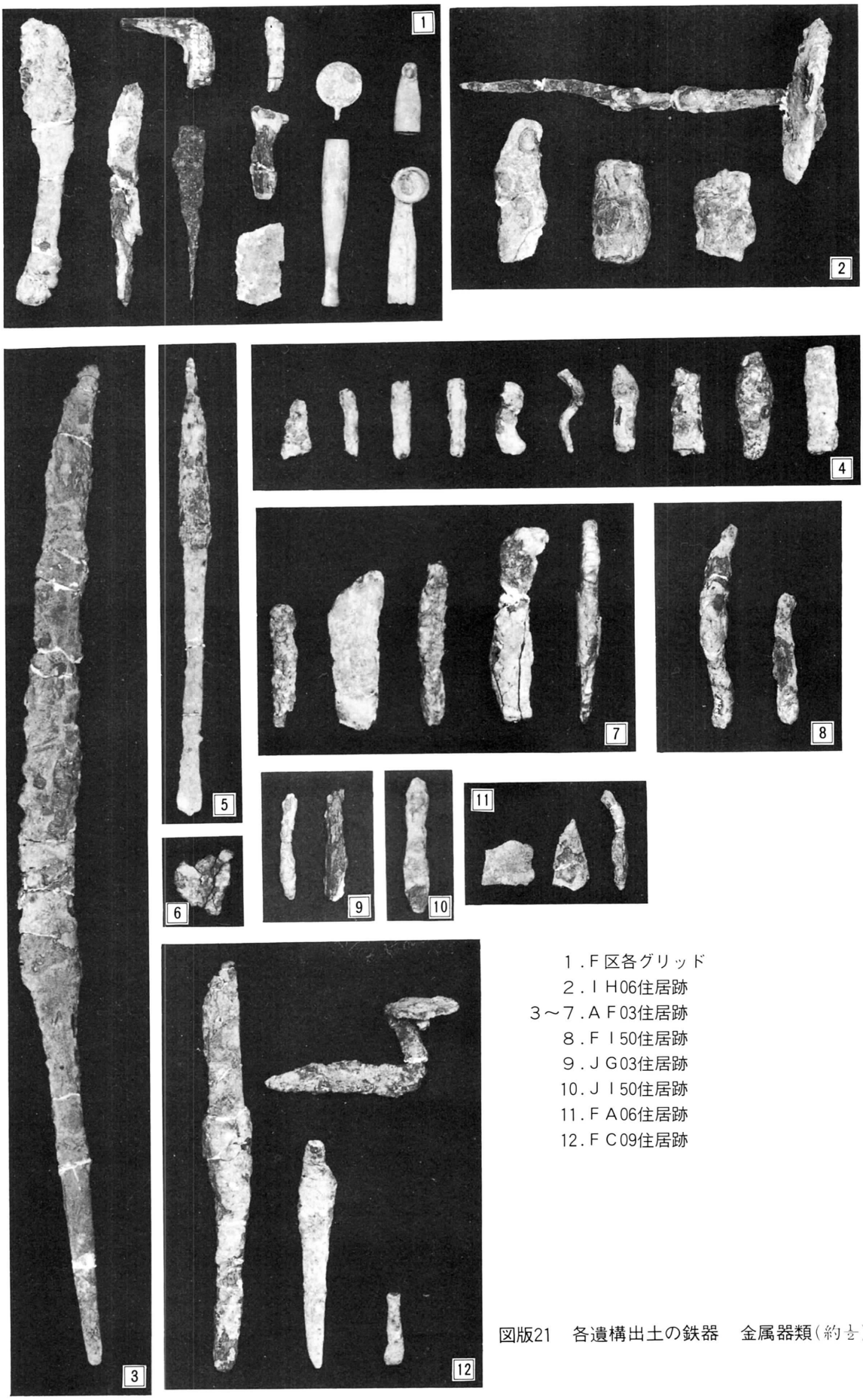


4～7.砥石および類似石片
4a･b.
4a・b.ＪＩ53住居跡
5a・b.ＡＦ03住居跡
6a・b.ＭＤ503ピット
7.ＪＩ50住居跡
8a・b .土鈴　Ｆ区
9.土製品２種　ＡＦ03住居跡

図版19　各遺構出土の土製品、石製品類（約 $\frac{1}{2}$）

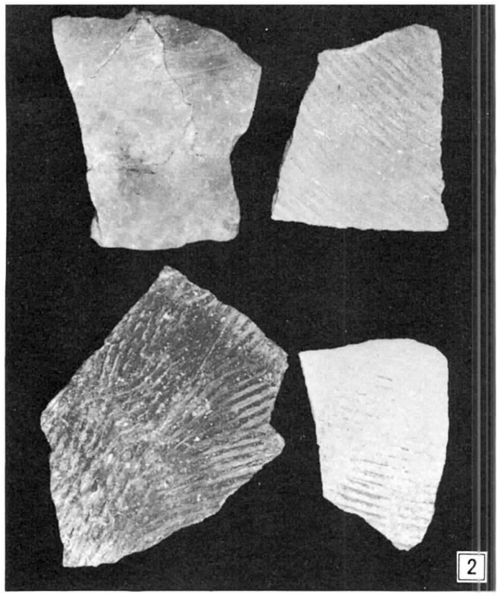


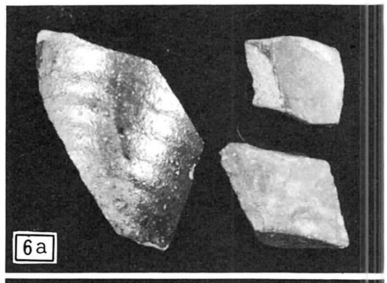
1・3．AF03住居跡　2．FC09住居跡　5．FA06住居跡
6．JG03住居跡　7．IH06住居跡　4．F区　8．IF03グリッド
図版20　各遺構出土の鉱滓類（約$\frac{1}{2}$）

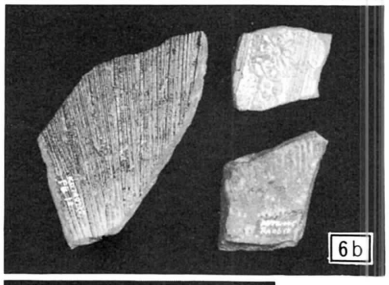


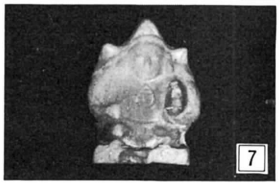
1．F区各グリッド
2．IH06住居跡
3～7．AF03住居跡
8．FI50住居跡
9．JG03住居跡
10．JI50住居跡
11．FA06住居跡
12．FC09住居跡

図版21　各遺構出土の鉄器　金属器類（約$\frac{1}{2}$）









小型神像

仏花器

5～8.近世中期以降
7は土製品、他は全て陶器

1～4.平安時代　1.鉄製鋤先金具　ＦＡ06住居跡　2.須恵器片　ＡＦ03住居跡
3.炭化野桃種子　ＩＨ06住居跡　4.炭化米　ＦＣ09住居跡
図版22　調査区内出土の各種遺物（1・2・5～7約$\frac{1}{2}$、8約$\frac{1}{3}$、3約$\frac{1}{1}$、4約$\frac{3}{1}$）

高畑遺跡（たかばたけ）

1．調査前遺跡近景
（北より）

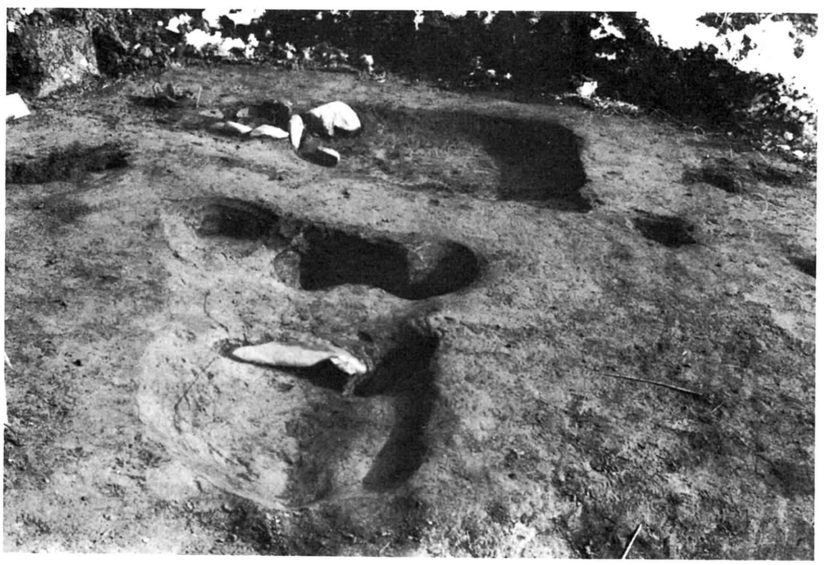
2．工事終了後遺跡近景
（北西より）（昭和54年６月18日撮影）

3．グリッド設定作業

図版１

1．ＦＥ531住居跡

2．同上炉跡



3．上・ＦＥ56炉跡
下・ＦＥ532炉跡

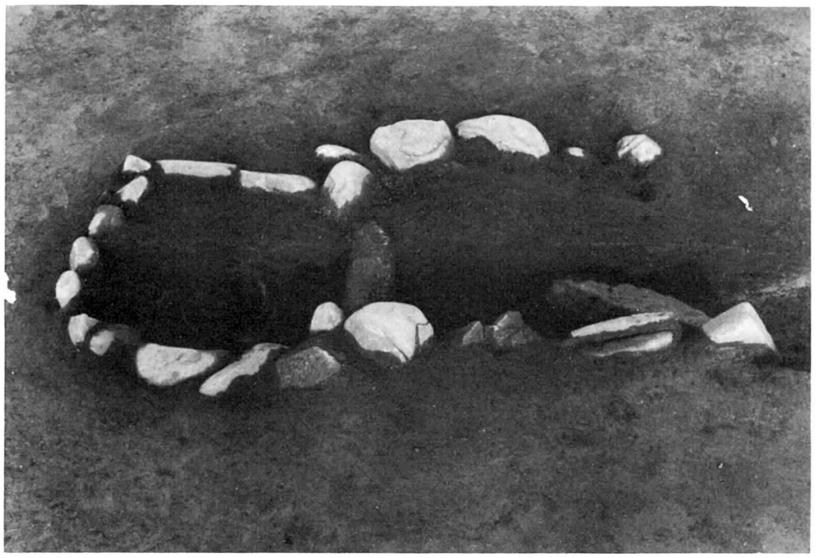
図版２

1．ＦＥ56炉跡

2．ＦＪ50炉跡

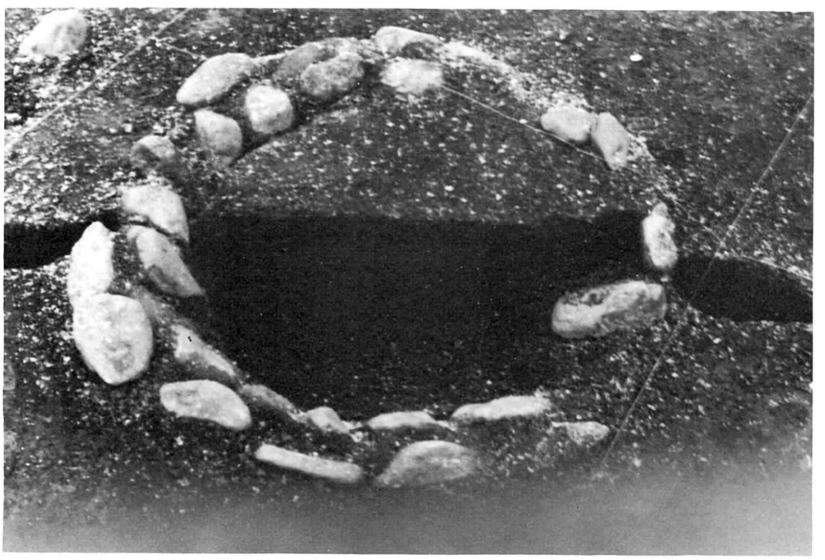
3．同上

図版３



1．ＦＪ56炉跡（住居跡）

2．ＦＩ56炉跡



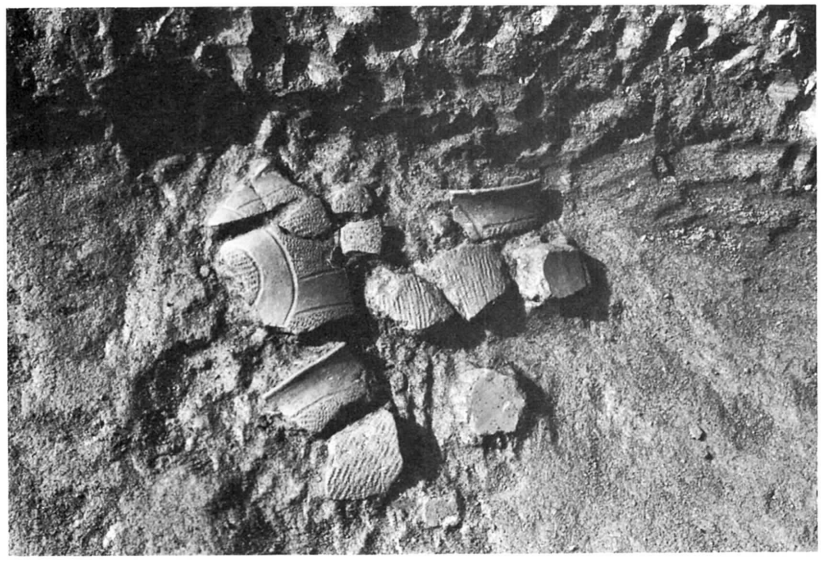
3．ＧＢ53炉跡

図版４

1．ＦＧ50住居跡

2．同上周溝

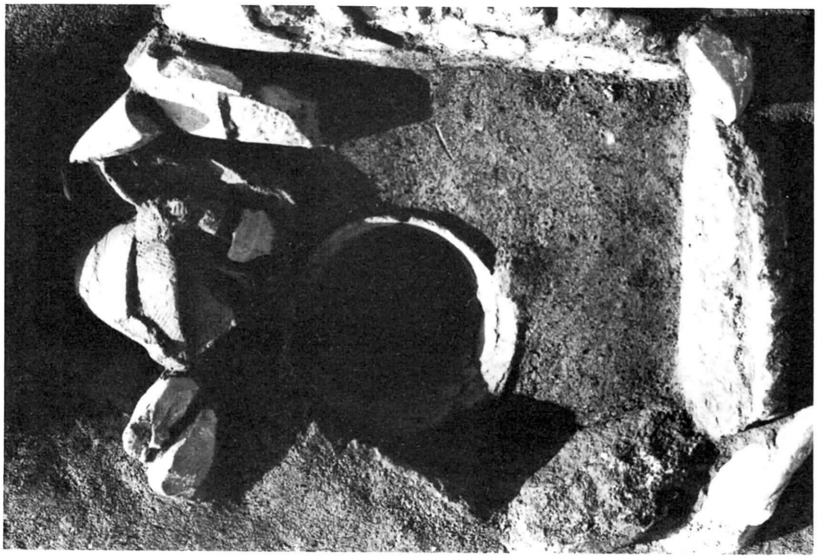
3．同上土器出土状況



図版５

1．ＦＧ50住居跡ピット11
（剝片出土状況）

2．ＦＧ50住居跡炉跡



3．同上

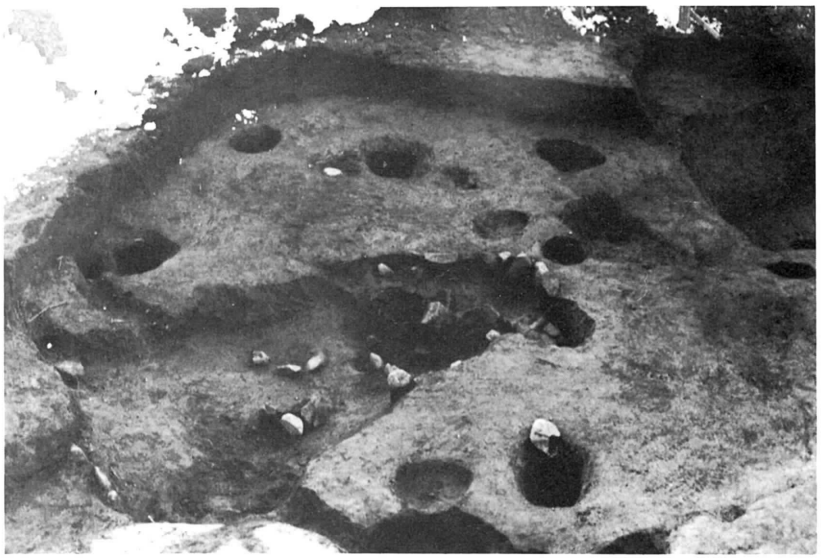
図版６

1．ＧＡ56住居跡

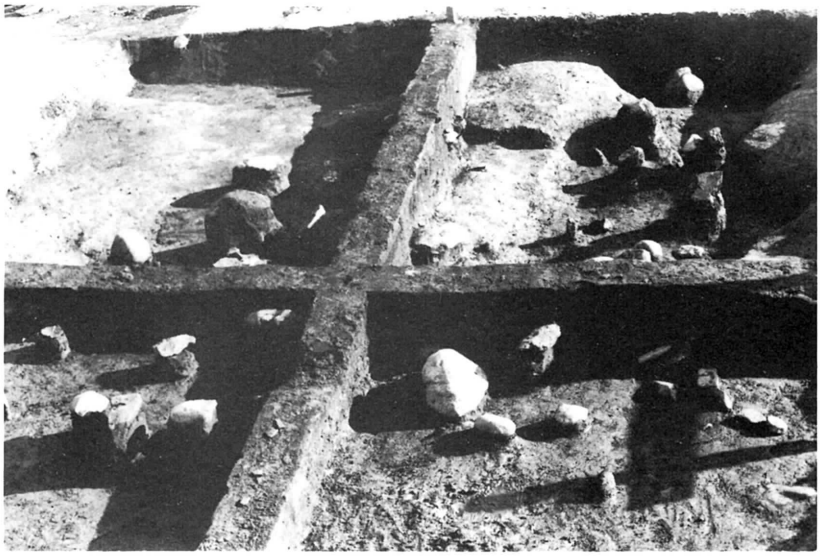
2．同上土器出土状況

3．同上炉跡

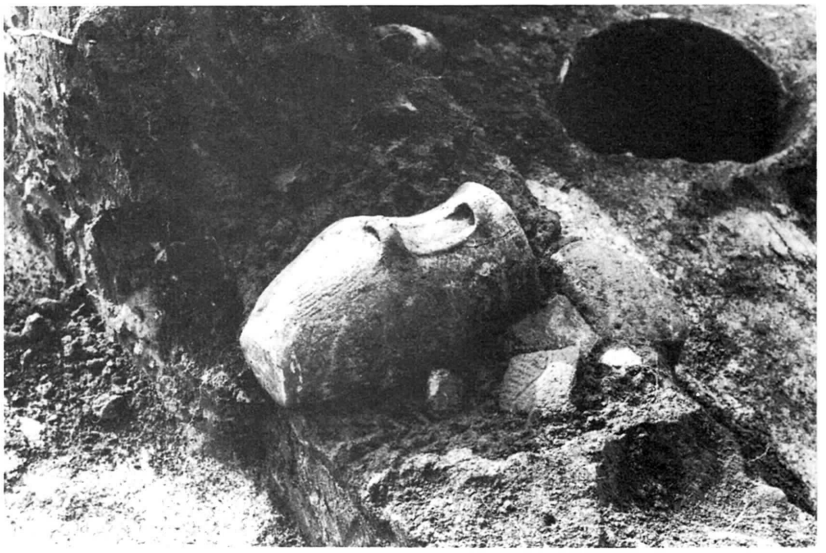
図版７



1．ＧＤ03住居跡



2．同上土器出土状況



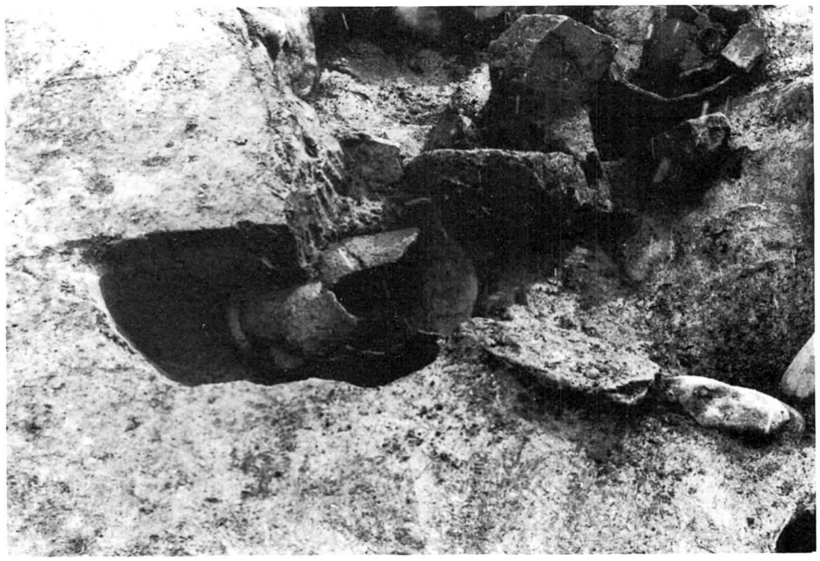
3．同上

図版８

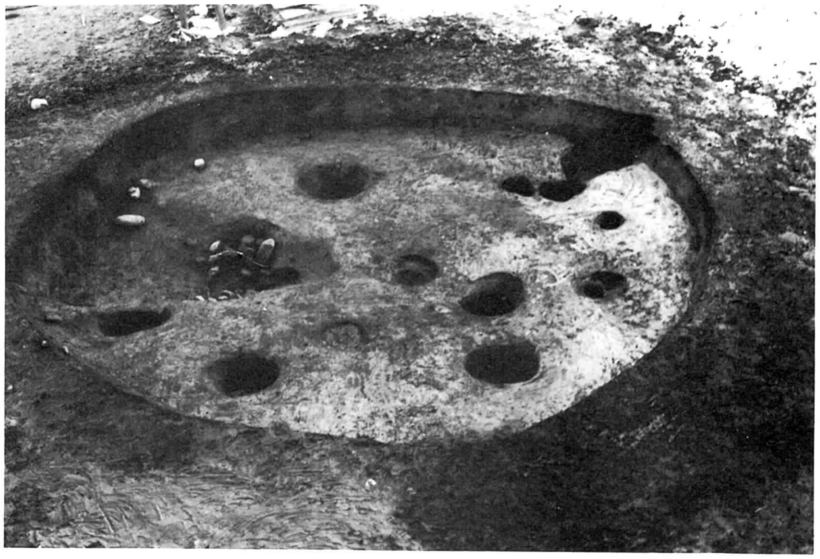
1．ＧＤ03住居跡炉跡

2．同上埋設土器

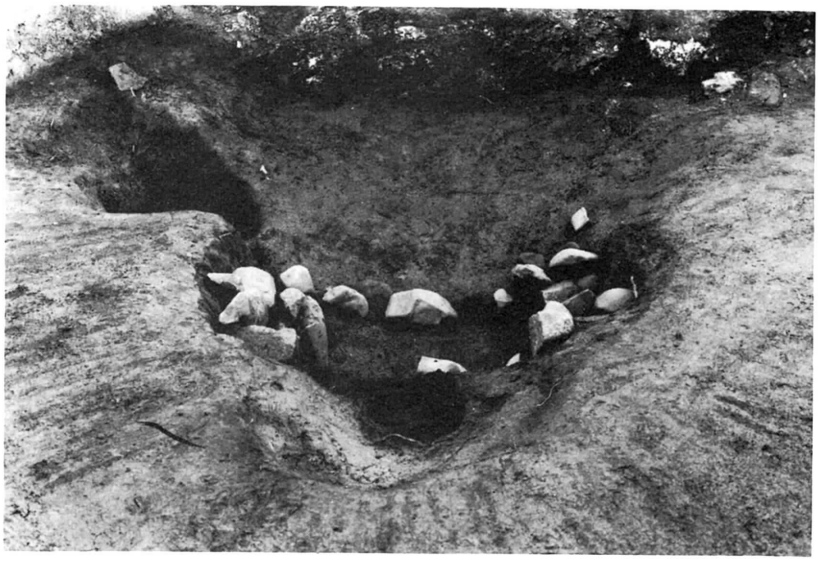
3．同上



図版９



1．ＧＥ53住居跡

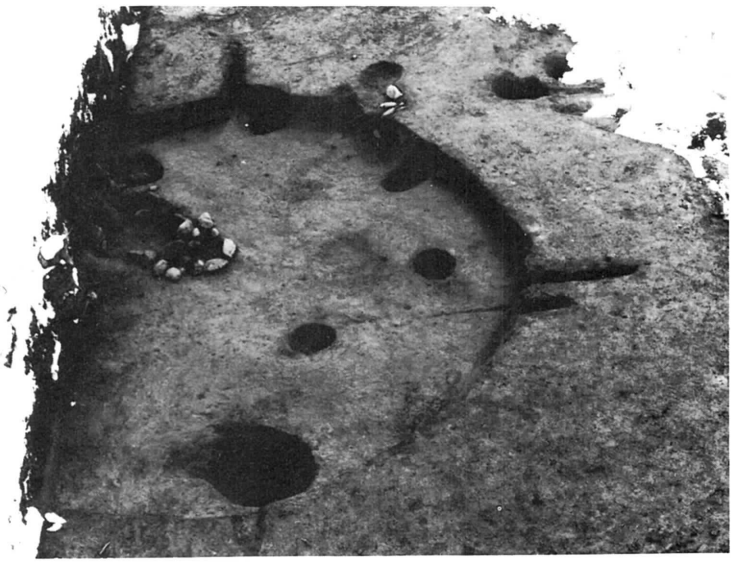


2．同上炉跡

3．同上埋設土器

図版10

1．ＧＨ56住居跡

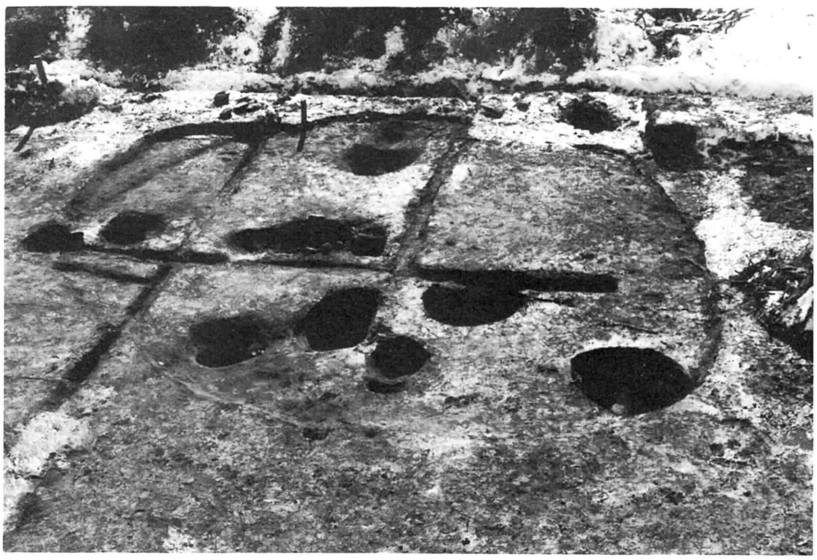


2．同上炉跡

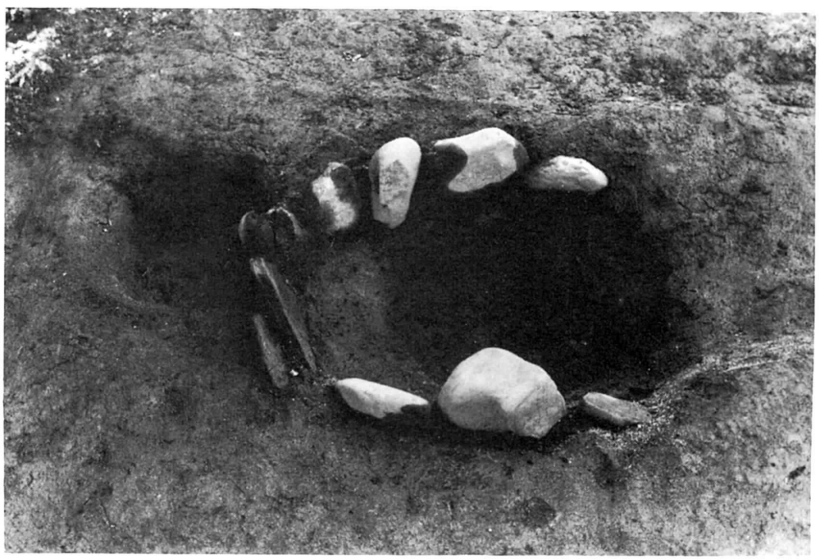
3．同上埋設土器

図版11

1．ＧＨ56住居跡
炉跡埋設土器



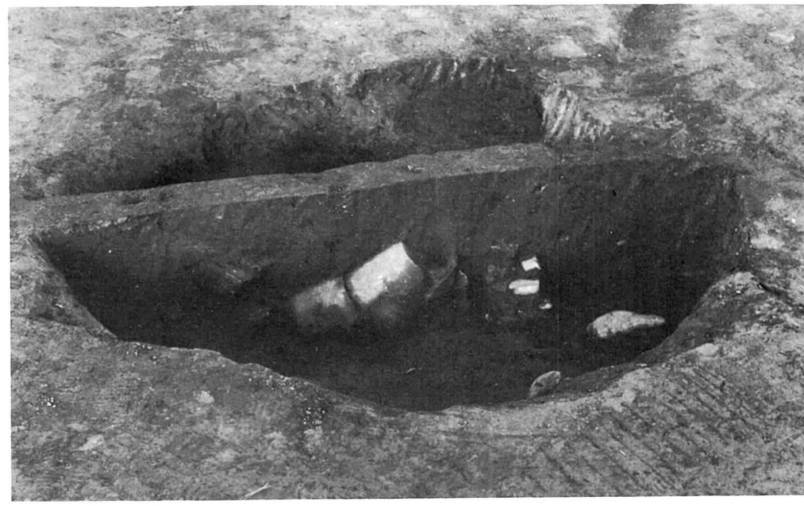
2．ＧＩ50住居跡



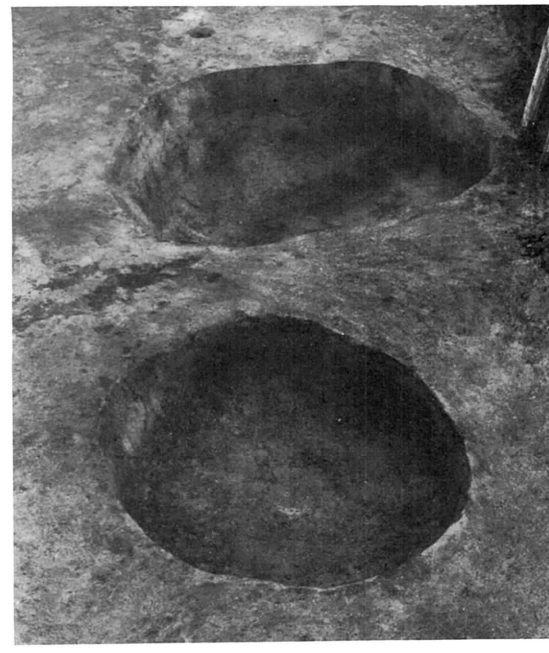
3．同上炉跡

図版12

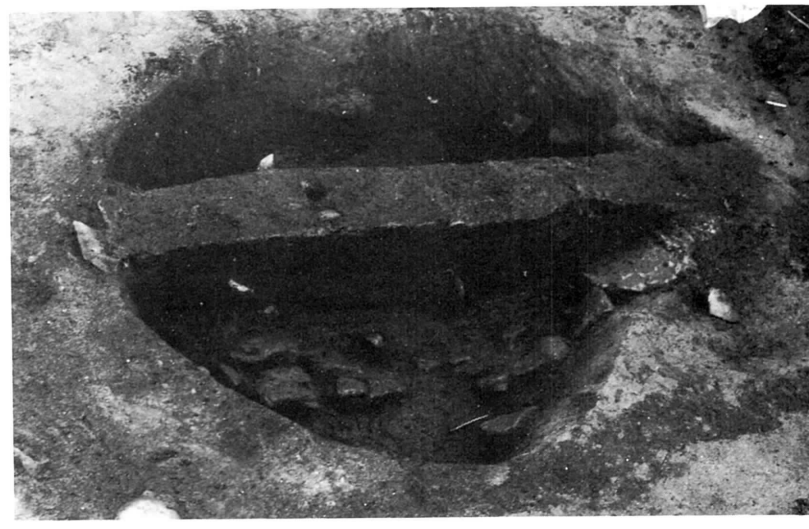
1．ＦＪ533ピット



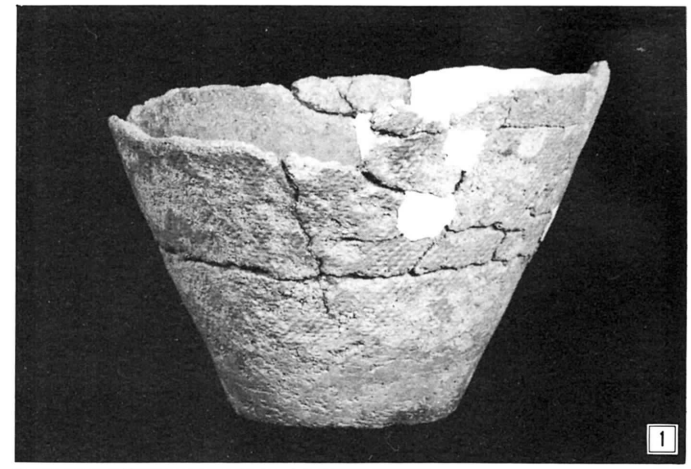
2．上・ＦＪ531ピット
　下・ＦＪ532ピット

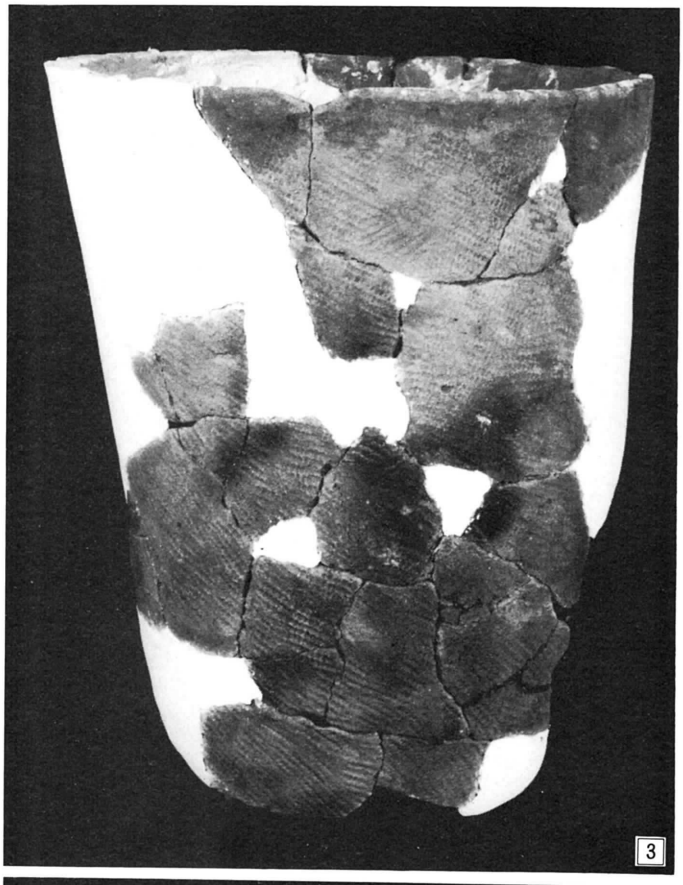


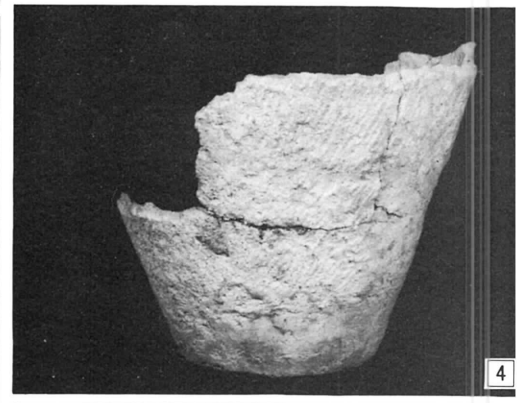
3．ＦＪ531ピット
　土器出土状況

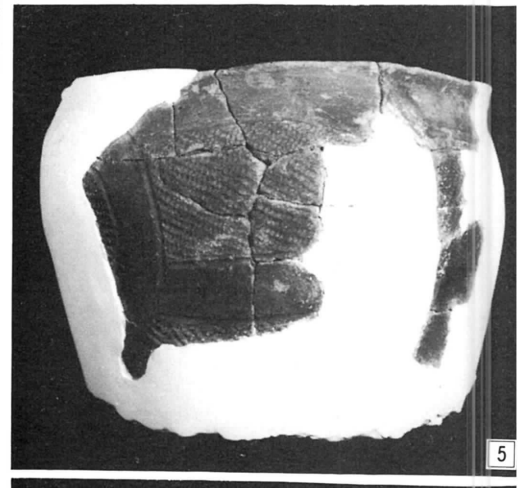


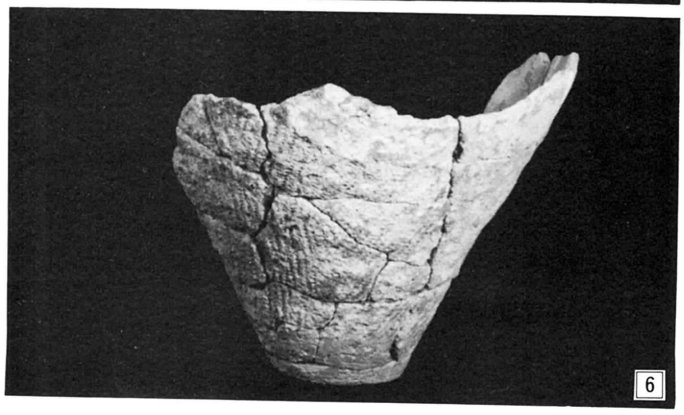
図版13





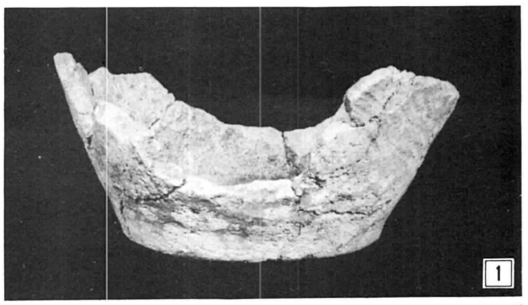


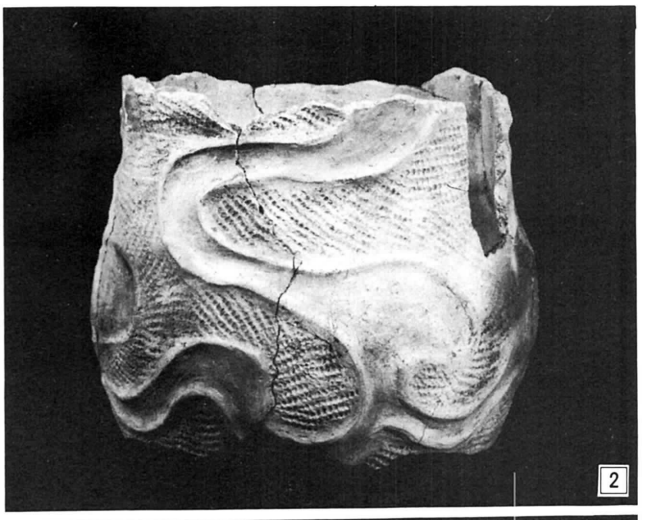


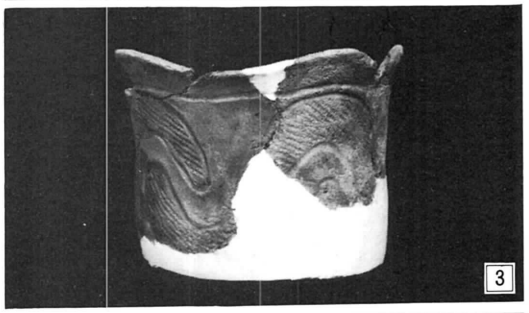


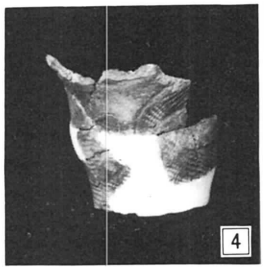
1・2．FE531住居跡出土土器(約1/4)
3～5．FG50住居跡出土土器(約1/4)
6．FJ50炉跡出土土器(約1/4)
7．FJ56炉跡(住居跡)出土土器(約1/4)

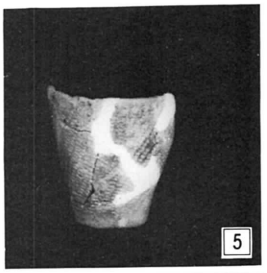
図版14

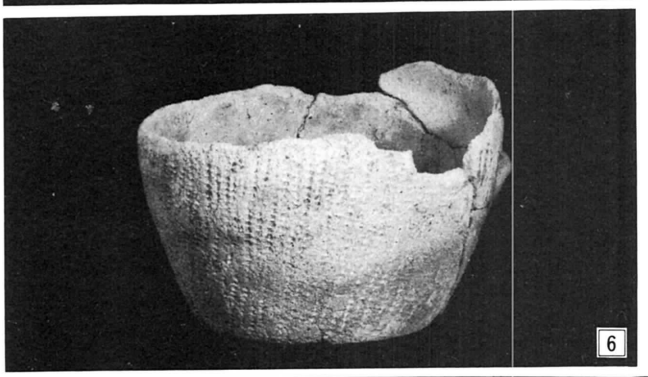


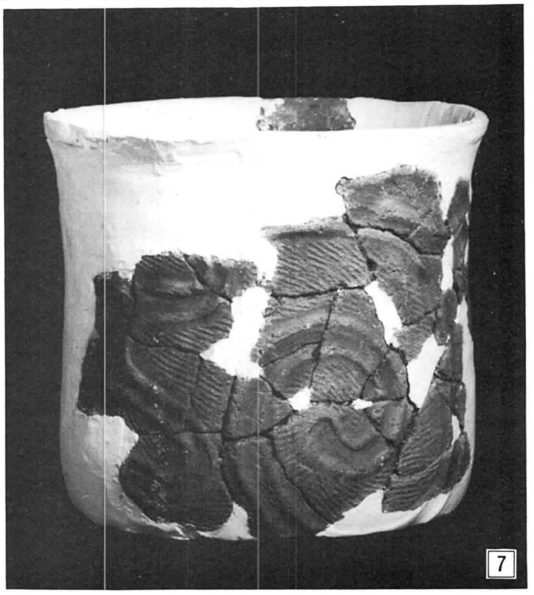






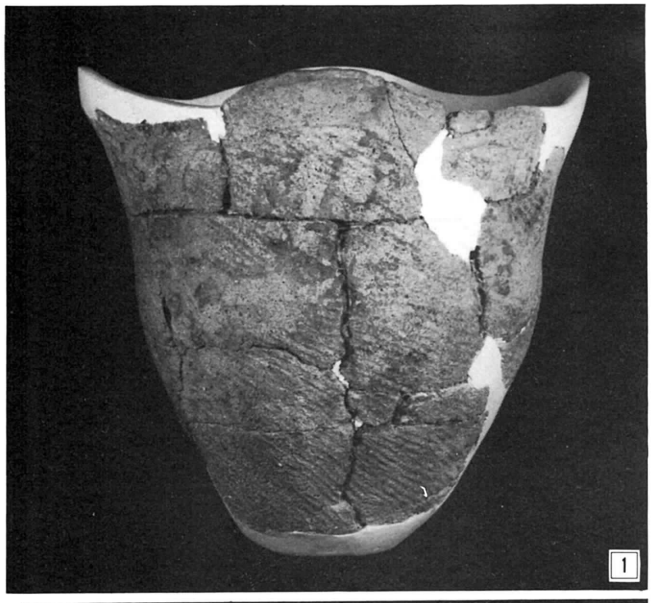


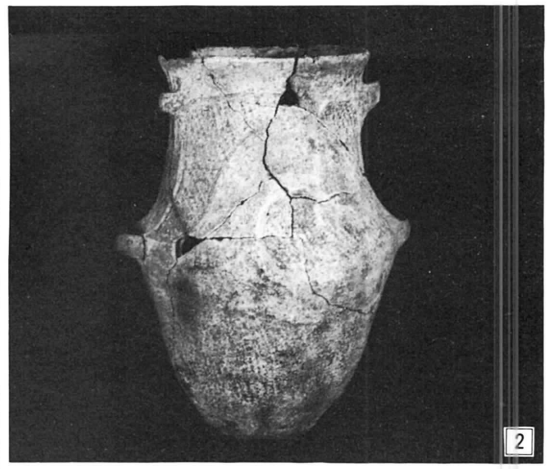


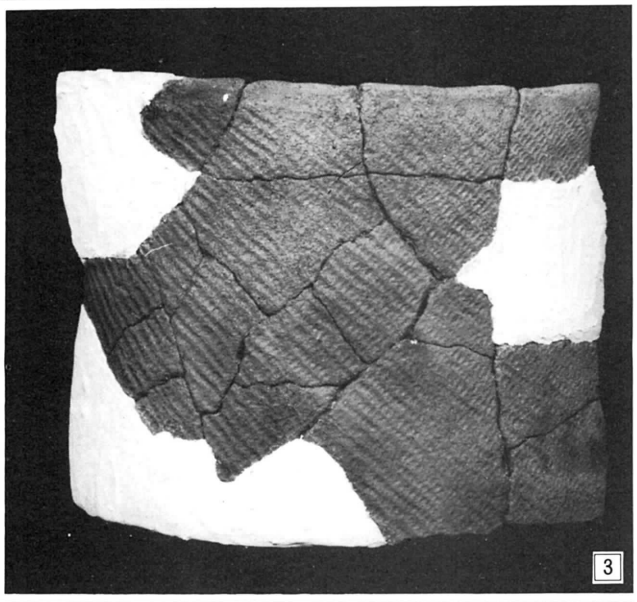


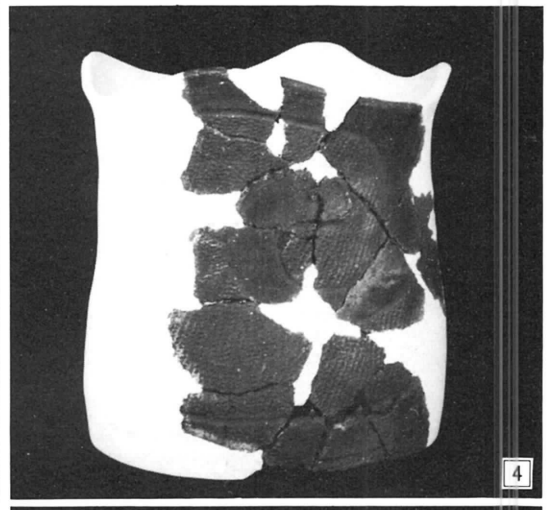
1．ＦＥ56炉跡出土土器(約¼)
2．ＦＩ56炉跡出土土器(約¼)
3～8．ＧＡ56住居跡出土土器(約¼)

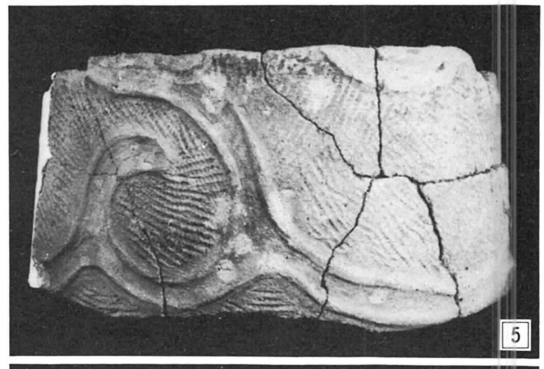
図版15

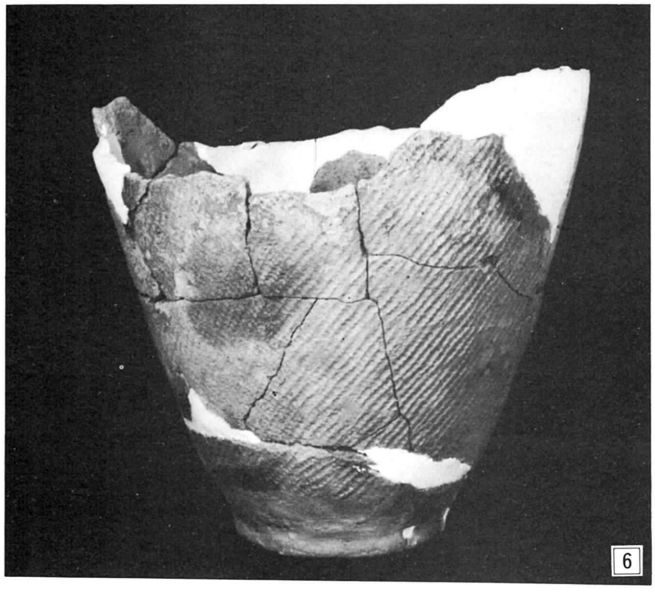


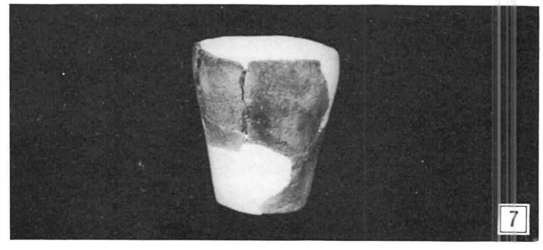






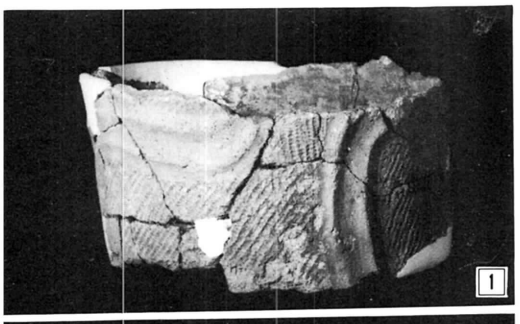


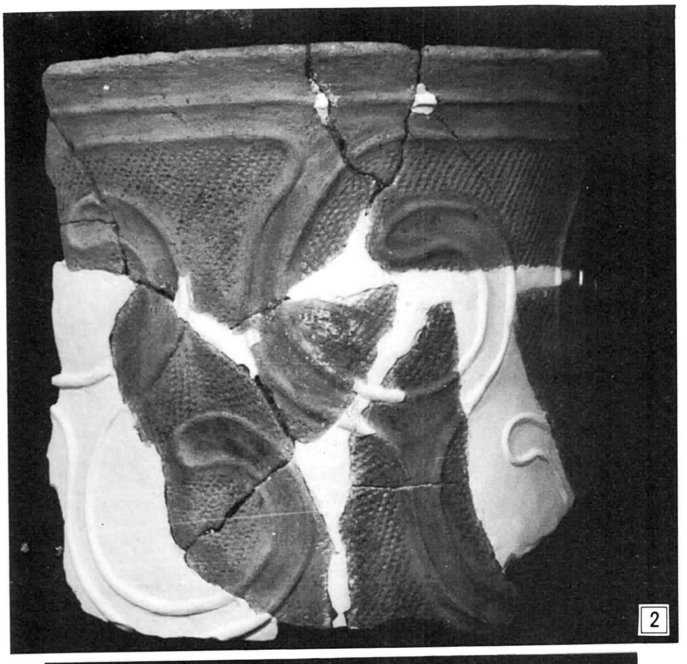


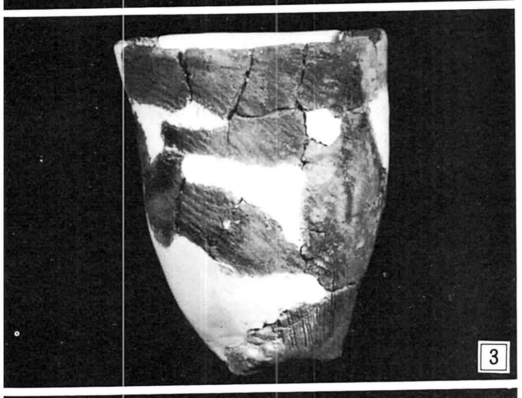


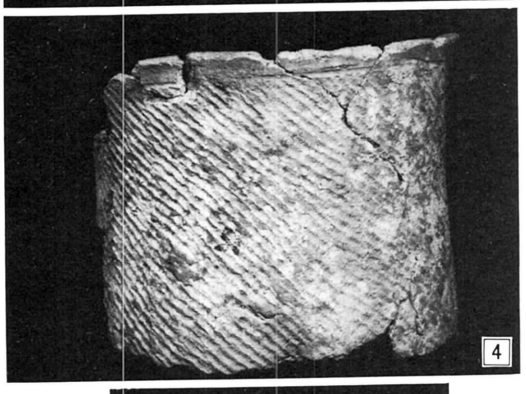
1～7．GD03住居跡出土土器(約1/4)

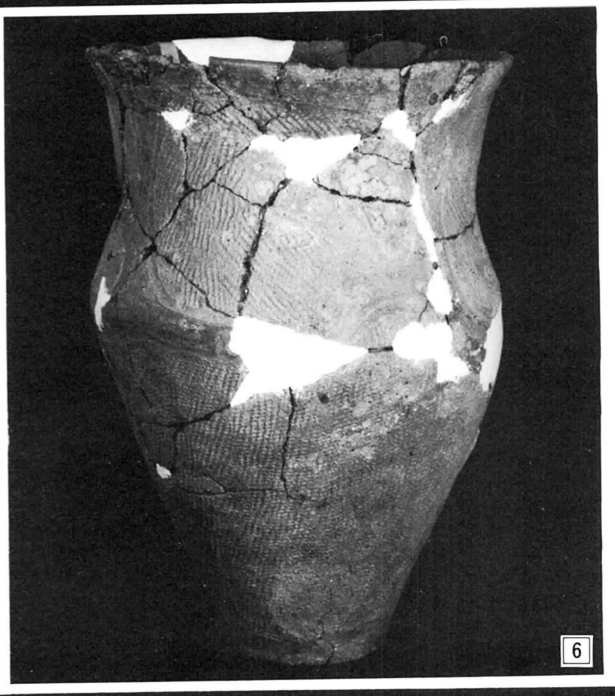
図版16

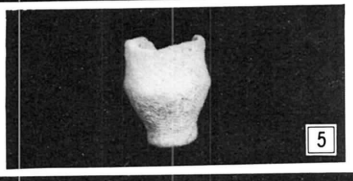


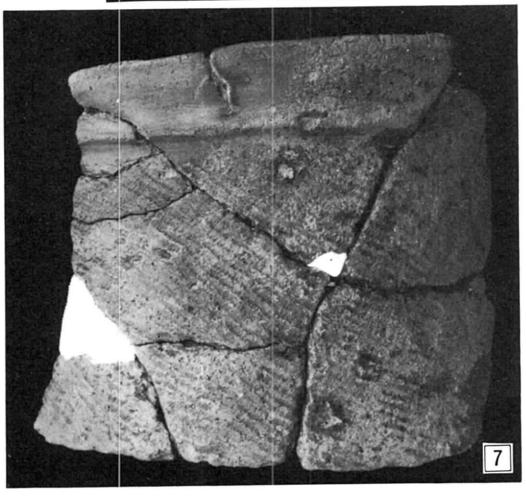


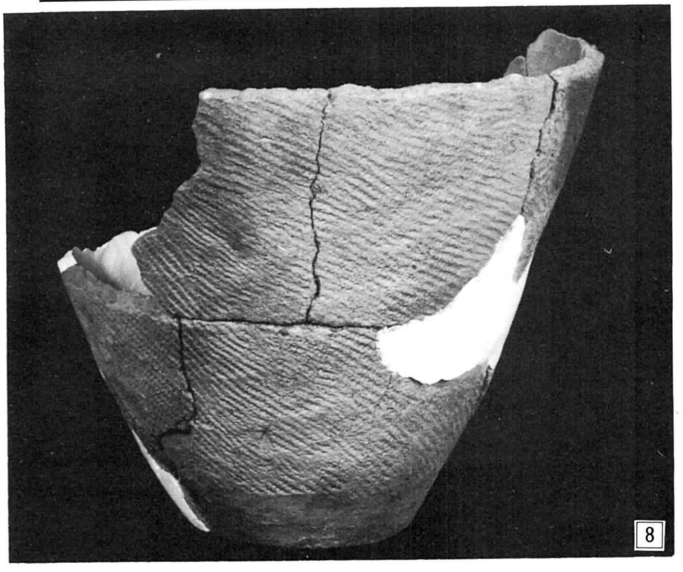










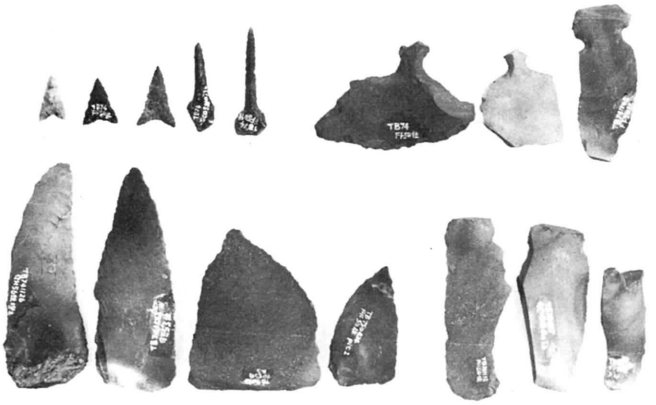


1・2.GE53住居跡出土土器(約1/4)
3～5.GI50住居跡出土土器(約1/4)
6.GH56住居跡出土土器(約1/4)
7.FJ531ピット出土土器(約1/4)
8.FJ533ピット出土土器(約1/4)

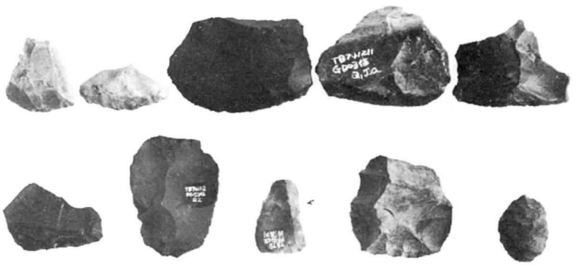
図版17

1．石器（約⅓）

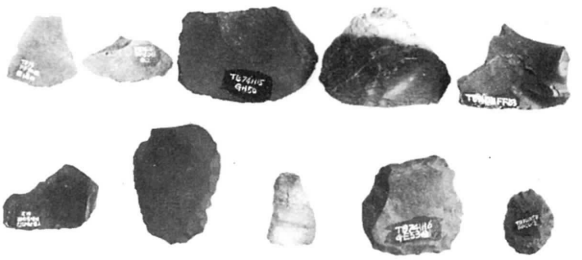
2．同上裏面



3．石器（約⅓）

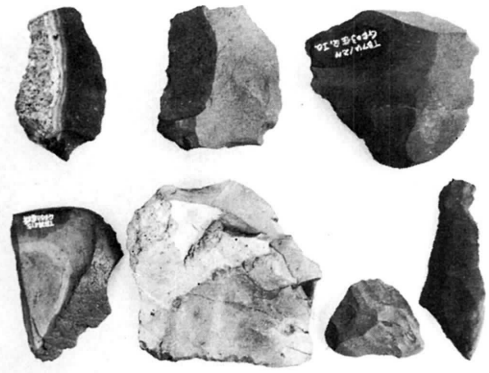


4．同上裏面

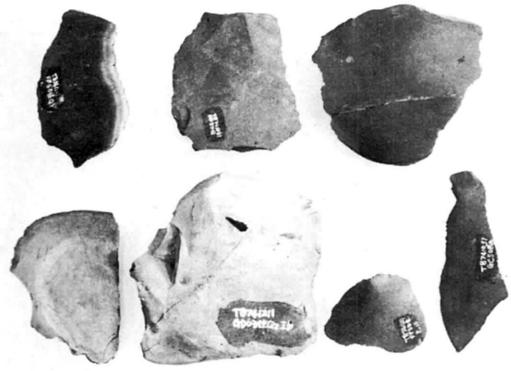


図版18

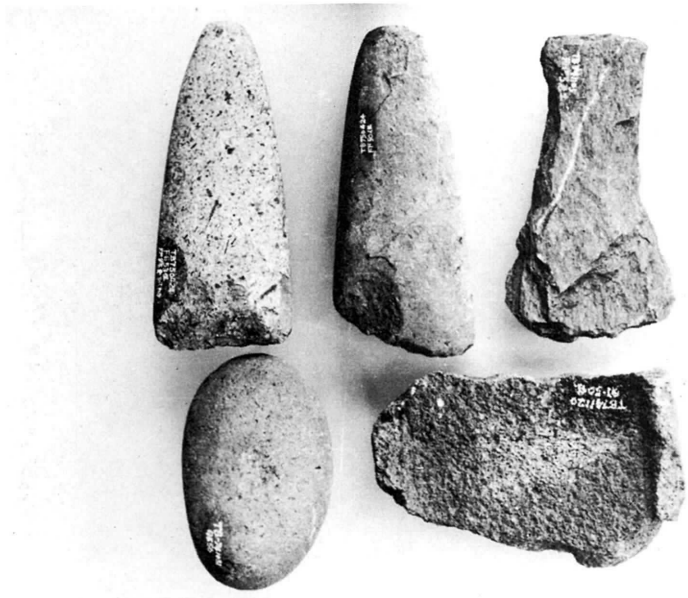
1．使用痕のある剥片（約⅓）



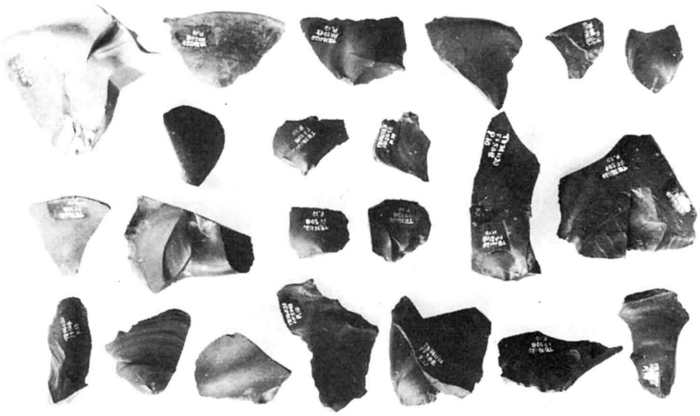
2．同上裏面



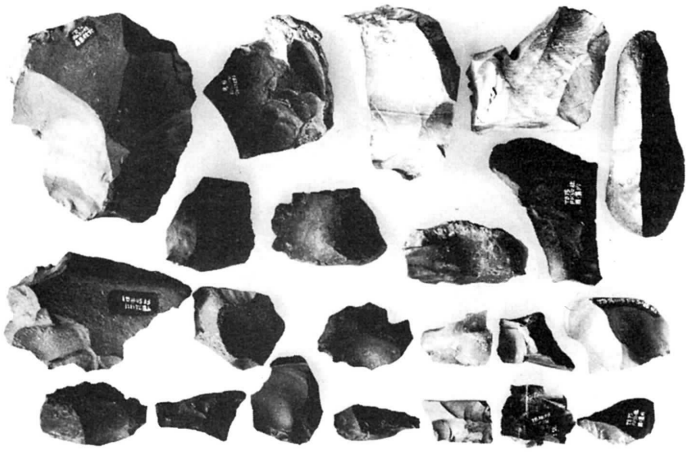
3．石器（約⅓）



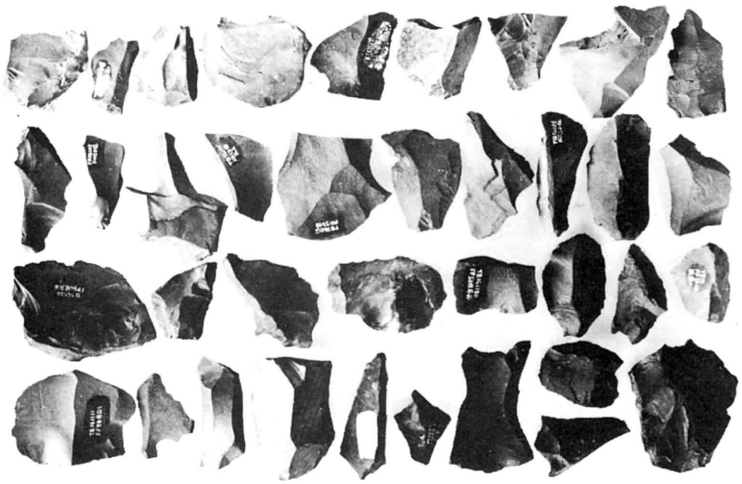
図版19



1．ＦＧ50住居跡床面及び
周溝出土剥片（約⅓）



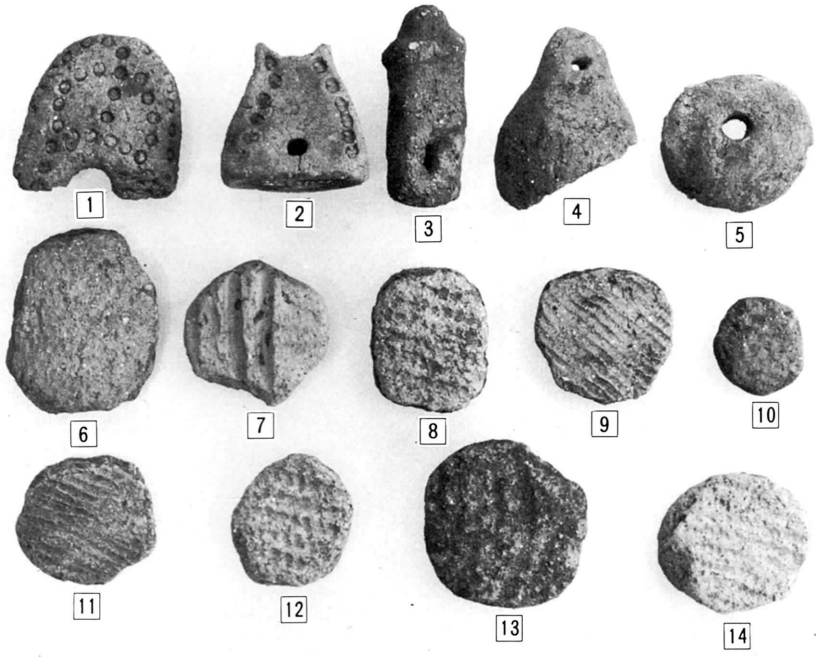
2．同上



3．ＦＧ50住居跡ピット11
出土剥片
（約⅓）（接合不能）

図版20

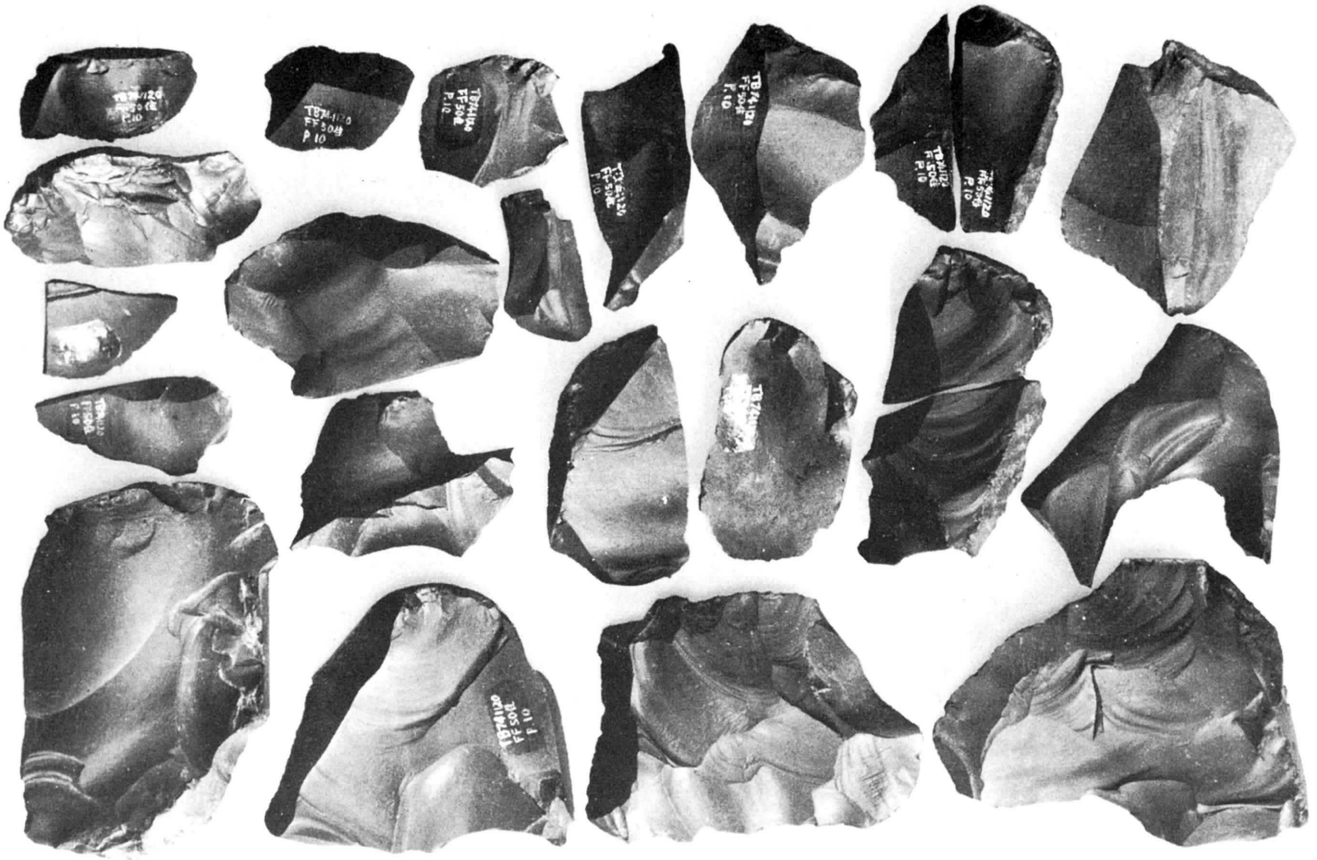
1．土製品（約½）



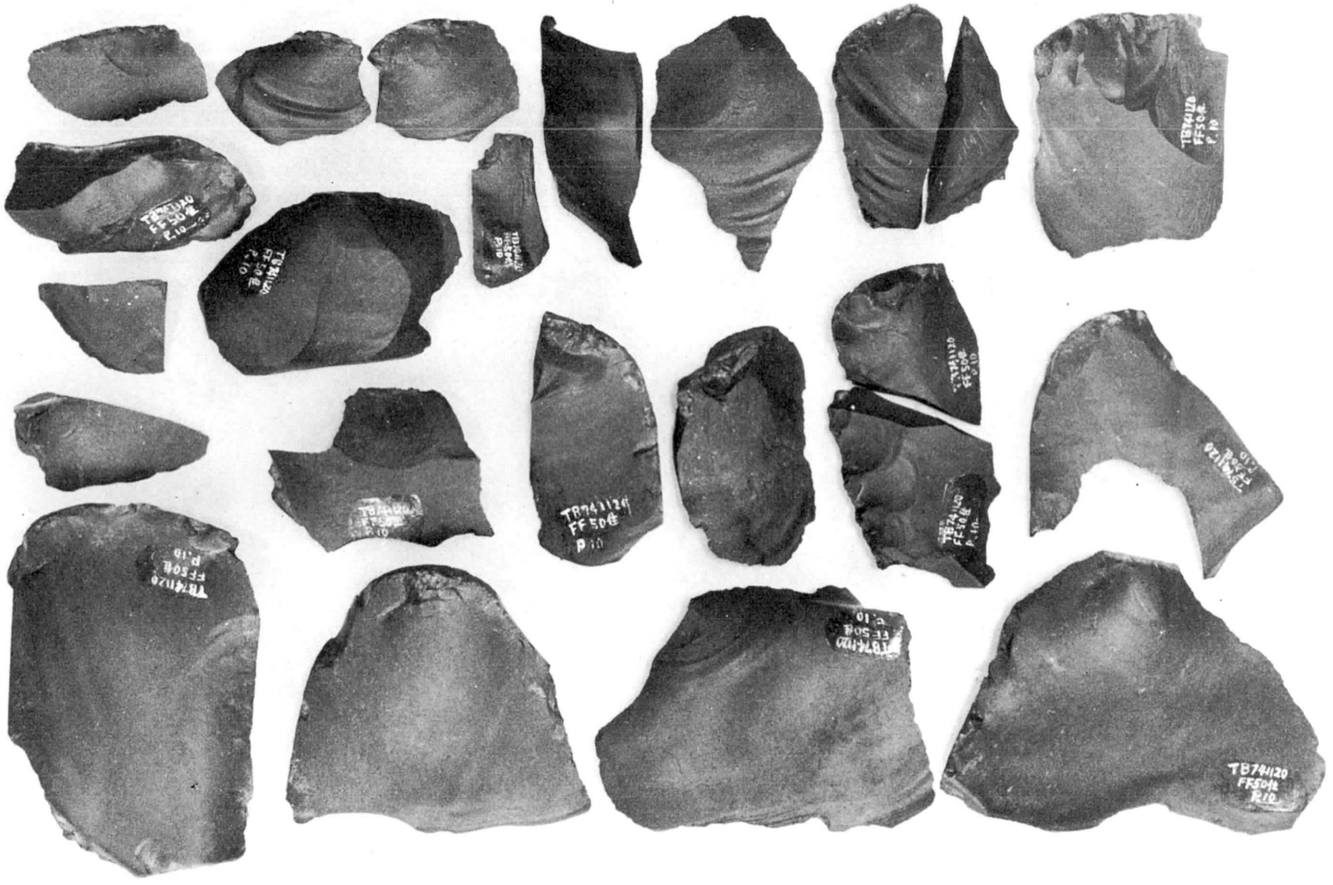
2．同上裏面

1・3・6・10．ＧＤ03住居跡　　2．ＧＥ53住居跡
4．ＧＩ50住居跡　7・8・9・11・12．ＦＧ50住居跡
5．ＧＢ53グリッド　13．ＧＧ50グリッド　14．不明

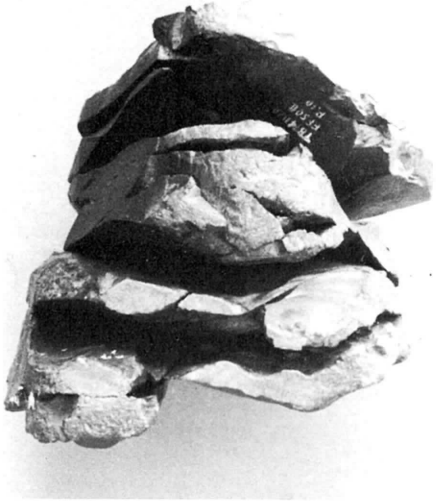
図版21



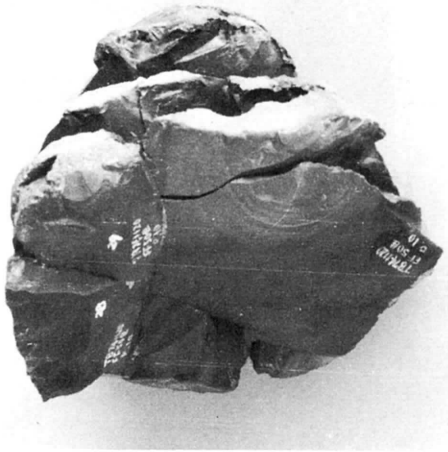
図版22　接合資料①剥片表面（約$\frac{2}{3}$）

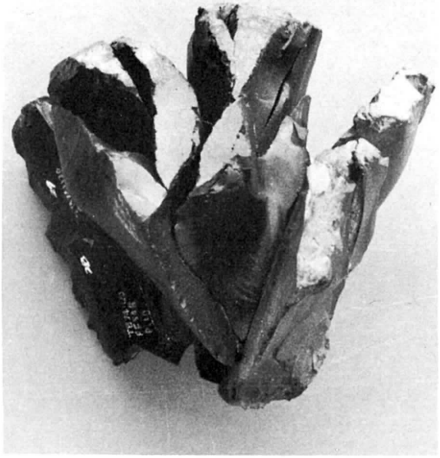


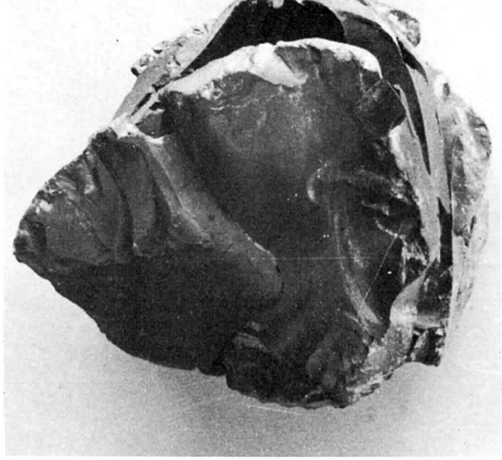
図版23　接合資料②剝片裏面（約$\frac{2}{3}$）

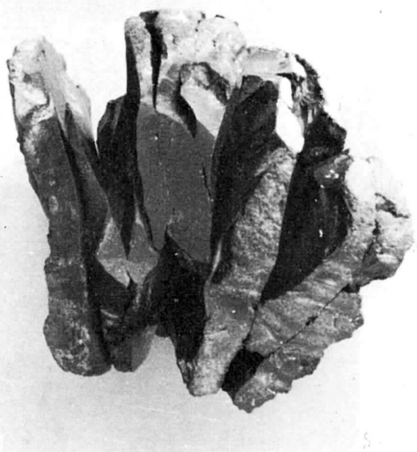


図版24　接合資料①（約$\frac{2}{3}$）

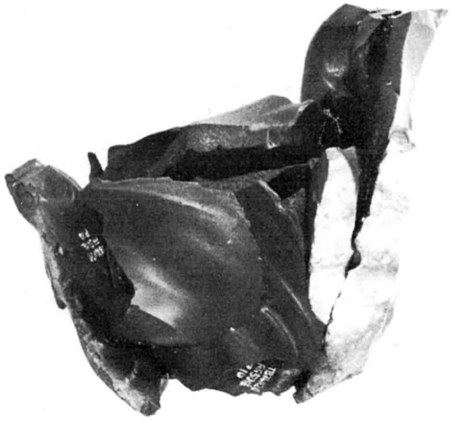


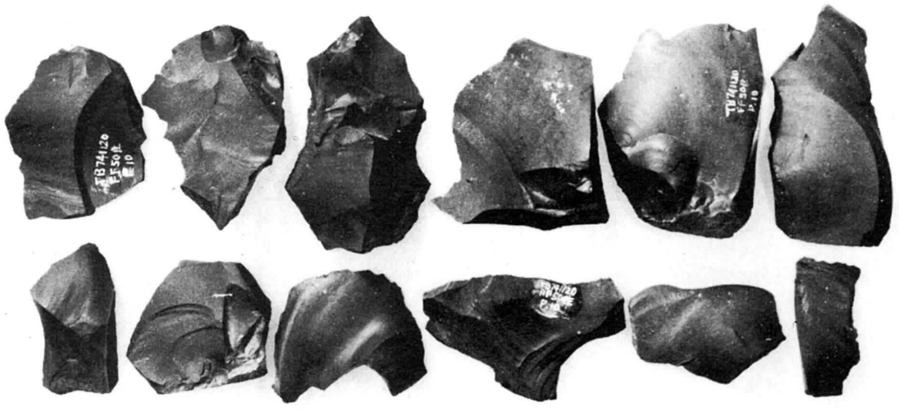


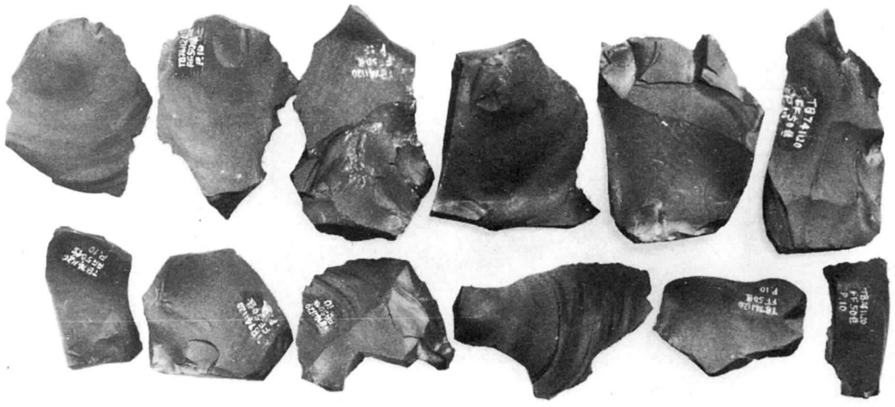




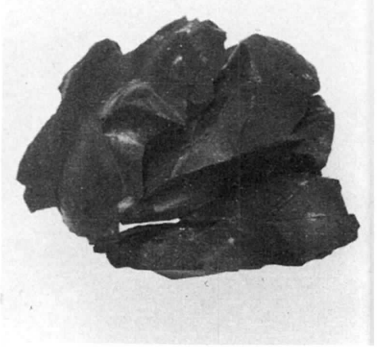
図版25　接合資料②（約$\frac{2}{3}$）

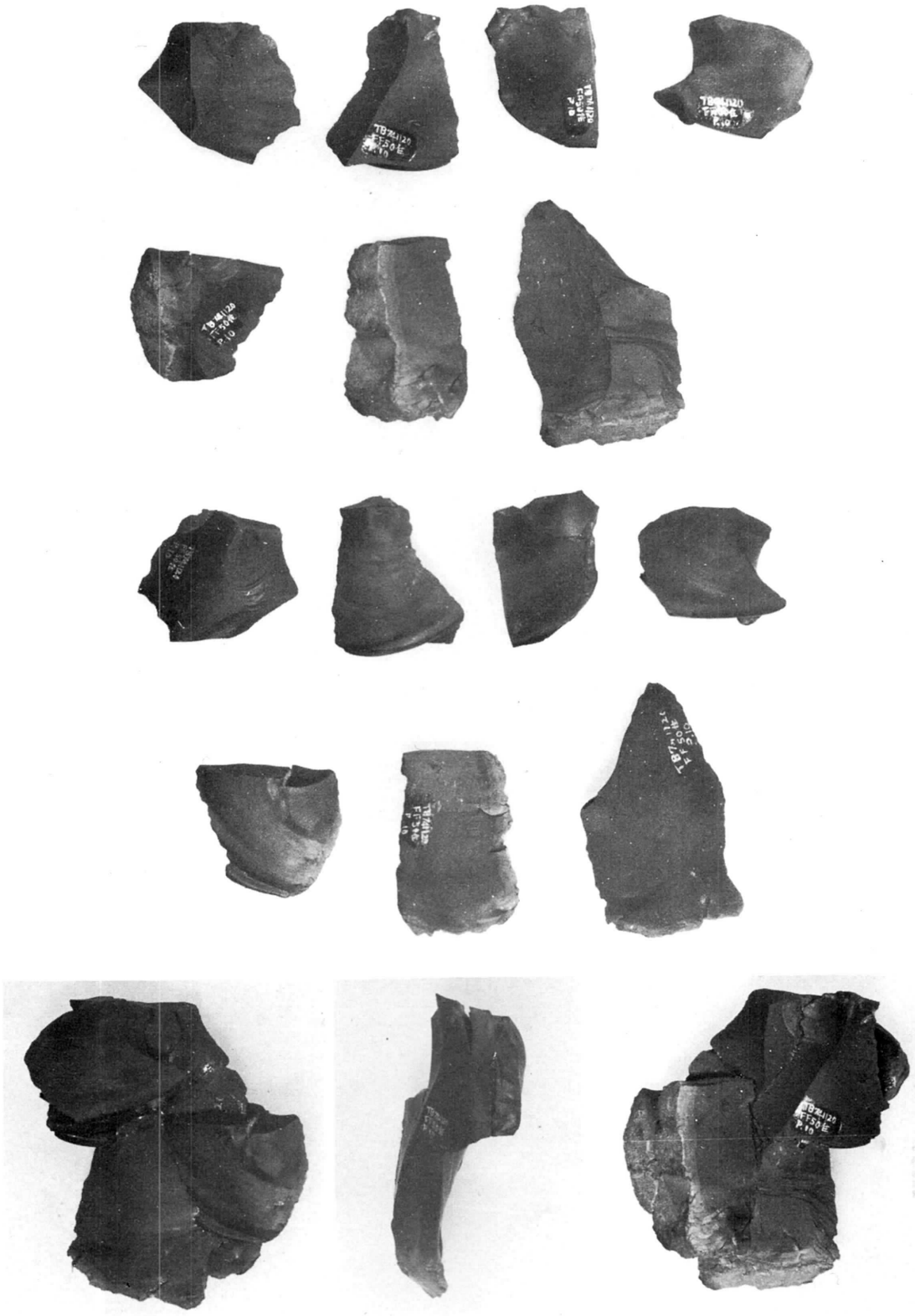




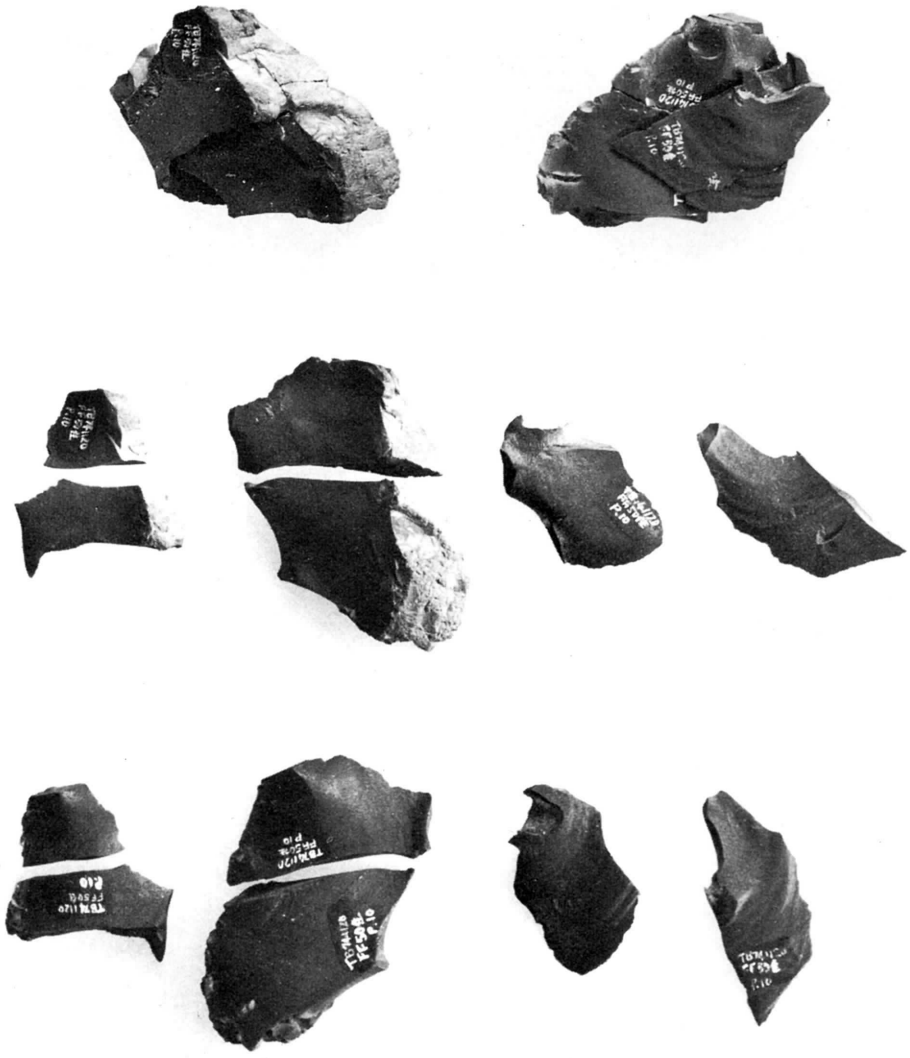


図版26　接合資料②C～F打面よりの剥片（約$\frac{2}{3}$）

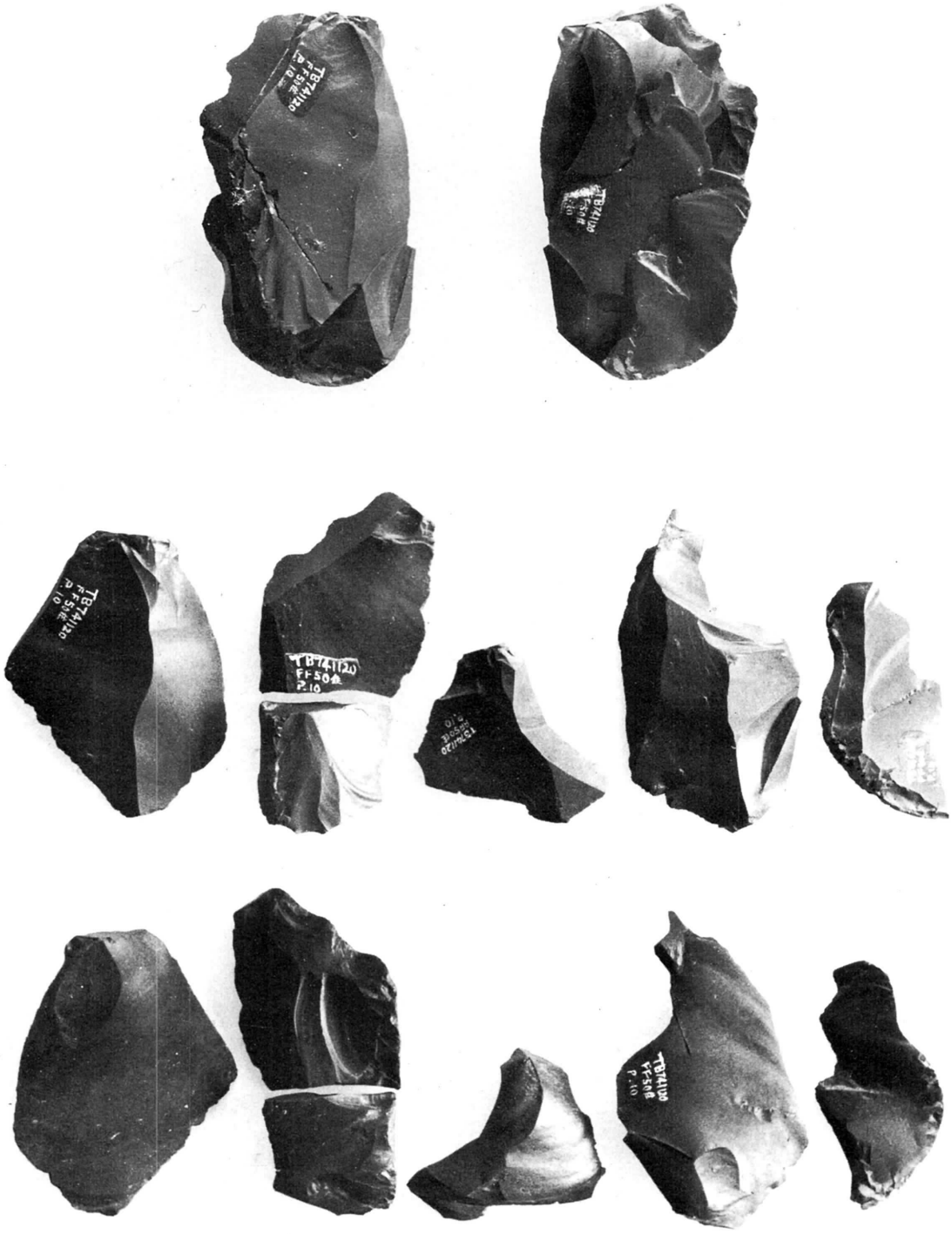




図版27　接合資料②Ａ打面よりの剥片（約$\frac{2}{3}$）

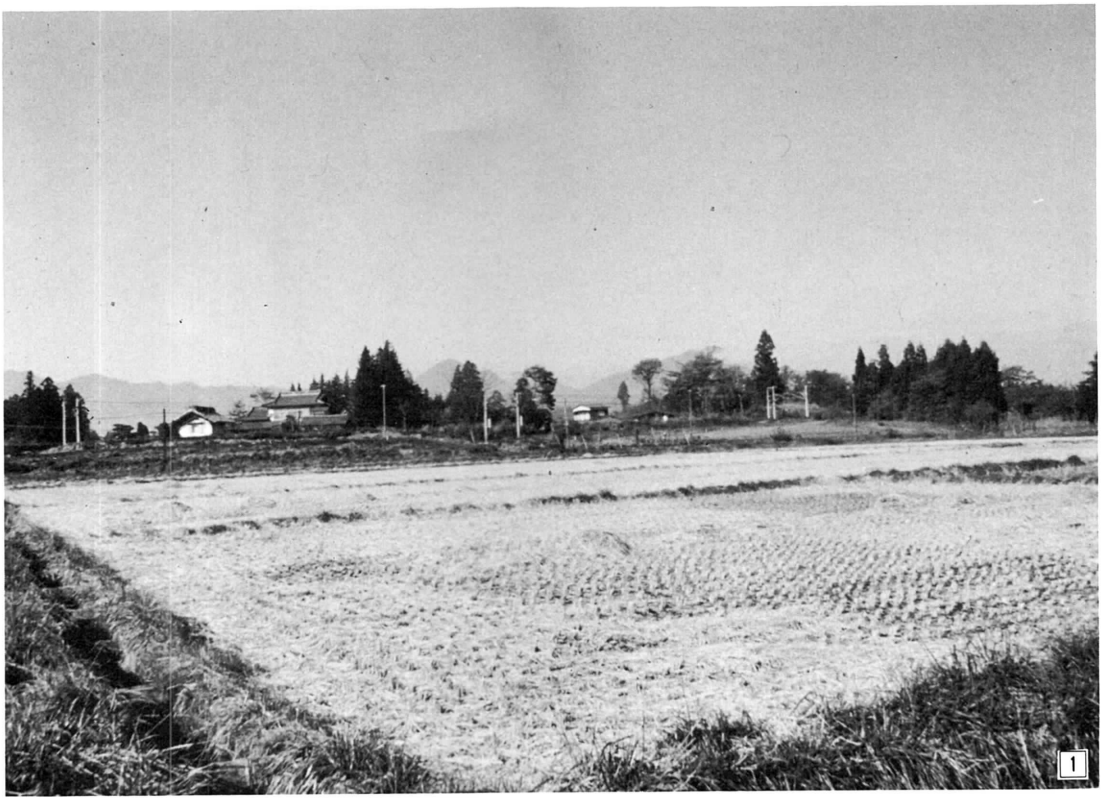


図版28　接合資料②B打面よりの剥片（約$\frac{1}{3}$）



図版29　接合資料③（約$\frac{2}{3}$）

白沢遺跡（しらさわ）



1．遺跡遠景(東から撮影)
2．調査前の遺跡南微高地の状態
　ブルドーザーによって土取りが行なわれた直後(昭和47年11月24日撮影)

図版1

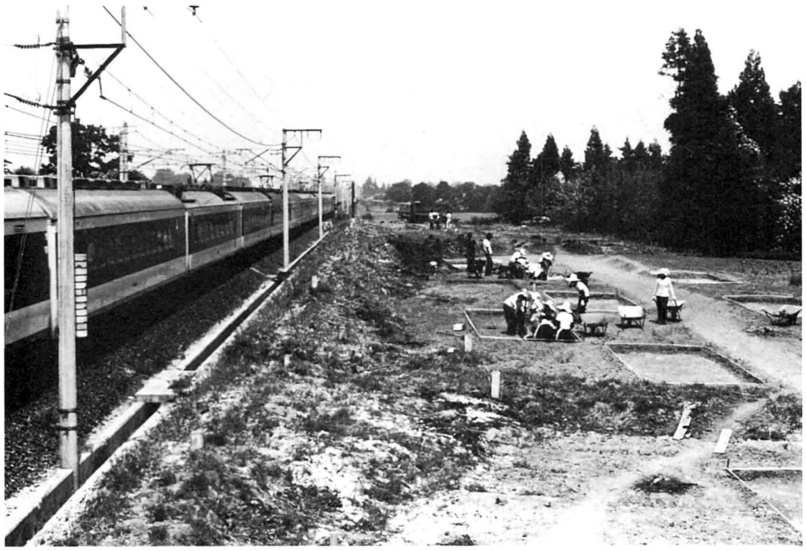
1．遺跡の南周辺部
（昭和37年調査の〝エゾ森〟附近）（北から撮影）

2．遺跡南微高地全景
（北から撮影）

3．B～Dブロック調査状況（南から撮影）

図版2

1．E、F ブロック調査状況(南から撮影)

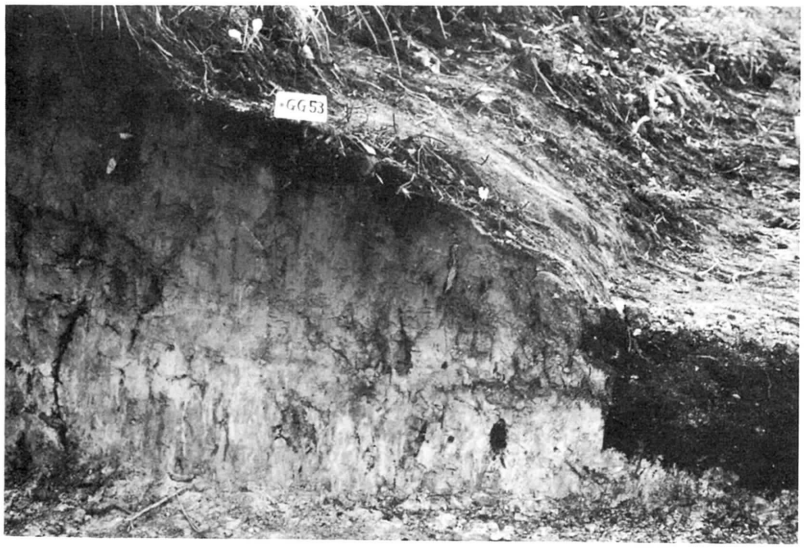


2．調査直前の南微高地の状態(南から撮影)
(周濠跡が既に見えている)

3．同上(南から撮影)

図版３

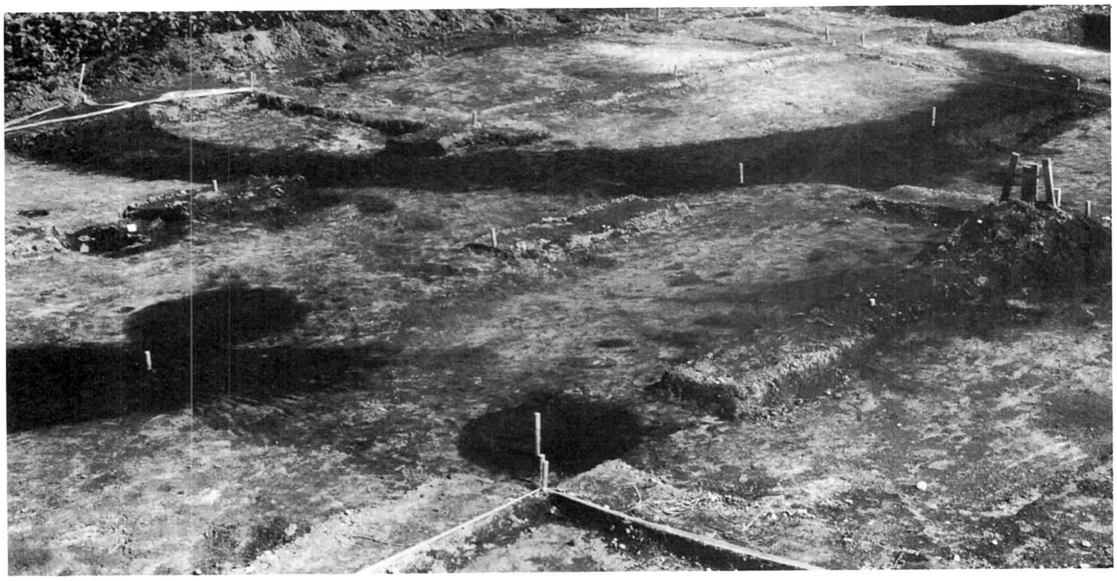
1．GG53土層断面
（北から撮影）



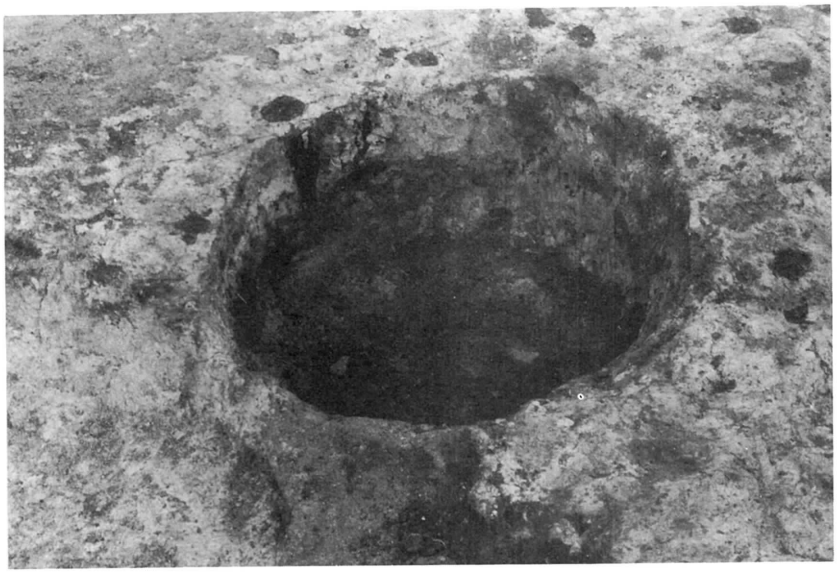
2．GG53土層断面
（東から撮影）

3．HE06土層断面
（東から撮影）

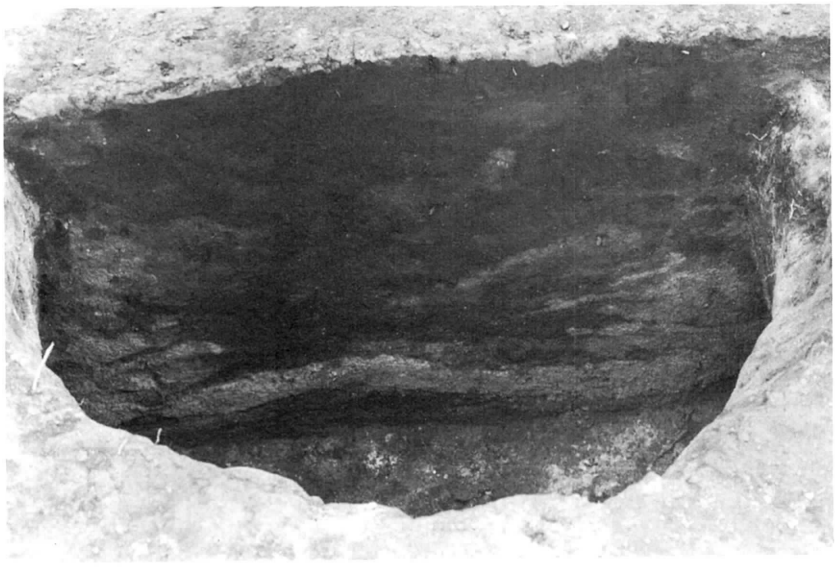
図版4



1．円形土壙検出状況
（北西から撮影）



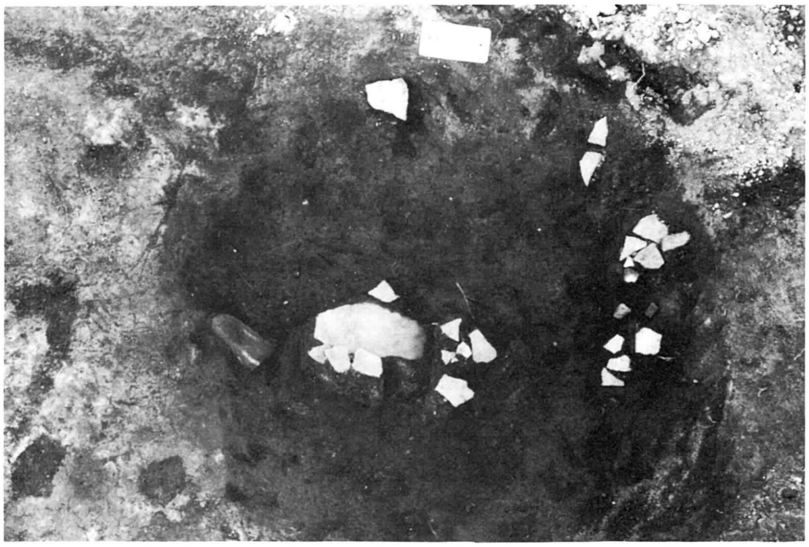
2．ＨＧ50土壙



3．ＨＧ50土壙埋土状況

図版５

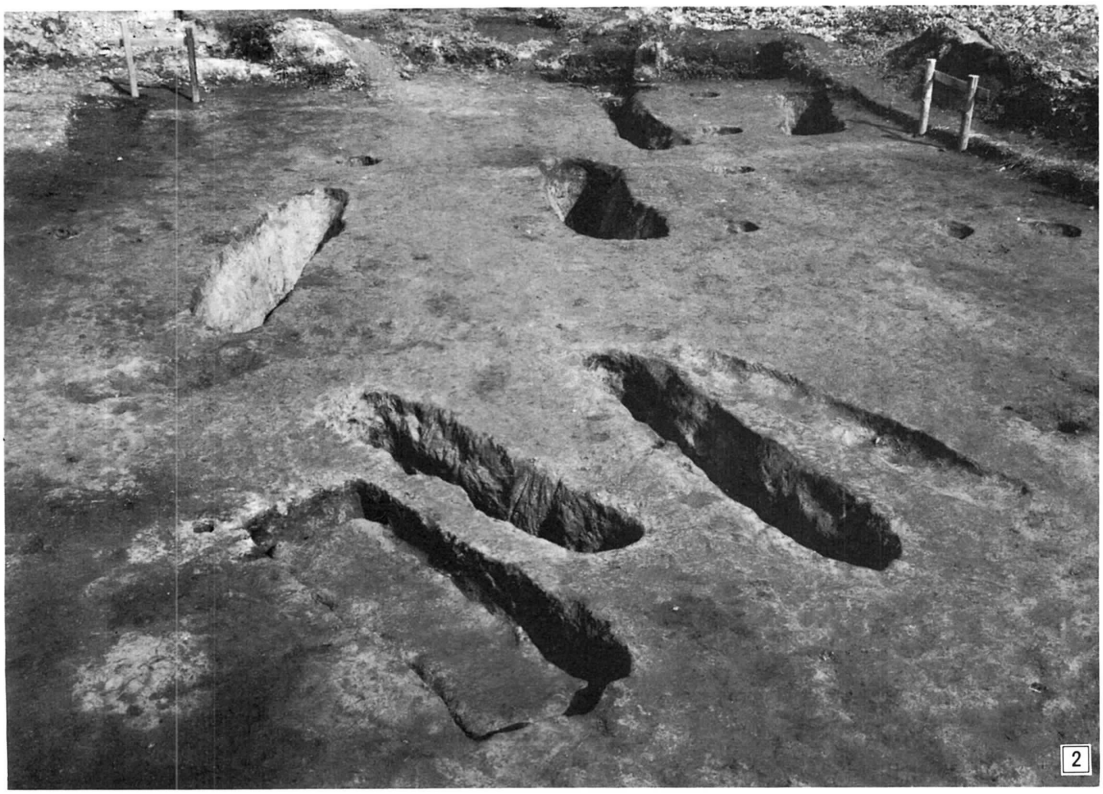
1．ＨＧ53土壙遺物出土状況



2．同上（ＨＧ３の記名はミス）

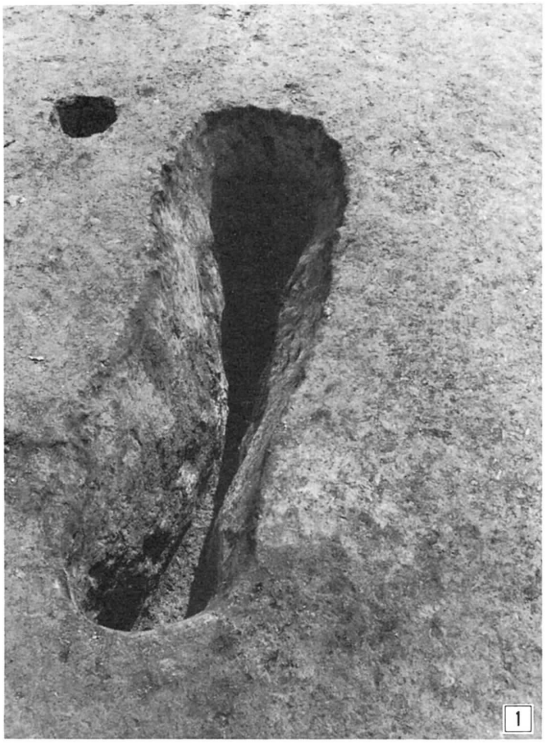
3．同上土壙

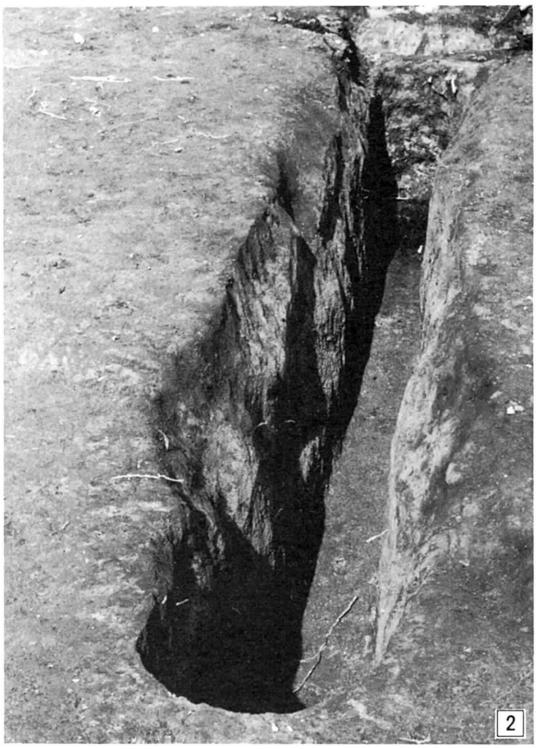
図版６

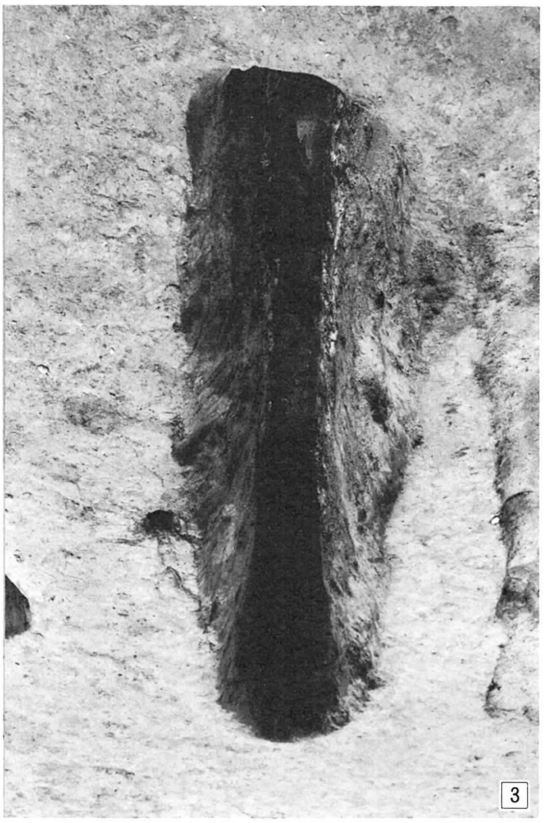


1．溝状土壙分布状況（北西から撮影）
2．同上（南から撮影）

図版７



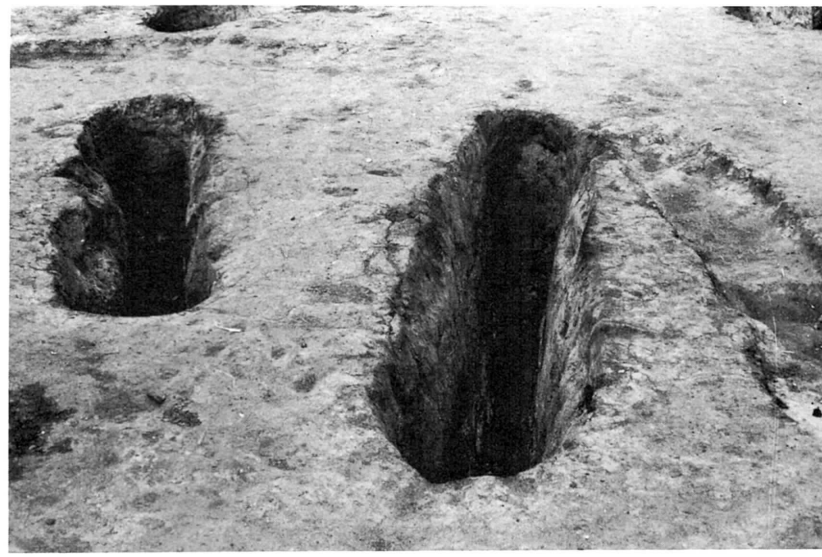




1．ＧＨ53土壙（北から撮影）　3．ＧＪ53土壙（南から撮影）
2．ＧＧ53土壙（南から撮影）　4．ＧＧ56土壙（南から撮影）

図版８

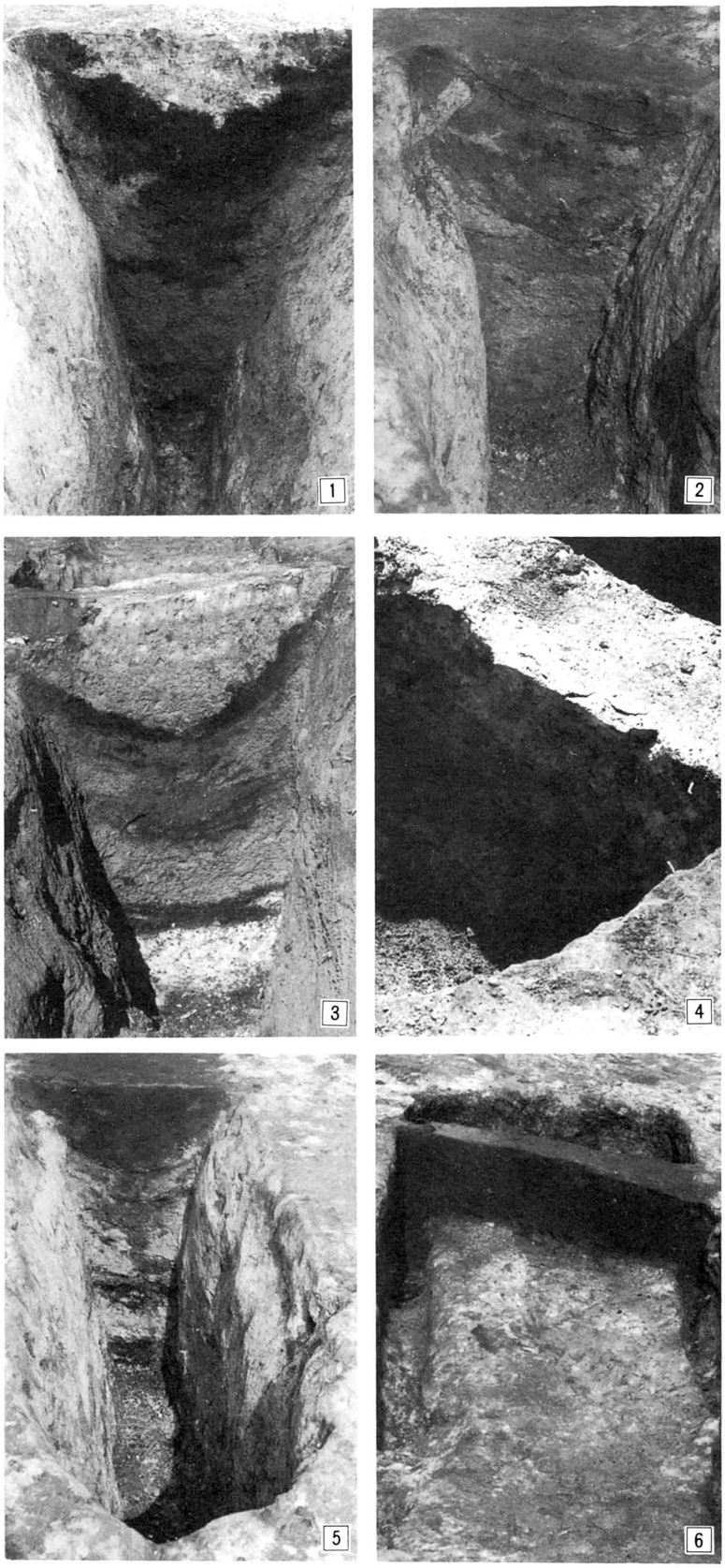
1．ＧＪ50土壙（左）
（南から撮影）



2．左から
ＨＡ50土壙（主体部）
ＧＪ50土壙
ＧＪ53土壙
（南から撮影）

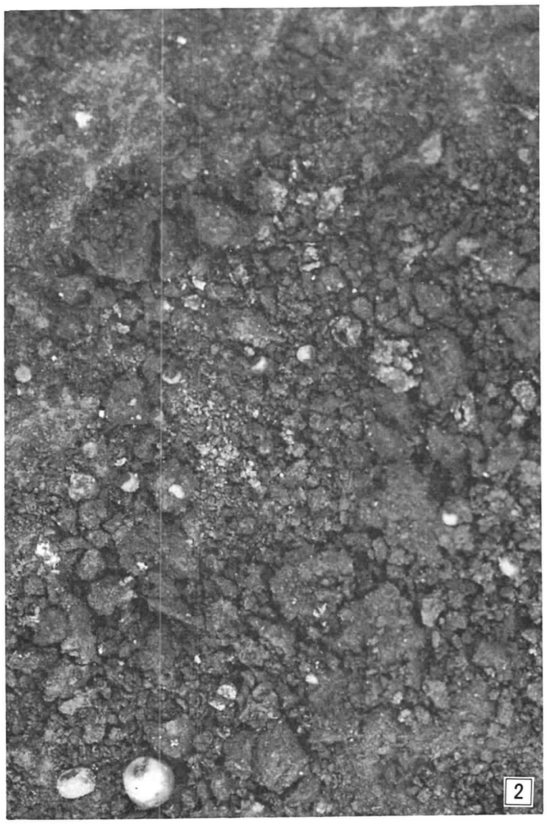
3．ＧＧ53土壙（左）
ＧＧ56土壙（右）
（南から撮影）

図版９　溝状土壙



1．ＧＪ50土壙埋土断面
2．ＧＨ53土壙埋土断面
3．ＧＩ50土壙埋土断面
4．ＧＧ56土壙埋土断面
5．ＧＪ53土壙埋土断面
6．ＧＪ03円形周湟主体部埋土断面

図版10　溝状土壙（１～５）埋土状況



1．ＧＪ03円形周湟
2．ＧＪ03円形周湟・主体部内ガラス玉出土状況
3．ＧＪ03円形周湟・主体部

1．ＨＩ50円形周湟検出状況(北から撮影)
2．円形周湟検出状況(手前はＨＣ03周湟)

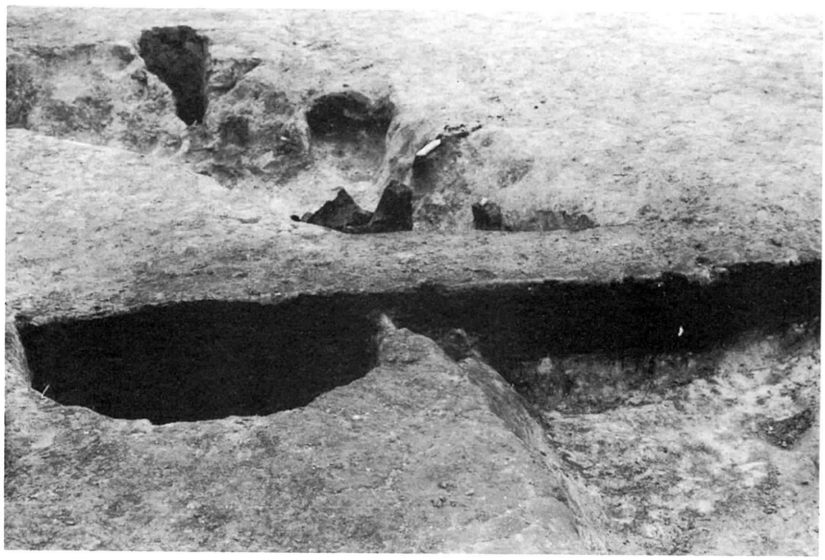
図版12　円形周湟

1．円形周湟全景（手前右・ＨＩ50周湟、左・ＨＨ03周湟）
2．同上

図版13　円形周湟

1．ＨＣ03周湟全景
（東から撮影）

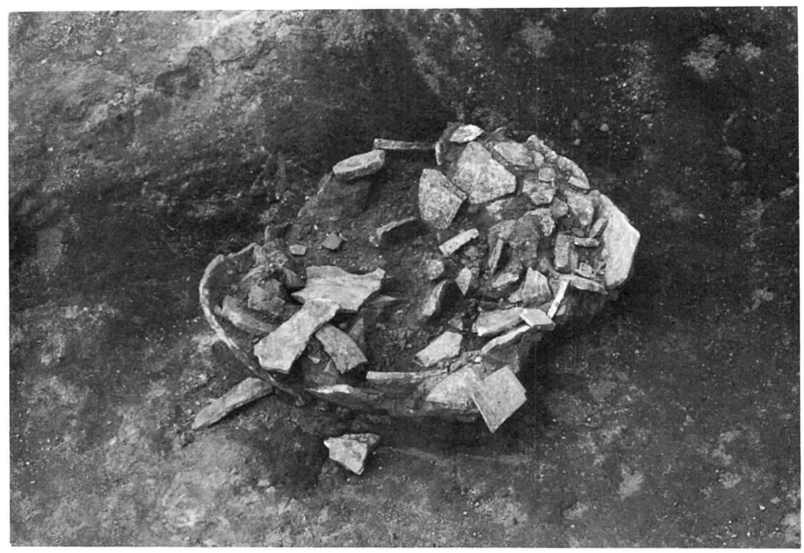
2．ＨＩ50周湟内降下火
山灰堆積状況



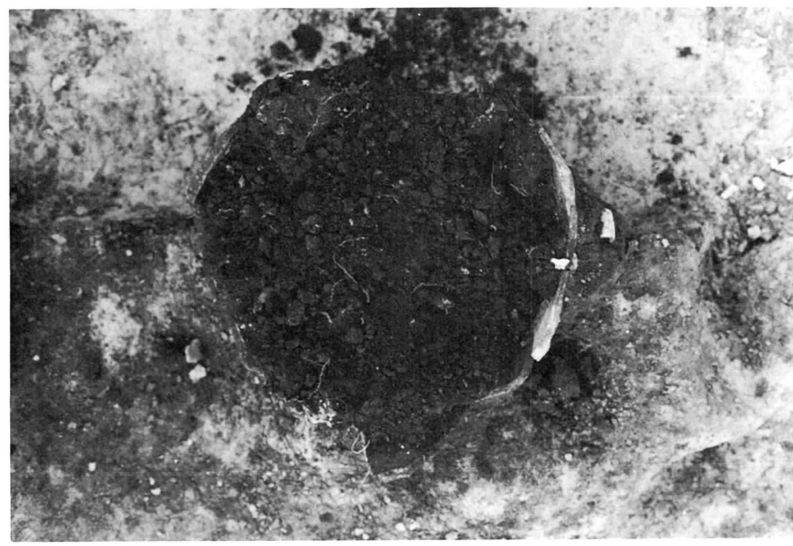
3．ＨＤ50土壙とＨＣ03
周湟の切合い状況

図版14　円形周湟

1．ＨＩ50周湟内土器の
出土状況

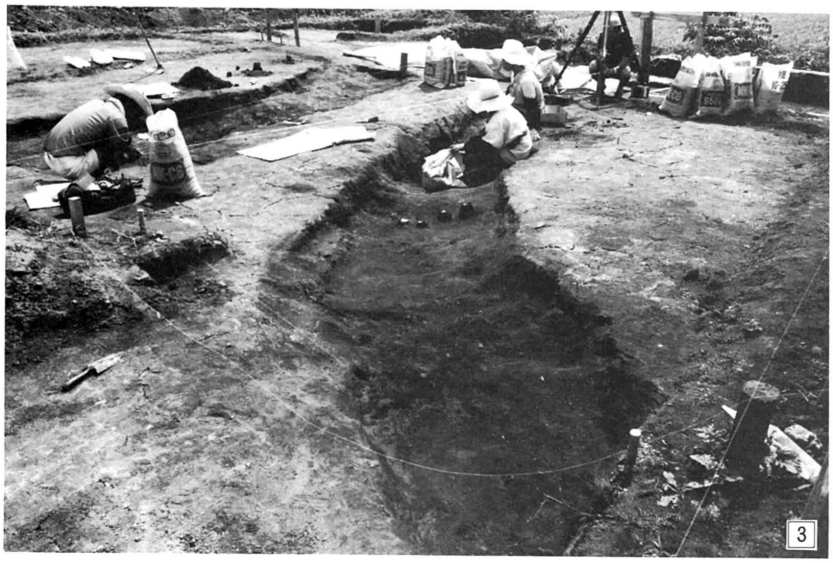


2．同上
（土器に近接して管
玉が出土した）



3．同上

図版15　ＨＩ50周湟遺物出土状況



1．ＨＩ50周湟内土器（土師器長頸壺）出土状況
2．ＨＣ03周湟内土器片出土状況
3．周湟調査風景

図版16　周湟内遺物出土状況